

秋田県文化財調査報告書第391集

## 狼 穴 IV 遺 跡

—一般国道7号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV—

2 0 0 5 · 3

秋田県教育委員会

おおかみ あな  
狼 穴 IV 遺 跡

—一般国道7号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV—

2005・3

秋田県教育委員会



狼穴IV遺跡調査区全景（真上から）



調査区遠景（北から）

## 序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備や国道の建設は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道7号大館西道路建設に先立って、平成14年度に大館市において実施した狼穴Ⅳ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では平安時代の堅穴住居跡が検出され、十和田a火山灰の降下後に営まれた10世紀代の集落の一部が見つかりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所、大館市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺 清

## 例　　言

- 1 本書は、一般国道7号大館西道路建設事業に伴い、平成14（2002）年度に発掘調査した大館市狼穴Ⅳ遺跡の発掘調査報告書である。調査の内容については、すでにその一部を埋蔵文化財センター年報などによって公表してきたが、本報告書の記載内容を正式なものとする。
- 2 本書に使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1『大館』及び国土交通省能代工事事務所提供的1千分の1地形図である。
- 3 遺跡基本層位と基本土層中の土色の表記は、農林水産省水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帳』1994年版によった。
- 4 本書に使用した空中写真は、株式会社シン技術コンサルに撮影を委託したものである。
- 5 第5章の「自然科学的分析」に示した放射性炭素年代測定、樹種同定、テフラ分析は、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した成果報告である。
- 6 本書の草稿執筆並びに編集は、新海和広が行った。
- 7 本報告書の作成にあたり、以下の方々からご指導・ご助言を頂いた。記して感謝申し上げます。  
(敬称略、五十音順)  
阿部健太郎、伊藤武士、稻野裕介、工藤雅樹、今野公顯、酒井秀治、鈴木拓也、島田祐悦、  
鳥原弘征、白鳥文雄、武田和宏、茅野嘉雄、中村真由美、平吹睦美、福田秀生、村松稔

## 凡　例

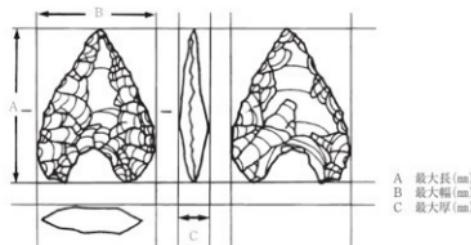
- 1 遺構番号は、その種類ごとに下記の略番号、種類ごとに検出順で通し番号を付した。精査の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。  
S I . . . 壺穴住居跡 S K . . . 土坑 S K T . . . 陥し穴状土坑 S D . . . 溝跡  
S R . . . 土器埋設遺構 S K P . . . 柱穴様ピット  
なお、遺構図面中に記したPは壺穴住居跡に伴うピット、Sは礫を示している。
- 2 遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構内層位には算用数字を使用した。
- 3 挿図中の遺物番号は、各挿図ごとに土器・石器を問わず通し番号を付し、写真図版中には●図一●と示してある。
- 4 遺構図面で、重複している遺構はそれぞれに図面を作った。そのため、重複している遺構の新段階の次に旧段階の図面を挿図として順序付けている。
- 5 挿図に使用したスクリーントーンは、下記の通りである。



- 6 土師器の実測図に用いた調整の表現は下図の通りである。



- 7 石器の計測部位は下図の通りである。計測値の単位は長さ・幅・厚さがmm、重さがgである。



## 目 次

卷頭図版

序

例言・凡例

目次

挿図・表・図版目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第2章 遺跡の環境	2
第1節 遺跡の位置と立地	2
第2節 歴史的環境	4
第3章 発掘調査の概要	7
第1節 遺跡の概観	7
第2節 調査の方法	7
第3節 調査の経過	9
第4章 調査の記録	13
第1節 基本層序	13
第2節 検出遺構と遺物	15
1 縄文時代の遺構	15
(1) 土器埋設遺構	15
(2) 陥し穴状遺構	16
2 平安時代の遺構	18
(1) 積穴住居跡	18
(2) 土坑	73
(3) 溝跡	75
3 時期不明の遺構	79
(1) 土坑	79
第3節 遺構外出土遺物	79
1 縄文時代の遺物	79
2 弥生時代の遺物	80
3 古代以降の遺物	92
第5章 自然科学的分析	83
第1節 放射性炭素年代測定	83
第2節 狼穴IV遺跡出土炭化材の樹種同定	85
第3節 狼穴IV遺跡のテフラ分析	89
第6章 まとめ	93

図版

報告書抄録

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	地形区分図	3
第3図	竪穴Ⅳ遺跡と周辺遺跡位置図	5
第4図	竪穴Ⅳ遺跡平成14年度調査範囲図	9
第5図	グリッド・遺構配置図	11-12
第6図	南東調査区基本土層図	14
第7図	北西調査区基本土層と埋設沢2断面図	15
第8図	S R21土器埋設遺構平面図・断面図と埋設土器	16
第9図	S I T41・42竪穴式土坑平面図・断面図	17
第10図	S I 01竪穴住居跡平面図・遺物出土位置図・出土遺物図	19
第11図	S I 02竪穴住居跡平面図・断面図・炭化材焼土分布図	21
第12図	S I 02竪穴住居跡遺物出土位置図	22
第13図	S I 02竪穴住居跡・カマド残存部・確認平面図	23
第14図	S I 02竪穴住居跡・カマド上面・中層遺物出土位置図	24
第15図	S I 02竪穴住居跡出土遺物図（1）	25
第16図	S I 02竪穴住居跡出土遺物図（2）	26
第17図	S I 03竪穴住居跡平面図・断面図・遺物出土位置図	28
第18図	S I 03竪穴住居跡出土遺物図	29
第19図	S I 05竪穴住居跡平面図・断面図	30
第20図	S I 05竪穴住居跡遺物出土位置図・断面図	31
第21図	S I 05竪穴住居跡・カマド残存部・確認平面図と上面・中層遺物出土位置図	32
第22図	S I 05竪穴住居跡出土遺物図	33
第23図	S I 06A竪穴住居跡平面図・断面図	35
第24図	S I 06A竪穴住居跡遺物出土位置図	36
第25図	S I 06A竪穴住居跡・カマド残存部・確認平面図と上面・中層遺物出土位置図	37
第26図	S I 06A竪穴住居跡出土遺物図	38
第27図	S I 06B竪穴住居跡平面図・断面図	40
第28図	S I 07A・B竪穴住居跡平面図・断面図・S I 07A遺物出土位置図	42
第29図	S I 07A竪穴住居跡・カマド残存部・確認平面図と上面・中層遺物出土位置図	43
第30図	S I 07A竪穴住居跡出土遺物図	44
第31図	S I 08竪穴住居跡平面図・断面図・遺物出土位置図	46
第32図	S I 08竪穴住居跡・カマド残存部・確認平面図と上面・中層遺物出土位置図・出土遺物図	47
第33図	S I 09竪穴住居跡平面図・断面図	49
第34図	S I 09竪穴住居跡遺物出土位置図	51
第35図	S I 09竪穴住居跡炭化材分布図・カマド残存部・確認平面図と上面遺物出土位置図	52
第36図	S I 09竪穴住居跡出土遺物図	53
第37図	S I 15竪穴住居跡平面図・断面図	54
第38図	S I 10竪穴住居跡平面図・断面図	56
第39図	S I 10竪穴住居跡・カマド残存部平面図・出土遺物図	57
第40図	S I 11竪穴住居跡平面図・断面図・出土遺物図	58
第41図	S I 14竪穴住居跡平面図・断面図	60
第42図	S I 12竪穴住居跡平面図・断面図	61
第43図	S I 12竪穴住居跡断面図・遺物出土位置図・出土遺物図	63
第44図	S I 18竪穴住居跡平面図・断面図	64
第45図	S I 13竪穴住居跡平面図・断面図・遺物出土位置図	66
第46図	S I 13竪穴住居跡・カマド残存部平面図・確認平面図と遺物出土位置図・出土遺物図	67
第47図	S I 16竪穴住居跡平面図・断面図	69
第48図	S I 16竪穴住居跡・カマド残存部平面図・確認平面図と遺物出土位置図・出土遺物図	70
第49図	S I 17竪穴住居跡平面図・断面図・遺物出土位置図	71
第50図	S I 17竪穴住居跡出土遺物図	72
第51図	S K31・32・33土坑平面図・断面図・出土遺物図	74
第52図	S D51・52溝跡平面図・断面図	76
第53図	S D55溝跡平面図・断面図	78
第54図	遺構外出土土器	80
第55図	遺構外出土石器	81
第56図	遺構外出土土器・土製品	82
第57図	竪穴Ⅳ遺跡における堆植物の特徴	92
第58図	火山ガラスの屈折率とそのタイプ	92
第59図	竪穴Ⅳ遺跡の遺構変遷図	95
第60図	竪穴Ⅳ遺跡出土甕の分類（1）	98
第61図	竪穴Ⅳ遺跡出土甕の分類（2）	99
第62図	竪穴Ⅳ遺跡出土不集成	101

## 表 目 次

第1表	狼穴IV遺跡周辺の遺跡一覧	6
第2表	放射性炭素年代測定および曆年代較正の結果	84
第3表-1	狼穴IV遺跡の住居跡出土炭化材樹種同定結果 1	87
第3表-2	狼穴IV遺跡の住居跡出土炭化材樹種同定結果 2	88
第4表	狼穴IV遺跡の住居跡別の検出樹種（平安時代中頃）	88
第5表	堆積物の鉱物分析結果一覧	91
第6表	火山ガラスの屈折率測定結果	91
第7表	住居跡別出土土器の傾向	100

## 図 版 目 次

巻頭図版1 狼穴IV遺跡調査区全景  
巻頭図版2 狼穴IV遺跡遠景（北から）

図版1	狼穴IV遺跡遠景（南から）
図版2	狼穴IV遺跡遠景（西から）
図版3	南東調査区全景
図版4	S I 02周辺遺構
図版5	S I 06周辺遺構
図版6	調査前全景・調査区近景（南東調査区）
図版7	基本土層・埋没沢2断面
図版8	人為堆積による埋没状況（S I 02）・自然堆積による埋没状況（S I 09）
図版9	焼失家屋の発掘状況1（S I 02）・焼失家屋の発掘状況2（S I 09）
図版10	炭化材に絡む繩状のもの（S I 02）・曲げ物と思われる炭化物（S I 02）
図版11	カマドの残存状況1（S I 02）・カマドの残存状況2（S I 07A）
図版12	貼床下の地山掘削状況（S I 03）・柱穴に見られる工具痕（S I 05）
図版13	土坑の人为堆積土（S K 51）・遺物出土状況（S I 09）
図版14	S I 01（確認・完掘・断面・焼土範囲）
図版15	S I 02（炭化材出土状況・完掘）
図版16	S I 02（確認・炭化材出土状況・S I 02）・出土炭化材1・出土炭化材2・カマド確認・カマド周辺遺物・カマド撮影写真
図版17	S I 03（完掘・断面・確認状況・撮影完掘）
図版18	S I 05（完掘・カマド完掘）
図版19	S I 05（南北断面1・南北断面2・確認・カマド断面・P 2断面・P 2完掘と工具痕）
図版20	S I 06A（カマド完掘・完掘）
図版21	S I 06A（確認状況と周辺部・断面・カマド断面）・S I 06B（P 1断面）
図版22	S I 07A（完掘・断面・確認状況・カマド完掘）
図版23	S I 07A（カマド完掘2）S I 07B（完掘）
図版24	S I 08（完掘・確認・カマド周辺遺物・断面）
図版25	S I 09（カマド完掘・完掘）
図版26	S I 09（確認・焼土範囲・遺物出土状況・出土炭化材・カマド断面・P 3断面・東西断面・南北断面）
図版27	S I 10（完掘・カマド完掘・カマド断面・断面）
図版28	S I 11（確認・P 1断面・断面・完掘）
図版29	S I 12（確認・断面・完掘）
図版30	S I 13（完掘・断面・確認・遺物出土状況・カマド断面・カマド完掘）
図版31	S I 14（完掘・P 1断面・P 2断面）・S I 16（断面・カマド確認・カマド完掘）
図版32	S I 17（完掘・東北～南西断面・北西～東北断面・確認・遺物出土状況）
図版33	S I 18（完掘）・S R 21（確認・断面・完掘・断ち切り）
図版34	S K 31（完掘・断面・遺物出土状況）・S K 32（断面・完掘）・S K 33（確認・断面・完掘）
図版35	S K T 41（確認・完掘・断面）
図版36	S K T 42（確認・完掘・断面）
図版37	S D 51（完掘）・S D 52（完掘）
図版38	S D 51（S I 05下部確認状況）・S D 52（断面・S D 52とS I 05断面・工具痕）・S D 55（断面）
図版39	S D 55（完掘）・作業風景
図版40	S I 02出土遺物
図版41	S I 02・05出土遺物
図版42	S I 06A・07A出土遺物
図版43	S I 07A・08出土遺物
図版44	S I 08・09出土遺物
図版45	S I 10・13・16・17出土遺物
図版46	S K 31・32出土遺物・狼穴IV遺跡出土坏
図版47	S R 21埋設土器・遺構外出土縄文土器
図版48	遺構外出土土器
図版49	遺構外出土石器
図版50	狼穴IV遺跡住居跡出土炭化材樹種 1
図版51	狼穴IV遺跡住居跡出土炭化材樹種 2
図版52	狼穴IV遺跡住居跡出土炭化材樹種 3
図版53	狼穴IV遺跡住居跡出土炭化材樹種 4
図版54	狼穴IV遺跡住居跡出土炭化材樹種 5
図版55	狼穴IV遺跡堆積物中鉱物類の顕微鏡写真

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経過

大館西道路は、大館市街地における交通渋滞や騒音の緩和と県内の高速交通ネットワークの形成など、地域の文化と経済交流の活性化を目的として計画された路線で、大館市根下戸新町地内を起点とし、同市商人留地内を終点とする延長6.2km、幅員22mの自動車専用道路である。そのうち、根下戸新町地内から駿遊内地内の国道7号までの4.6kmが部分供用されている。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立って建設省(現国土交通省)東北地方建設局能代工事事務所より、文化財保護法に基づいて埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けた秋田県教育委員会は、計画路線内の分布調査及び確認調査を実施し、記録保存が必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施することになった。

狼穴IV遺跡の確認調査は平成13年度に行われ、平安時代の遺構と遺物が確認されたことから、翌14年度に発掘調査を実施するに至った。路線内の調査対象区は5,400m<sup>2</sup>で、当初は1か年で調査を終了する予定であったが、用地買収の問題があるため平成14年度調査を1次調査として、対象区北西側の3,000m<sup>2</sup>を調査した。

### 第2節 調査要項

遺 跡 名	狼穴IV遺跡（おおかみあなよんいせき）（遺跡番号 20A IV）
遺 跡 所 在 地	秋田県大館市駿遊内字狼穴28-1外
調 査 期 間	平成14年6月3日～8月20日
調 査 面 積	3,000m <sup>2</sup>
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会
調 査 担 当 者	栗澤 光男（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 文化財主事） 新海 和広（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 文化財主事） 伊藤 一彦（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 非常勤職員） 眞井田 宏彰（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 非常勤職員）
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局能代工事事務所 大館市教育委員会

## 第2章 遺跡の環境

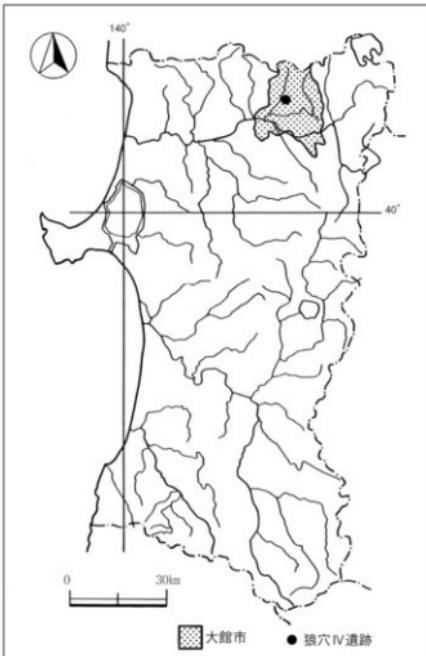
### 第1節 遺跡の位置と立地

狼穴IV遺跡が所在する大館市は、秋田県の北端に位置する。（第1図）市域は、北を青森県南津軽郡大鰐町・碇ヶ関村、東を鹿角市・小坂町、南を比内町、西を鷹巣町・田代町に接しており、その面積は401.54km<sup>2</sup>で秋田県内では第4位の広さである。

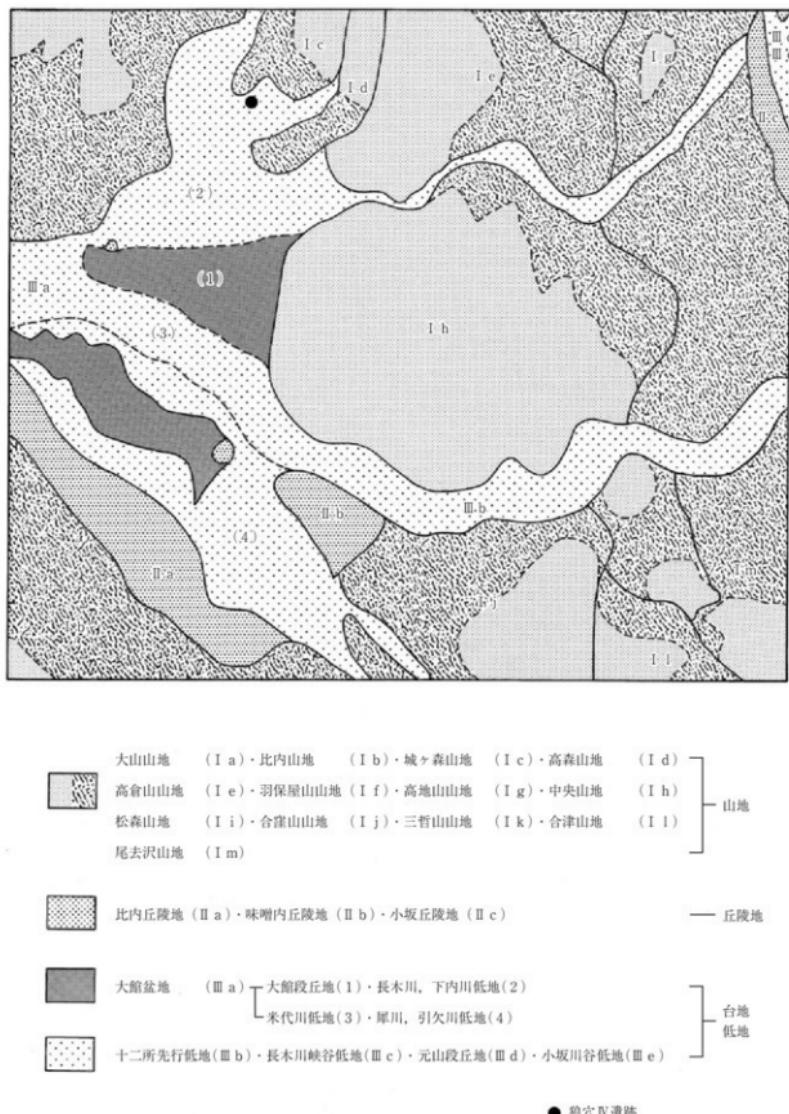
大館市の地形は、大館盆地を囲む山地、盆地内に分布する段丘や残丘、山麓沿いに分布する扇状地、盆地内を流れる川沿いに広がる沖積低地からなっている。（第2図）大館盆地は断層により形成された陥没盆地で、盆地の東縁や南西縁ではこれを裏付ける断層崖が現在でも確認できる。盆地をとりまく山地は、北西側に白神山地、東側に高森山地、南西側には摩当山地がある。市街地に近い所では、盆地の東側に鳳凰山（520m）、秋葉山（329m）、獅子ヶ森（224m）があり、西側には大山（378m）を中心とする花岡地区の山地が南北にのびている。

盆地内を流れる主要河川は、米代川、長木川、下内川である。米代川は県北第一の主要河川で、岩手県二戸郡安代町の中岳の源流から鹿角市を経て大館市に入り、最終的には日本海に注ぐ。長木川、下内川はこの支流で、長木川は市内茂内屋敷北方の大川目沢に源を発し、盆地中央部を西流して、市内山田渡の西で米代川に合流する。下内川は、矢立峠に近い市内陣馬の北にある下内沢に源を発して、長走・白沢・秩迦内・沼館と南流して長木川に合流する。なお、下内川沿いの谷底平野は矢立峠付近まで続いている、古来より津軽との重要な交通路として利用されてきた。

狼穴IV遺跡は、大館市市街地北部の秩迦内地区に所在し、JR奥羽本線の大館駅から北北東へ約3kmに位置する（第3図）。遺跡周辺の地形は、西を流れる下内川と東を流れる乱川によって形成された河岸段丘である。この段丘は、城ヶ森麓の橋桁集落付近が最高地点で、そこから南西方向に向かって標高を減じて日景町の乱川対岸付近まで伸びる。途中には芝谷地湿原や秩迦内鉱山のあった萩長森の残丘が見られる。沖積地と段丘面上との比高はおよそ10m前後で推移し、また小さな沢により樹枝状に再



第1図 遺跡位置図



第2図 地形区分図

開析されて複雑な地形になっている。大館市の段丘は第一から第五までに区分されており、それに照らし合わせると第三段丘にあたる。

遺跡の立地点は、標高77~78m、南東方向の乱川方面に向かう沢筋の北東側に位置する台地である。沢筋は、遺跡南西部で一部分岐して北東方向に向かう谷頭部を形成している。今回調査した結果、集落はこの谷頭部を南西端としていることが分かった。

## 第2節 歴史的環境

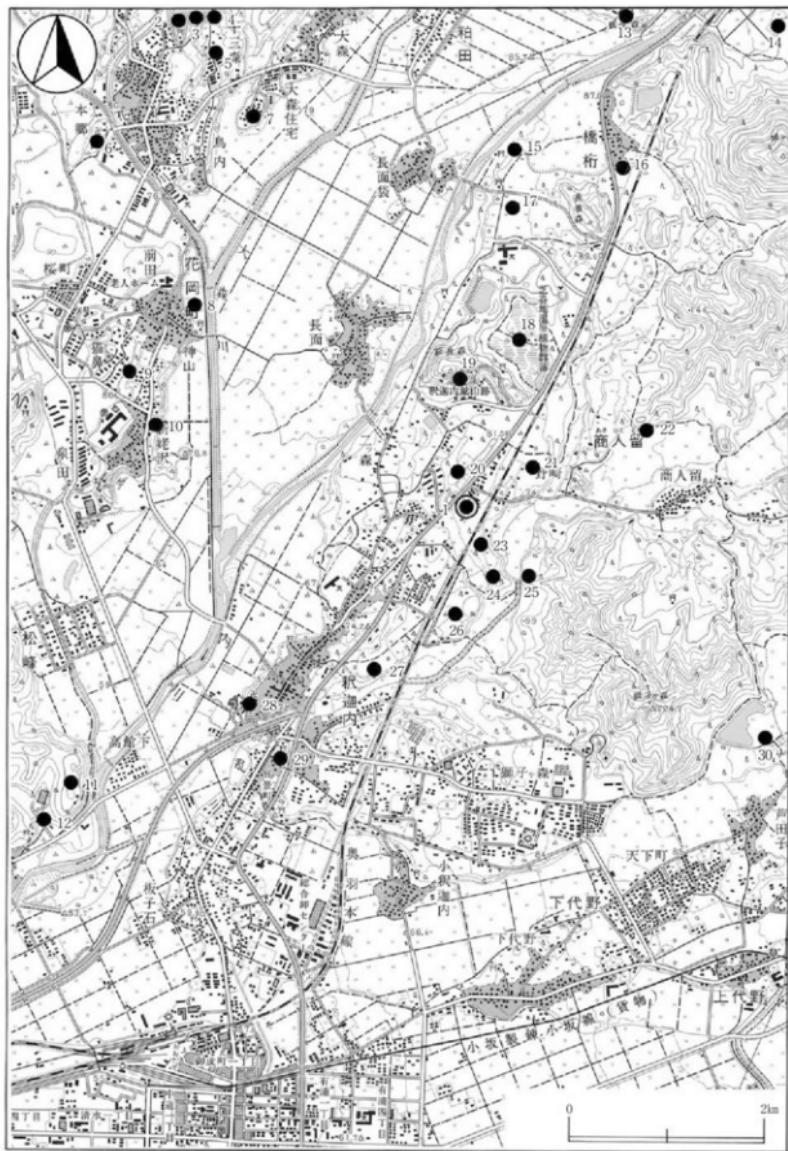
大館市ではこれまでに、旧石器時代から中・近世までの遺跡が135か所確認されている。そのほとんどが盆地内に分布する段丘面上にあり、沖積地にはあまり見られない。

第3図の狼穴IV遺跡と周辺遺跡位置図は大館市市街地北部に位置する東西4km、南北5.86kmの地域である。ここでは、本地域の遺跡を中心に概観する。

大館市内で確認されている最も古い遺跡は、旧石器時代に属する松木高館遺跡（12）で、大型の石刃が見つかっている。縄文時代の遺跡は、早期中葉以降の遺跡が見つかっている。根下戸にある根下戸道下遺跡や軽井沢の五輪台集落付近にある鳶ヶ長根IV遺跡からは、貝殻文を施した土器が見つかっている。前期になると集落が築かれていたことが調査の結果判明している。上野にある池内遺跡は、前期中葉～末葉にかけての円筒下層式期の大集落で、大量の土器・石器の他に豊富な種類の動植物遺存体が出土している。中期の遺跡は、多数見つかっているが集落の様相を把握できるような調査は今までのところ類例がない。比内町の本道端遺跡では、縄文時代中期の終わり頃の集落が見つかり複式炉を伴う住居が検出されている。中期の中頃から波及してくる南東北の大本式文化がこの地域にも影響を及ぼしていることがうかがえる。後期の遺跡では、中山の寒沢遺跡で7軒、軽井沢の萩峰遺跡で10軒の堅穴住居跡が見つかっており、集落が小規模化する傾向にあることが分かる。このほか茂内新町の塚ノ下遺跡から目に天然アスファルトが埋め込まれた土偶が、萩ノ台の萩ノ台II遺跡から十腰内I・II式に伴って翡翠の大珠が3点出土している。晩期になると、集落どころか住居跡の検出数が少ない。田代町矢石館遺跡では、組石棺墓が5基調査されている。この時期の地域性を示す資料である。

第3図に示した範囲内では前期以降の遺跡が周知されている。時期が分かるものとして根井下遺跡（1～中期）、十三森遺跡（5～前・晚期）、橋桁遺跡（16～後・晚期）、福田・橋桁野遺跡（17～前・晚期）、狼穴遺跡（21～前期）、狼穴II遺跡（23～前期）、芦田子上岱遺跡（30～前期）をあげることができる。なお本遺跡とは隣接する狼穴遺跡からは、前期の岩偶が出土している。

歴史史料に大館地区に関する記載が最初に見られるのは、元慶二年（878年）に勃発した「元慶の乱」についての記事中である。元慶の乱は、秋田城介貞岑の悪政に反発した雄物川以北の住民が蜂起した事件で、当時の秋田郡内の各ムラが独立を要求するまでに発展したが、最終的には政治的懷柔策により鎮定された。この独立を要求したムラの中に、当時の大館地方を示す「火内」の文字が記されている。元慶の乱の記事には、当時の各ムラの様子そのものを示す記載は少ないので、律令国家の体制には服属しながらも在地社会のまとまりを残し、対外的な問題には指導者の統率のもと行動がとれる集団が存在していたことがうかがえる。11世紀代にはそういった流れの中から、安倍・清原・藤原氏が台頭してくる。大館市域もそういう有力者の支配に組み込まれていくと考えられる。



第3図 狼穴IV遺跡と周辺遺跡位置図

第1表 狼穴Ⅳ遺跡周辺の道路一覧

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	狼穴Ⅳ	縄文・平安時代	16	橋桁	縄文時代
2	本郷下	縄文時代	17	福館・橋桁野	縄文・平安時代
3	根井下	縄文時代	18	芝谷地湿原	天然記念物
4	豆岱	縄文時代	19	芝谷地	縄文時代
5	十三森	縄文・平安時代	20	二ツ森	縄文・弥生時代
6	七ツ館	縄文時代	21	狼穴	縄文・平安時代
7	大森	縄文時代	22	谷地中	縄文時代
8	神山	平安時代	23	狼穴森	縄文・平安時代
9	花岡城	中世	24	狼穴蟲	平安時代
10	神山下	平安時代	25	坂下	
11	高館	中世	26	糸瀬内中台森	平安時代
12	松木高館	旧石器	27	糸瀬内中台森	平安時代
13	大館野	平安時代	28	糸瀬内古館	中世
14	白沢	平安時代・中世	29	糸瀬内館	平安時代・中世
15	福館	中世	30	芦田子上岱	縄文・平安時代

大館市では多くの平安時代の遺跡が確認されており、いくつか調査が行われて様相が判明している。時期は9世紀後半～10世紀代のものが多い。第3図に示した範囲内では、13大館野遺跡や、26糸瀬内中台I遺跡が10世紀代の大きな集落跡であることが分かっている。大館野遺跡では、多くの堅穴住居跡や掘立柱建物跡の他に道路跡と思われる溝や井戸、製鉄炉が見つかっていて、計画的に集落が形成されていることが分かる。糸瀬内中台I遺跡は、本遺跡と同じ第3段丘面上に立地する集落跡で、多数の堅穴住居跡が調査によって確認されている。また、本遺跡の周辺には、同じ平安時代の遺跡である狼穴遺跡(21)、狼穴II遺跡(23)、狼穴III遺跡(24)があり、いずれも乱川に面した台地の縁に位置している。

## 引用・参考文献

- 秋田県『土地分類基本調査 大館』 1986（昭和61）年
- 秋田県教育委員会『秋田県道路地図（東北版）』 1991（平成3）年
- 秋田県教育委員会『池内遺跡 一遺構編』 秋田県文化財調査報告書第268集 1997（平成9）年
- 秋田県教育委員会『池内遺跡 一遺物・資料編』 秋田県文化財調査報告書第282集 1999（平成10）年
- 秋田県教育委員会『根下戸道下遺跡』 秋田県文化財調査報告書第297集 2000（平成12）年
- 秋田県教育委員会『根戸I・II・III遺跡』 秋田県文化財調査報告書第330集 2001（平成13）年
- 大館市教育委員会『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』 1990（平成2）年
- 大館市史編纂委員会『大館市史 第1巻』 1979（昭和54）年
- 大館市史編纂委員会『大館の歴史』 1992（平成4）年

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

狼穴IV遺跡は、下内川と乱川に挟まれた糸迦内台地に所在する。糸迦内台地は北東から南西へ緩く傾斜し、小さな沢により複雑に開析されていくつもの舌状台地が形成されている。本遺跡もそういった舌状台地の上に立地している。本年度調査対象区域は、糸迦内台地の中央部からやや東寄りの国道7号線と奥羽本線に挟まれた場所で、北西—南東90m、北東—南西40~48mの道路計画範囲であるが、中央部に幅約17mの調査対象外の沢があるため2分される。そのため、調査区を北西調査区と南西調査区に分けて行った。どちらの調査区とも標高約76~77mである。また、今回の調査区よりさらに南東側の場所には今後調査が必要な範囲2,400m<sup>2</sup>が残っている。

今年度調査区では、主に平安時代の集落跡を検出した。遺構の分布は、沢を挟んで北東と南西では明らかな違いがあり、南東調査区では平安時代の堅穴住居跡が規則的に配置されているのに対して、北西調査区で見つかったのは1軒みである。同様な平坦地が手つかずで隣接しているにも関わらず、密集して住居を建てて集落を形成する点が特徴である。

### 第2節 調査の方法

表土除去はバックホーにより、II・III層が残存しているところではII・III層上面まで、削平されているところではIV・V層までの深さでI層を除去した。遺構精査、II・III層の粗掘りは移植・スコップ等を使用して全て人力で作業を行った。排土運搬も、ベルトコンベヤーを使用しなかったため、全て一輪車を用いて人力で排土を投棄した。排土置き場は北西調査区と南東調査区の間の沢を利用した。

作図用のグリッド配置は、調査区内の任意の1点を選定してこれをグリッドの原点MA50とし、この点を通る真北方向のラインをMAライン、このラインに直行する東西方向のラインを50ラインとする基準線を設け、これに平行する4mラインを原点から東西南北に必要数設定し、これらのラインの交点に杭を打設して4m×4mのグリッドとした。グリッドの表記は、東西方向を表す2組のアルファベットと南北方向を表す数字で示している。2組のアルファベットは左を母単位、右を子単位として、20子単位で1母単位という表記法である。例として、原点からみれば母単位Mの範囲ではMA~MTまで20の子単位で西方に移動するが、MTの次は母単位Nの範囲のためNAになる。数字は北に行くほど増え、南に行くほど減る表記法である。グリッドの名称は、各グリッドの南東角に打設されている杭の名前を付けた。

調査の記録は、平面図・断面図及び写真で記録化した。平面図・断面図の縮尺は1/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影は、35mmのモノクロとリバーサル及び必要に応じてカラーフィルムを使用した。

遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。

### 第3節 調査の経過

今回の調査は、第1次調査として平成14年の6月3日～8月20日まで実施した。以下に、各週ごとの調査経過を記述する。

#### 【第1週】6月3日～6月7日

3日午前、作業員に作業内容や諸注意を説明し、午後から器材の搬入や環境整備を行って、翌日から調査区南東端からの遺構検出作業を開始し竪穴住居跡、土坑を確認した。また、調査区南東端で基本層序を確認した。調査と並行して杭打設作業が行われた。

#### 【第2週】6月10日～6月14日

南東調査区のⅢ層上面での遺構検出作業をほぼ終了し、南東調査区の南西部に埋没沢があることを確認した。竪穴住居跡と土坑の精査を開始した。新たに確認した竪穴住居跡や、土坑の精査も随時開始した。

#### 【第3週】6月18日～6月21日

遺構検出作業は北西調査区に移行した。南東調査区の遺構精査を継続し、確認している土坑は調査終了、竪穴住居跡も図化作業に入り始めた。

#### 【第4週】6月24日～6月28日

北西調査区の粗掘り・遺構検出作業の入手が不足しがちなため、南東調査区の遺構精査作業を一時中断して、全員で北西調査区の作業にあたった。作業が進むにつれ、搅乱がひどくⅢ層が残存している範囲が少ないと、一部集中して縄文前期の土器や石器が出土することが分かってきた。なお、全く遺構がない調査区北隅を、堆土置き場にすることにした。

#### 【第5週】7月1日～7月5日

南東調査区と北西調査区を並行して調査する体制になった。南東調査区では、中断していた遺構精査を再開し、継続精査のものは図化・写真撮影を、新規に確認した遺構は掘り込みを開始した。その他埋没沢の堆積土確認のため、一部トレント状に掘り下げた。北西調査区では粗掘り・遺構検出作業を継続して行い、遺構がない場所はⅢ層を掘り下げてV層上面での検出作業を行った。陥し穴状土坑を1基基礎して精査を開始した。

#### 【第6週】7月8日～7月12日

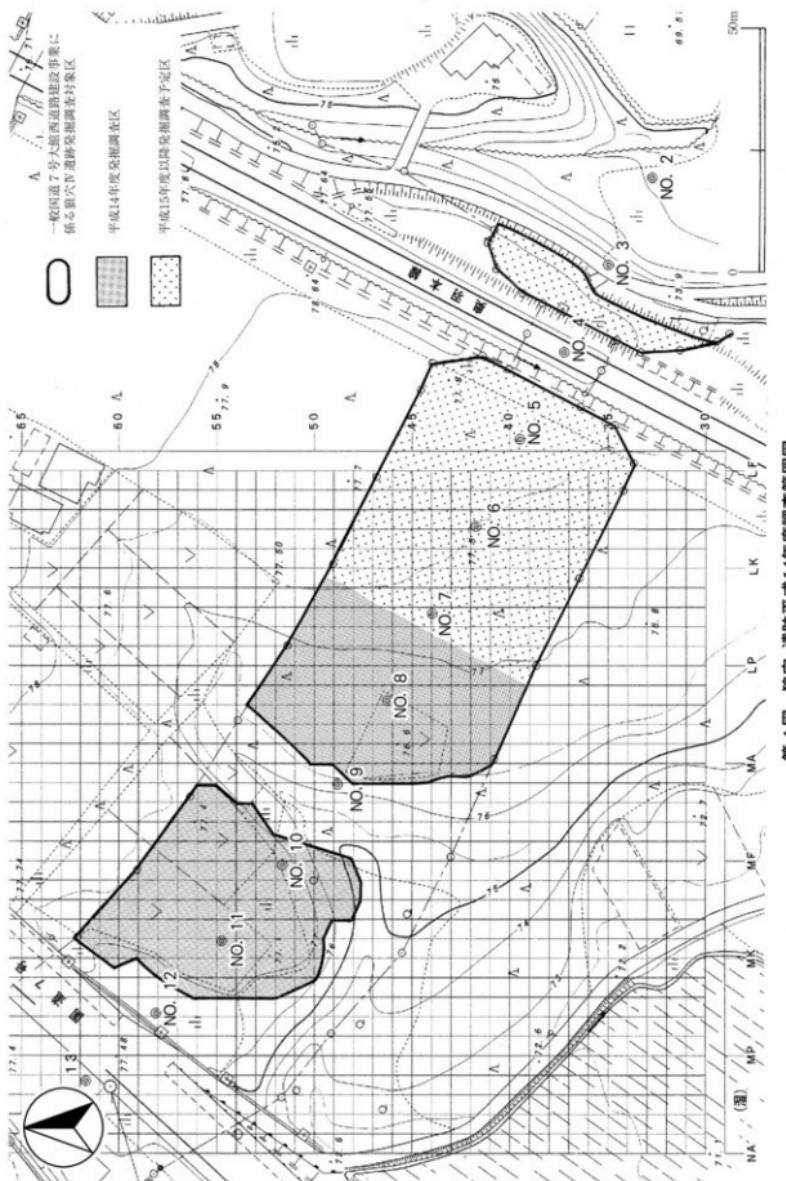
南東調査区は遺構精査作業を継続、北西調査区では遺構検出作業と遺構精査を行った。北西調査区では、新たに陥し穴状土坑1基と土器埋設遺構を確認し精査に着手した。なお、狼穴IV遺跡の調査終了後に調査する予定の糸迦内中台I遺跡の準備作業も開始した。

#### 【第7週】7月15日～7月19日

南東調査区の遺構精査作業は、週の前半が台風の影響のため中断したことにより、後半に再開した。北西調査区では、新たに竪穴住居跡と土坑を確認し精査を開始した。

#### 【第8週】7月22日～7月26日

平安時代の住居跡がⅢ層上面以上から掘り込まれているため、Ⅲ層上面検出遺構を対象とした1回目の空中写真撮影を週の半ばに行った。そのため、週の前半には空撮のための準備を行った。



【第9週】7月29日～8月2日

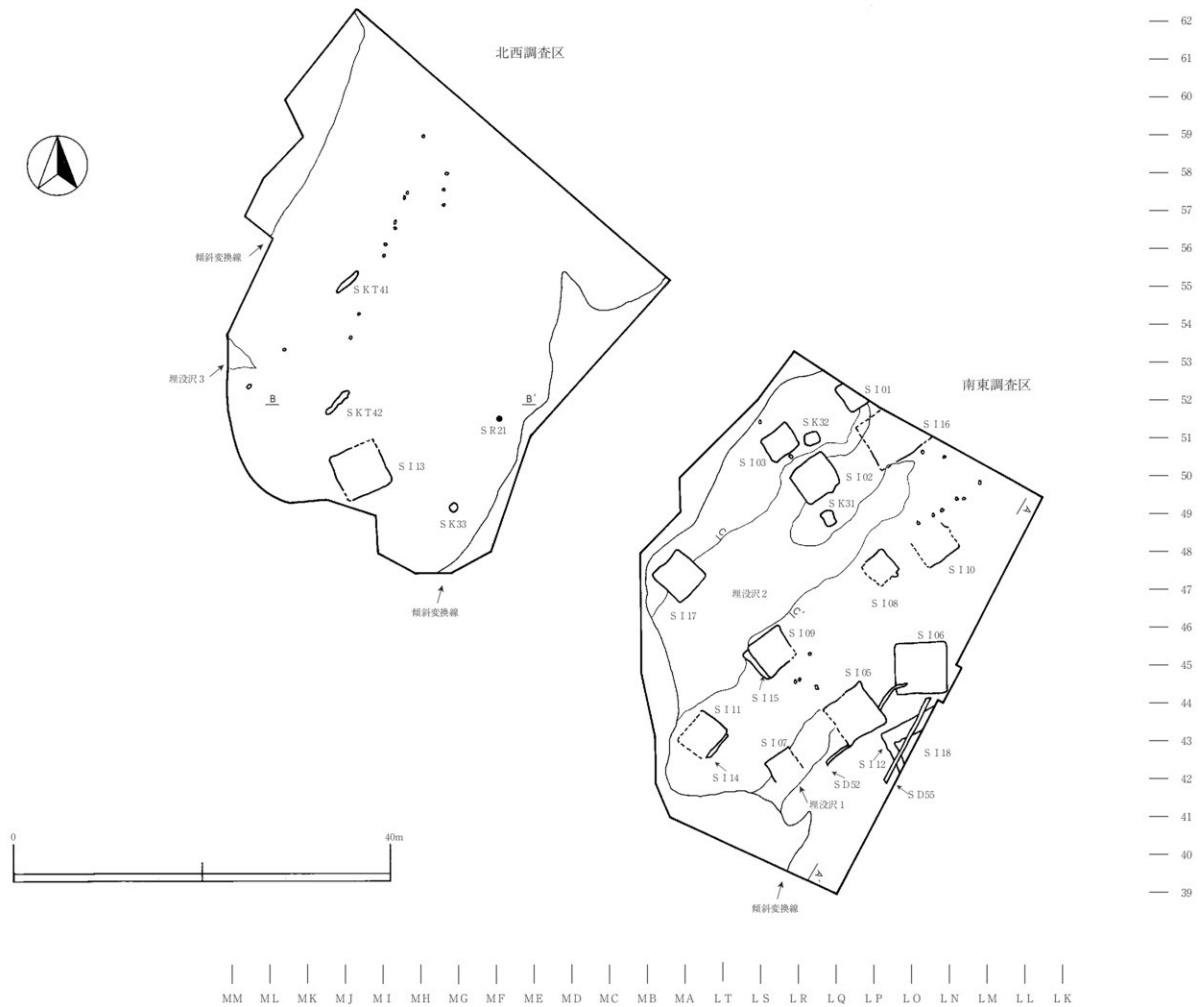
両調査区とも竪穴住居のカマド、貼床の精査を行い、図化作業を継続して行った。住居の精査が完了したところから、周囲のⅢ層黒色土を掘り下げ、V層上面での遺構検出を行い最終的な精査完了に向けて作業を進めた。

【第10週】8月5日～8月9日

竪穴住居跡の残りの精査や図化作業もほぼ終了し、Ⅲ層黒色土の掘り下げを行った。週の半ばにはV層上面での完掘状況を収めるための最終的な空撮を行い、一部の図化作業を残して今年度調査区の遺構精査を終了した。

【第11週】8月19日～8月20日

一部竪穴住居跡の補足調査を行い、今年度の調査を完了した。



## 第4章 調査の記録

### 第1節 基本層序

遺跡の基本層序は、南東調査区では調査区の南東縁にA-A'ラインを、北西調査区ではML52~M E52グリッドをつなぐB-B'ラインを設定して土層を確認した。B-B'ラインは柱状図と地山エレベーション図を合わせた状態で図示してある。また、南東調査区で確認した埋没沢に、C-C'ラインを設定して土層の確認を行った。A-A'ラインやB-B'ラインでは失われているであろう黒色土や、大湯浮石層の堆積状況を考える上での参考資料となる。(第6・7図)

#### 【A-A'ライン・B-B'ライン】

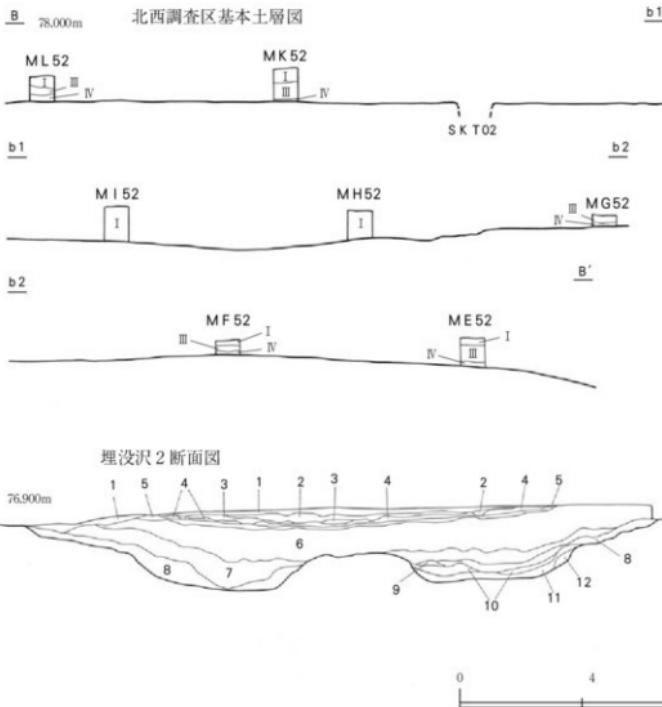
- 特層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性中 暗褐色土塊多量含む  
現表土であり、耕作土やそれに伴う盛り土で構成される。
- 礎層 黒褐色土 (10YR2/3) しまり中 粘性中 灰白色砂微量含む  
鞠層の到達具合によって、斑状に残存している。
- 金層 黒色土 (10YR1.7/1) しまり中 粘性中 暗褐色土少量含む  
今回の調査における、平安時代遺構の検出・確認面である。
- 鈴層 黄褐色土 (2.5Y5/4) しまり強 粘性中 黑褐色土・明黄褐色土多量含む  
(鉢層と鈴層の漸位層で、今回の調査における縄文時代遺構の検出・確認面である。
- 傍層 浅黄色土 (2.5Y7/4) しまり強 粘性強 明黄褐色土多量含む  
地山層である。

#### 【C-C'ライン】

- 1 黒褐色土 (2.5Y3/1)
- 2 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 明黄褐色砂粒多量含む
- 4 浅黄色土 (2.5Y7/4) 火山灰層
- 5 黒褐色土 (7.5YR2/2)
- 6 黒色土 (2.5Y2/1)
- 7 黒褐色土 (10YR2/2) にぶい黄橙色土粒・暗褐色土含む
- 8 黒褐色土 (2.5Y3/2) にぶい黄橙色土粒・暗灰黄色土・白色砂粒含む
- 9 黄褐色土 (2.5Y5/4) 暗褐色土含む
- 10 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 黄橙色土粒・灰白色土粒含む
- 11 黑褐色土 (2.5Y3/4) 黄橙色土粒・灰白色土粒含む
- 12 黄褐色土 (2.5Y5/4) 黄橙色土粒含む
- 13 黒褐色土 (2.5Y3/1) 暗褐色土含む
- 14 黄褐色土 (2.5Y5/3) 明黄褐色小礫含む
- 15 明黄褐色土 (2.5Y7/6) 明黄褐色小礫含む
- 16 にぶい黄褐色土 (2.5Y6/3) 黄褐色小礫含む



第6図 南東調査区基本土層図



第7図 北西調査区基本土層と埋没沢2断面図

## 第2節 検出遺構と遺物

狼穴IV遺跡1次調査の結果、検出した遺構総数は南東調査区と北西調査区を合わせて57遺構である。また、出土した遺物総数はコンテナにして20箱分である。

### 1 縄文時代の遺構

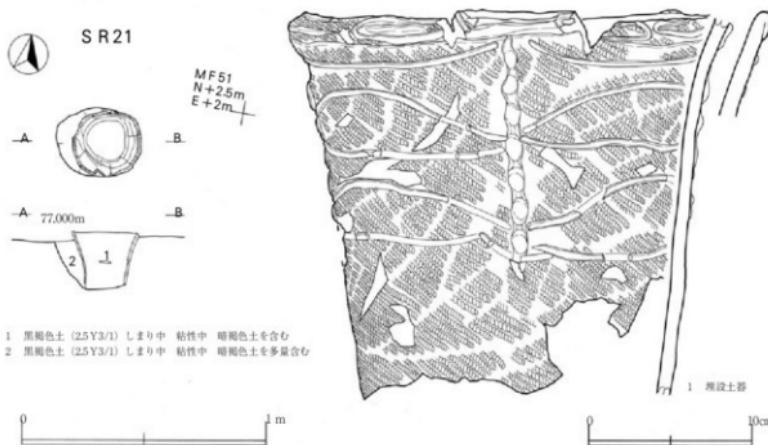
#### (1) 土器埋設遺構

S R21(第8図)

〈位置・確認状況〉 MF52グリッドに位置する。第IV層中位で、土器の口縁部の一部と、内部の黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 2層に分けられた。1層は埋設土器内部の埋め戻した土で、2層は埋設土器を固定するため掘形内に充填した土である。



第8図 SR21土器埋設構造平面図・断面図と埋設土器

## &lt;平面形・規模&gt;

平面形は長径35cm、短径29cmの楕円形で、断面形は最深部で22cmある台形である。掘形内に土器を正位に埋設している。

## &lt;出土遺物&gt;

埋設土器は、底部を欠損しているが胴下半部から外傾して立ち上がり、口縁部で緩く外反する器形である。口縁部は折り返し口縁で、おそらく4単位の低く幅の広い突起が付いている。その口縁部から胴下半部まで一連の地文が施されている。地文施文後に、口縁部には突起を起点として横方向へ展開する細い隆線を施す。胴上半部には、口縁部突起から垂下する指頭圧痕をもつ隆帯を起點として、横方向に上開き・下開きの細い隆線を交互に施している。

また、1層中から、埋設土器本体の破片が出土している。埋め戻し時に誤って打ち欠いたものと思われる。

## &lt;性格・時期&gt;

性格を決定する内容に欠けるが、最も可能性が高いのは乳幼児の墓と考える。時期は、埋設土器本体の特徴から円筒上層c式期と判断している。

## (2) 陥し穴状構造

## SKT41(第9図)

## &lt;位置・確認状況&gt;

MJ55・MK55に位置する。第IV層上面で黒色土の広がりで確認した。

## &lt;重複関係&gt;

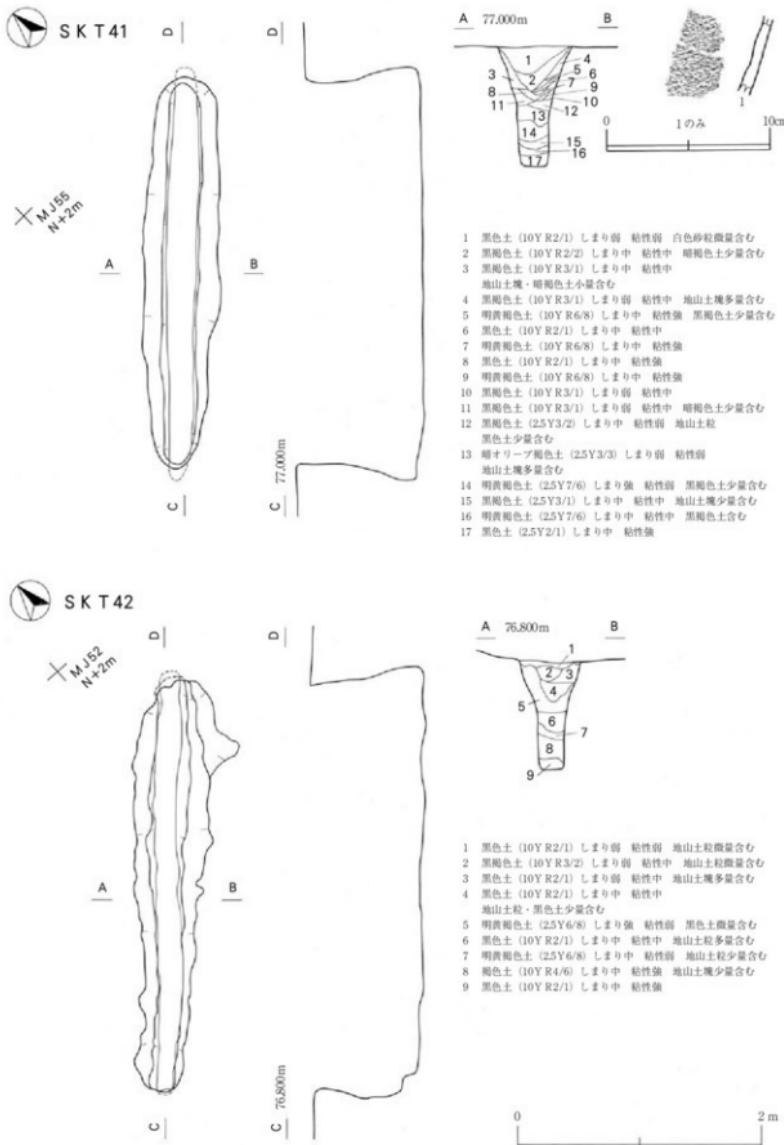
重複する構造はない。

## &lt;堆積土&gt;

17層に分けられた。3~17層までは、構造壁面の崩落土と外部から流入する黒色基調の土との互層である。1、2層は崩落が治まった以降の自然堆積層である。

## &lt;平面形・規模&gt;

開口部の長軸3.2m、短軸0.6m、底面の長軸3.4m、短軸0.2mの溝状を呈する。検出面からの深さは1mである。



第9図 SKT 41・42陥入穴状土坑平面図・断面図

〈壁・底面〉	壁は、長軸方向の両側壁上場に崩落が見られる。両端はオーバーハングする形状を呈する。底面は、ほぼ水平である。
〈出土遺物〉	1層から縄文時代の土器片が1点出土している。
〈時期〉	底面付近からの出土遺物が無いため、正確な時期は不明である。

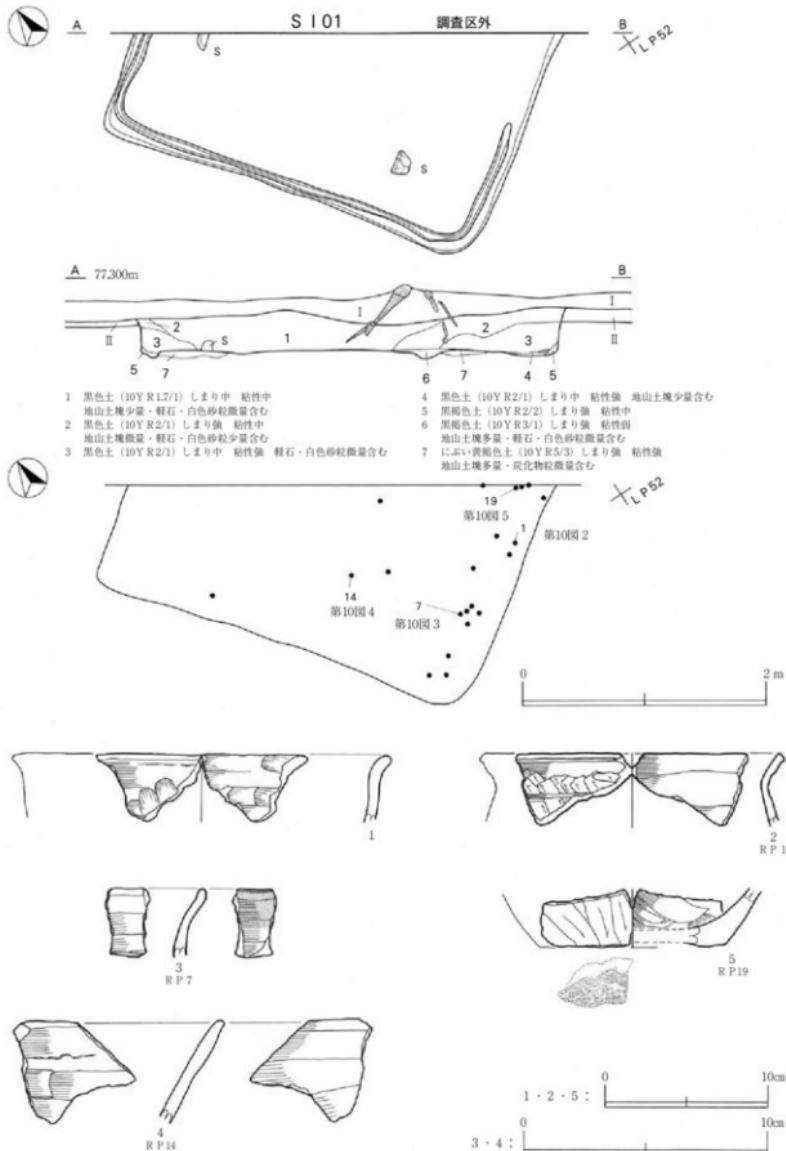
#### S K T 42 (第9図)

〈位置・確認状況〉	M J 52・MK 52グリッドに位置する。第IV層上面で黒色土の広がりで確認した。
〈重複関係〉	重複する遺構はない。
〈堆積土〉	9層に分けられた。6～9層は、遺構壁面の崩落土と黒色基調の流入土の互層と考えられるが、2～5層は堆積土の内容や状況から人為的に埋められた土と考える。1層は、2層以下が沈んでできた窪地に自然堆積した土である。
〈平面形・規模〉	開口部の長軸3.3m、短軸0.6m、底面の長軸3.4m、短軸0.2mの溝状である。
〈壁・底面〉	検出面からの深さは1mである。
〈出土遺物〉	出土遺物はない。
〈時期〉	遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。しかし、上部が人為的に埋められていることから、廃絶後あまり時期を隔てずに周囲の土地利用があったことが考えられる。

## 2 平安時代の遺構

### (1) 堅穴住居跡

S I 01 (第10図)	
〈位置・確認状況〉	L P 51・52グリッドに位置する。第III層中位で地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。
〈重複関係〉	重複する遺構はない。
〈堆積土〉	7層に分けられた。堆積状況は自然堆積である。1～3層までは黒色を基調とし少量の地山土塊を含むレンズ状に堆積している。また、1・2層中には、十和田a火山灰起源と考えられる軽石粒や白色砂が入り交じっている。5層は壁溝内堆積土である。4・6層はおそらく調査区外にあるカマドに伴う土である。7層は貼床の土で地山土塊を多量に含みよりも強い。
〈平面形・規模〉	調査区外に遺構が続くため平面形は不明である。各壁の長さも同じ理由で、南西壁以外は全長を測れない。南西壁は3mである。
〈壁〉	検出面からの各壁の高さは、北西壁26cm、南西壁で15cm、南東壁で38cmである。立ち上がりは、いずれの壁もほぼ垂直である。
〈床〉	掘形底面の窪んでいる部分に、地山土塊と黒色土の混合土を埋めて平坦に整



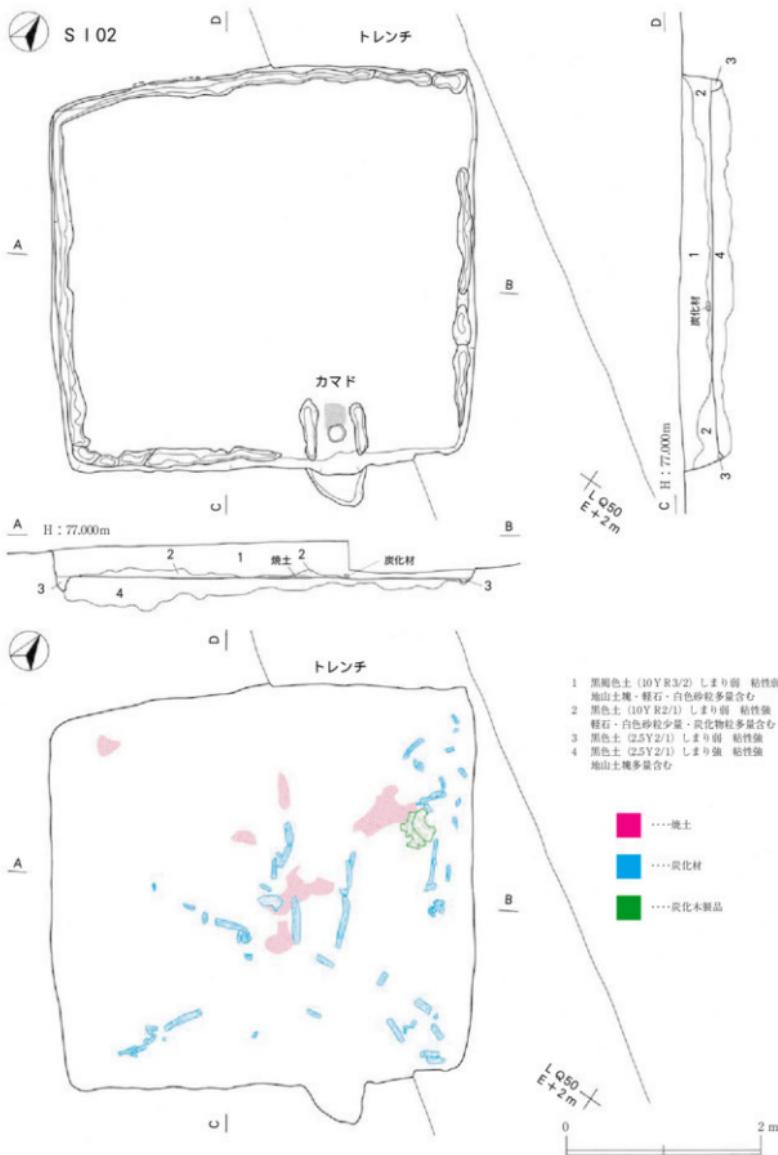
第10図 S101竪穴住居跡平面図・遺物出土位置図・出土遺物図

えている。

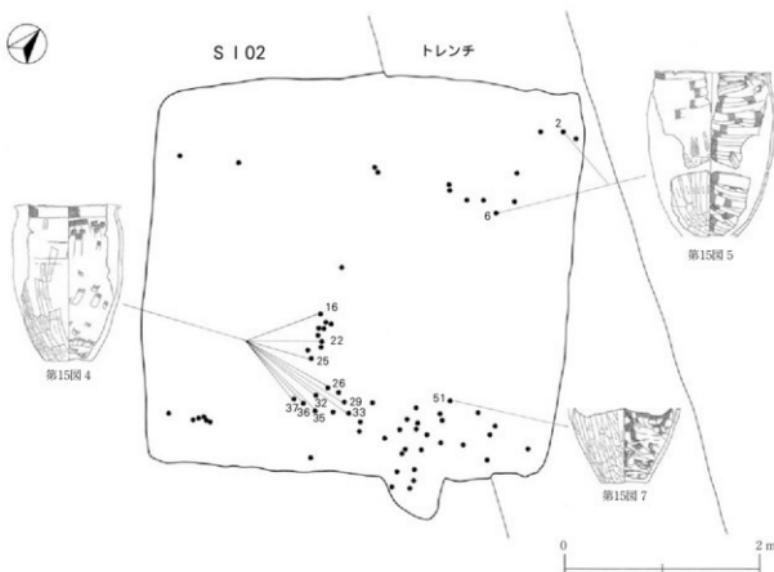
- 〈壁溝〉 確認できる範囲内では、南東壁の一部以外は全体を巡る。幅10~15cm、床面からの深さは5cm前後である。
- 〈柱穴〉 床面で柱穴は確認できなかった。外部壁沿いでも同様である。
- 〈カマド〉 今回の調査区内では確認できなかった。
- 〈出土遺物〉 堆積土中から土師器の壺や鍋と思われる破片が出土した。第10図1と2は、口縁部が外傾する壺で、2は口縁部ヨコナデ後、胴部は下から上にケズリ調整で仕上げている。1は内外面ともナデのみで調整している。3は口縁部が弱く内湾する。壺に近い器形を呈すると思われる。4は壺の底部で、底部外面はいわゆる砂底状を呈する。5は直線的に外傾する器形を呈する。口縁径と傾きから推定して鍋と考えられる。
- 〈時期〉 自然堆積土である1・2層中に十和田a火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以降に埋没したのは確実である。出土遺物の特徴から判断すると平安時代（10C中葉）に属すると考える。

#### S 102 (第11~16図)

- 〈位置・確認状況〉 L P49・50、L Q49・50グリッドに位置する。第Ⅲ層中位で地山土塊を含む黒褐色土の広がりで確認した。
- 〈重複関係〉 重複する構造はない。
- 〈堆積土〉 4層に分けられた。1~2層は微妙な色調の違いはあるが、どちらも黒色土である。地山土塊を1層は多量に含み、2層は少量である点が違うが、どちらにも十和田a火山灰起源と考えられる軽石粒や白色砂が入り交じっている。4層は貼床で地山土塊を多量に含む。3層は壁溝内堆積土である。
- 本住居跡は焼失家屋で、床（貼床）上面には炭化材が散在していた。このことから、2層は家屋の焼失に伴う焼失木材や不完全燃焼の木材が土壤化した有機質土の混合土、1層はその後の整地に伴う人為堆積と考えられる。
- 〈平面形・規模〉 平面形はE-39° - Nに主軸方向をもつ長方形である。各壁の長さは北東壁3.9m、北西壁4.2m、南東壁4m、南西壁3.7mである。
- 〈壁〉 各壁の検出面からの高さは、南東壁で32cm、南西壁で24cm、北東壁がトレチにより検出面が下がっているため10cm、北西壁30cmである。立ち上がりは、いずれの壁もほぼ垂直である。
- 〈床〉 捩形底面全体に、地山土塊と黒色土の混合土を敷き詰め平坦に整えている。なお床面上には、家屋の焼失に伴う炭化材と焼土が散布していた。炭化材は、比較的細長い建築部材と思われるものと、幅広い板状のもので木製品の可能性が高いものの2種に分けられる。建築部材と思われるものの中では特徴的なのは、利用樹種の中でヒサカキやヤナギが多いことである。本住居跡で検出した炭化材の多くは、配置や大きさから屋根材と考えられるが、通常建築部材として



第11図 S I 02竪穴住居跡平面図・断面図・炭化材焼土分布図



第12図 S I 02堅穴住居跡遺物出土位置図

あまり好まれないこれらの部材も同目的で利用されたこと、また利用せざるを得ない環境であったことが想定できる。

〈壁溝〉

南東壁の一部と北東壁の一部以外は全体を巡る。幅10~20cm、床面からの深さは、浅いところで4cm、深いところで17cmである。

〈柱穴〉

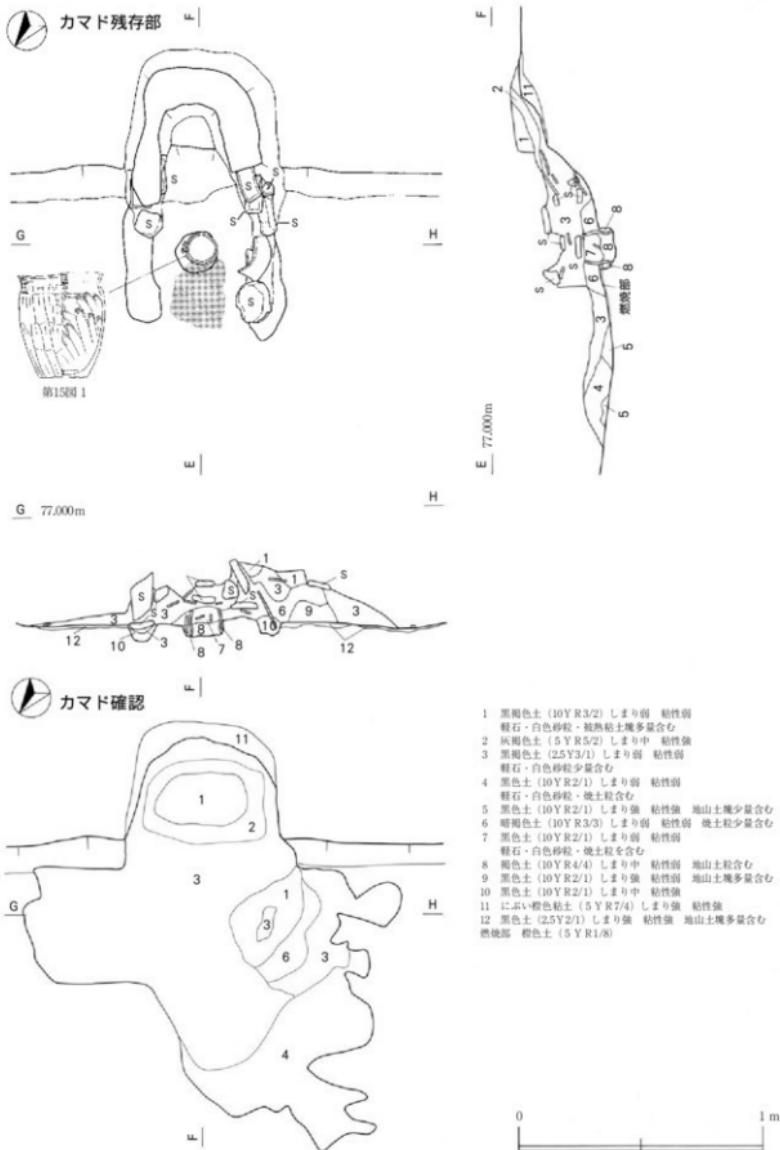
本住居跡の床面で柱穴は確認できなかった。外部壁沿いでも同様である。

〈カマド〉

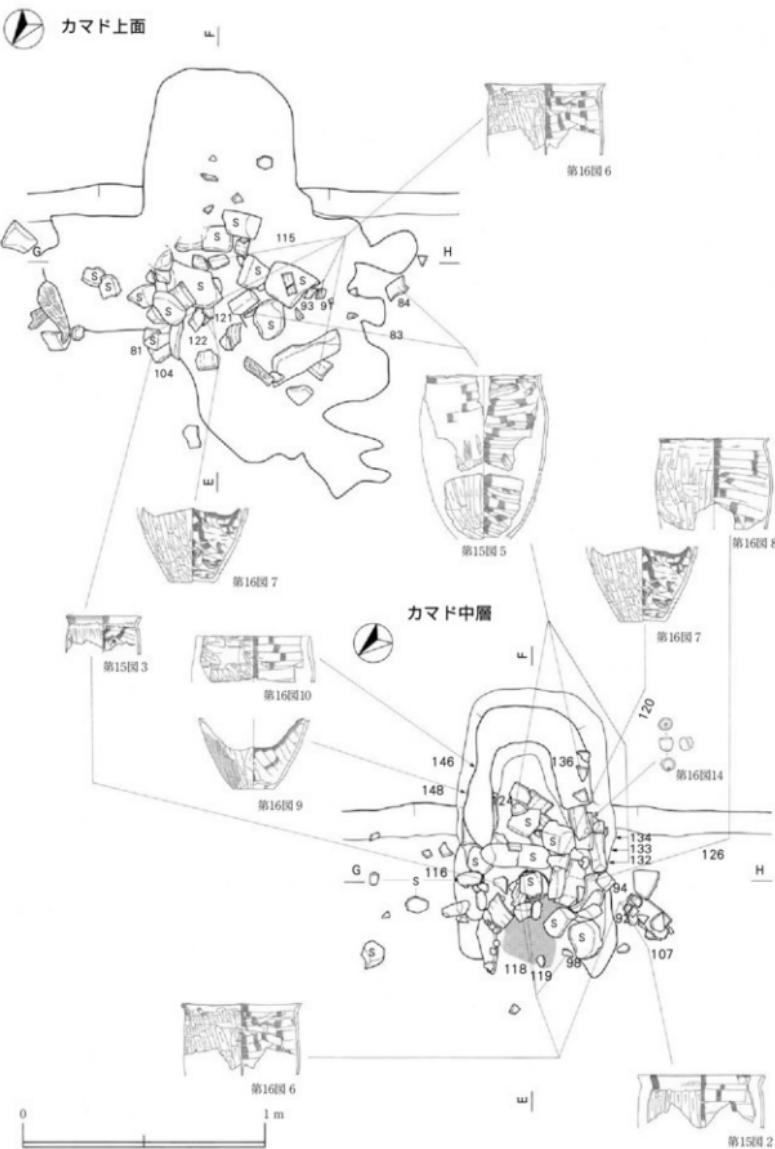
南東壁の中央からやや北東よりの位置で、地山土塊を含む黒褐色・灰褐色土の広がりで確認した。規模は、長さ150cm、幅82cmで、主軸方位はE-55°-Sである。カマドは煙道のほか袖の一部と燃焼部が残存していた。煙道の長さは50cmほどで、にぶい橙色粘土を貼って作られている。断面は斜面状になっており、最深部で10cmである。袖は、灰褐色や黒色の粘性の強い土で作られている。カマド本体も同じ土を用いて作られていたと考えられるが、崩壊が著しく、煙道上部以外ではかなり原位置から離れているようである。また両袖の間には、高さ15cm以上の甕を逆位に一部埋めた状態で設置した支脚が残っていた。堆積土は12層に分けられた。1、3~7、9層は流入土もしくは破壊された構築土である。2層は煙道井戸構築土の倒壊土である。8層は支脚の掘形内に充填した土である。10、11層は、カマド残存部の構築土である。燃焼面は、地山面をそのまま利用している。

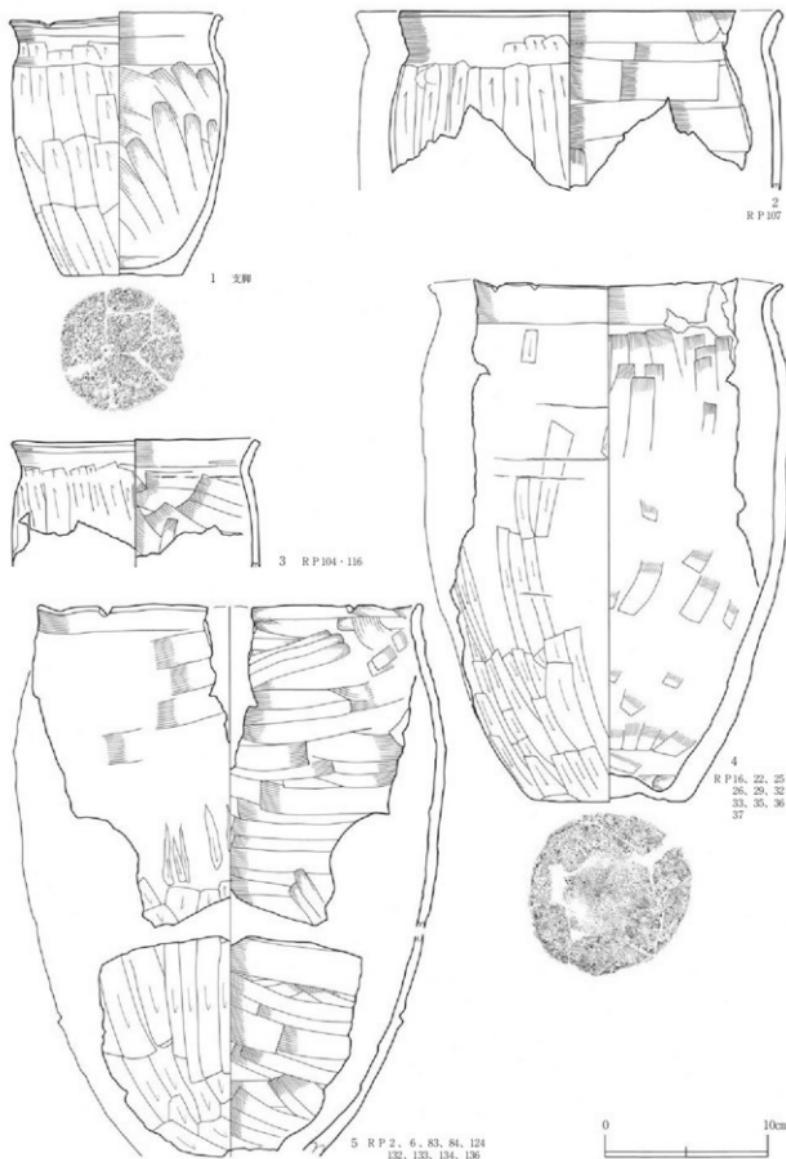
〈出土遺物〉

住居跡内、カマド内の堆積土中から土師器の甕や壺の破片が出土した。第15

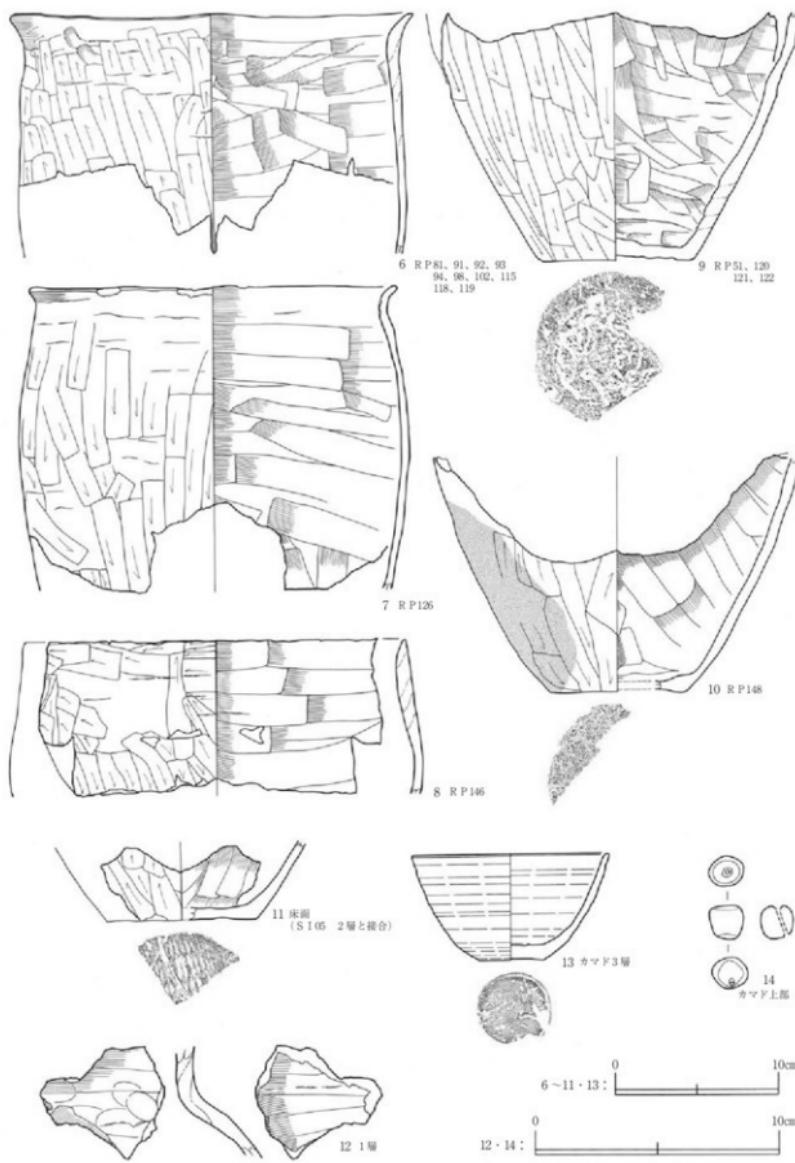


第13図 S-I-02竪穴住居跡・カマド残存部・確認平面図





第15図 S102竪穴住居跡出土遺物図(1)



第16図 S.I.02堅穴住居跡出土遺物図(2)

図1～4は、口縁部が外傾する壺で、いずれも口縁部外面はヨコナデ、胴部は下から上にケズリ調整で仕上げている。底部付近まで残っている1と4を観察すると、胴部下半以下は上から下にケズリ調整を施している。5は胴上半部のケズリ調整が行われていないタイプである。第16図6～8は口縁部外面のヨコナデが顕著でない、または残存していないタイプの壺で、6、7は外反する口縁部にヨコナデの痕跡が認められるものの、8はケズリ調整のため完全に失われており、胴部上半部から口縁部にかけて内傾する器形になっている。9～11は底部資料で、9・10の底部外面はいわゆる砂底状になっている。11は薦編状の圧痕が認められる。12は胴部上半部から内湾して立ち上がり、口縁部に向けて直立して肩を形成する器形をもつことから壺と考えられる。13は壺で、内面黒色処理を施さないいわゆる赤焼き土器である。14は土玉で、カマド構築土中より出土した。歪な筒型を呈し、両端をつなぐ貫通孔が認められる。貫通孔の一端は円の中央部に、もう一端は周辺部に接して開口している。

なお、床面上の炭化材に混じって曲げ物と思われる炭化物が見つかったが、非常に脆い状態のため図示できなかった。

〈時期〉

本住居跡は、人為堆積土である1・2層中に十和田a起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以降の埋没である。出土遺物の特徴から判断すると、平安時代（10C中葉）に属すると考える。

S I 03 (第17・18図)

〈位置・確認状況〉 L R 50・51グリッドに位置する。第V層上面で地山土塊を含む黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉

重複する遺構はない。

〈堆積土〉

2層に分けられた。1層は多量の地山土塊を含む黒褐色土で、確認できた遺構内を全て埋め尽くしている。2層は貼床の土である。地山土塊の他に白色砂粒を含むことから、貼床構築前に十和田a火山灰が降下していたと考える。なお、1層の堆積状況から本住居跡は廃絶後人為的に埋め戻されたと考えられる。

〈平面形・規模〉

平面形はE-39°-Nに主軸方向をもつ長方形である。各壁の長さは北東壁2.8m、北西壁3.3m、南東壁3.4m、南西壁2.8mである。

〈壁〉

各壁の検出面からの高さは、南東壁で13cm、南西壁10cm、北東壁が15cm、北西壁14cmである。立ち上がりはいずれの壁もほぼ垂直である。

〈床〉

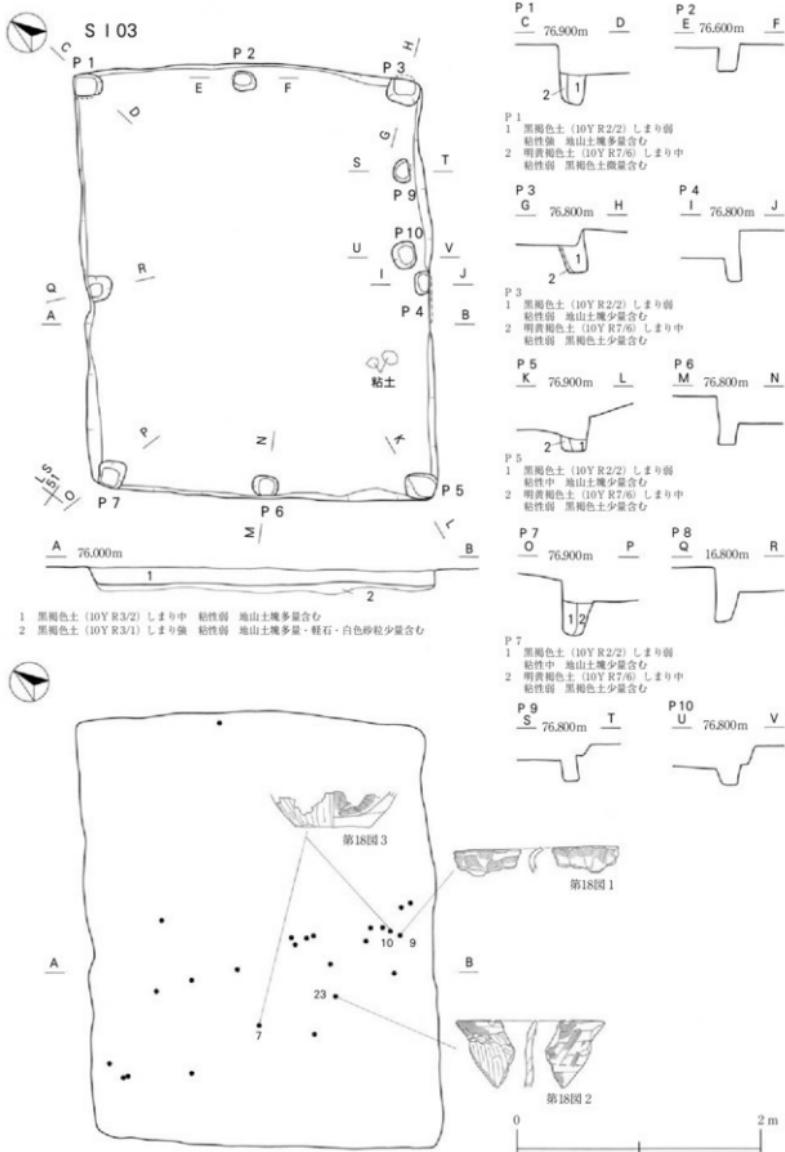
掘形底面全体に、地山土塊と黒色土の混合土を敷き詰めて平坦に整えている。南東壁中央部からやや南よりの位置に、わずかに白色粘土が分布していたが、カマドは確認できなかった。

〈壁溝〉

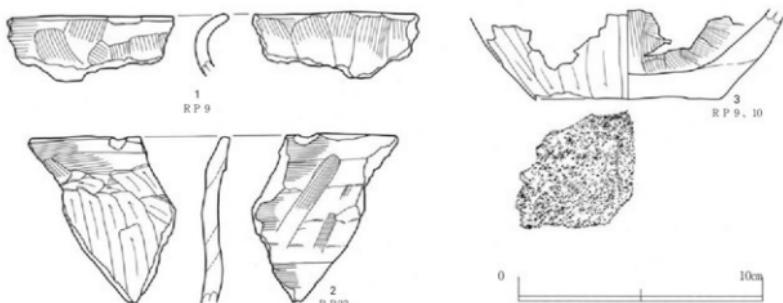
確認できなかった。

〈柱穴〉

床面から柱穴と考えられるビットを10基検出した。住居四隅と各壁中央部床面に位置するP1～8は、住居上屋を構築するための柱穴と考えられる。床面



第17図 S I 03竪穴住居跡平面図・断面図・遺物出土位置図



第18図 S I 03竪穴住居跡出土遺物図

からの深さは、浅いもので18cm、深いもので25cmである。P 9、10は南東壁中央部からやや北東よりの位置に2基対になるように位置する。P 3、4の間に位置し、重複も無いことからこれらは他のピットと同時に存在していた可能性がある。その場合、柱穴というよりは入り口を構成する施設の受け口と考えられる。

〈カマド〉

カマドは確認できなかった。

〈出土遺物〉

住居跡床面から、土器器壺の破片が出土した。第18図1、2は口縁部破片で、1は口縁部が外湾する器形である。2は、胴部上半部から施されるケズリのため口縁部に段がついているが、基本的には胴部上半部で緩く膨らんで、口縁部にむけて直線的に外傾する器形である。3は底部資料で、底部外面はいわゆる砂底状になっている。

〈時期〉

本住居跡は、貼床である2層中に十和田a火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以降に造られたのは確実である。出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考える。

S I 05（第19～22図）

〈位置・確認状況〉 L R42・L R43・L R44・L O43・L Q43グリッドに位置する。

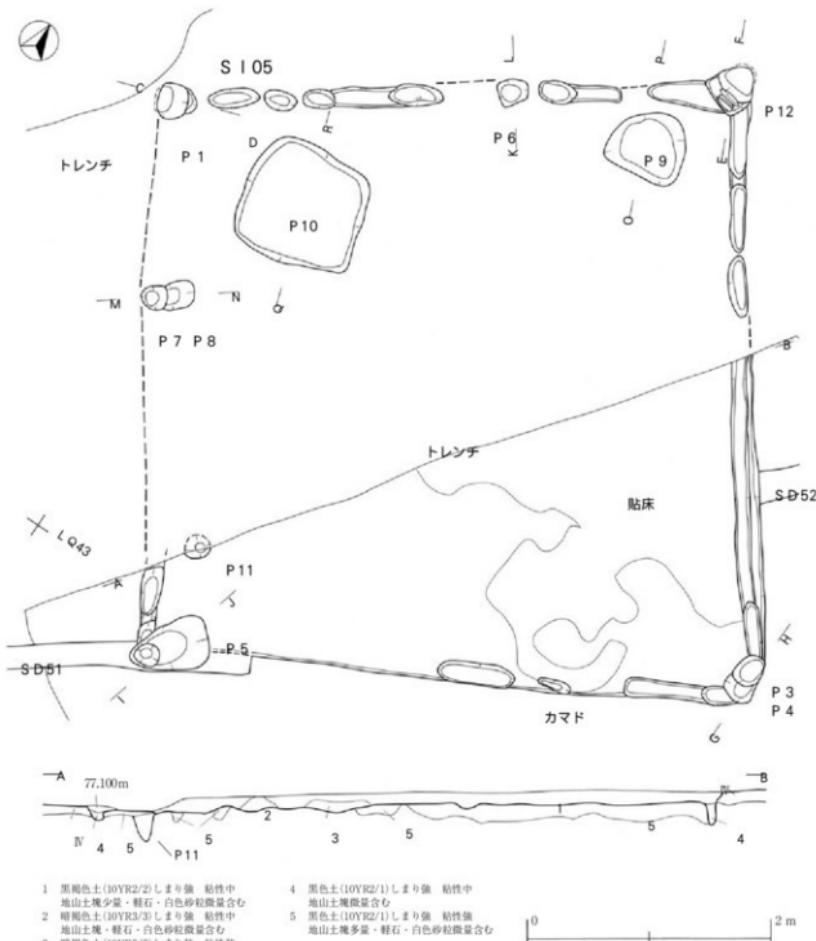
第III層中位～第V層上面で地山土塊を含む黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉

S D51、52と重複しており、新旧関係は、S D52よりも本住居跡の方が新しい。S D51は当初本住居跡よりも新しいと考えていたが、住居に伴う排水溝の可能性が高いと判断している。

〈堆積土〉

5層に分けられた。1層は黒褐色土で地山土塊を少量含みしまりが強い。2～3層は暗褐色土で地山土塊と白色砂粒をわずかに含む。4層は壁溝内堆積土で、しまりの強い黒色土で埋められている。5層は貼床で、黒褐色・暗褐色土に多量の地山土塊を含む。1～3層は少量ではあるが地山土塊を含み、しまりが強く、レンズ状堆積ではないことから人為的に埋められたと考える。また、



第19図 S 105堅穴住居跡平面図・断面図

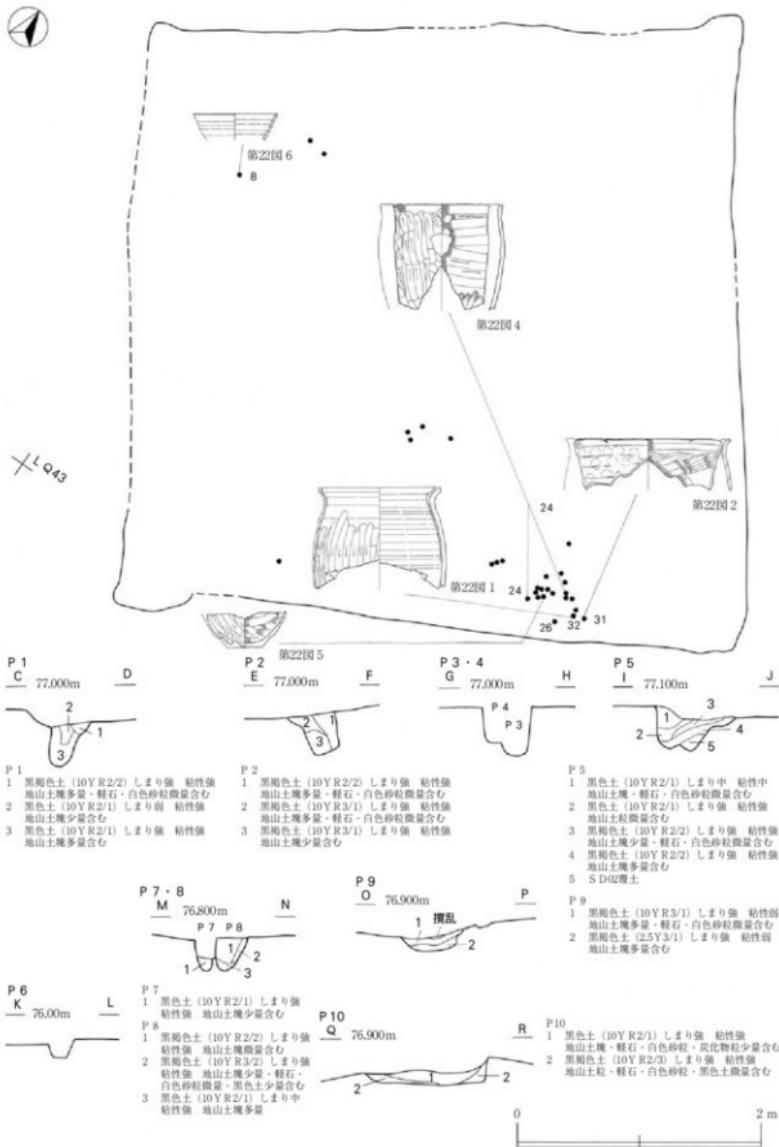
白色砂を含むことから、埋められた時期は十和田a火山灰降下以後である。

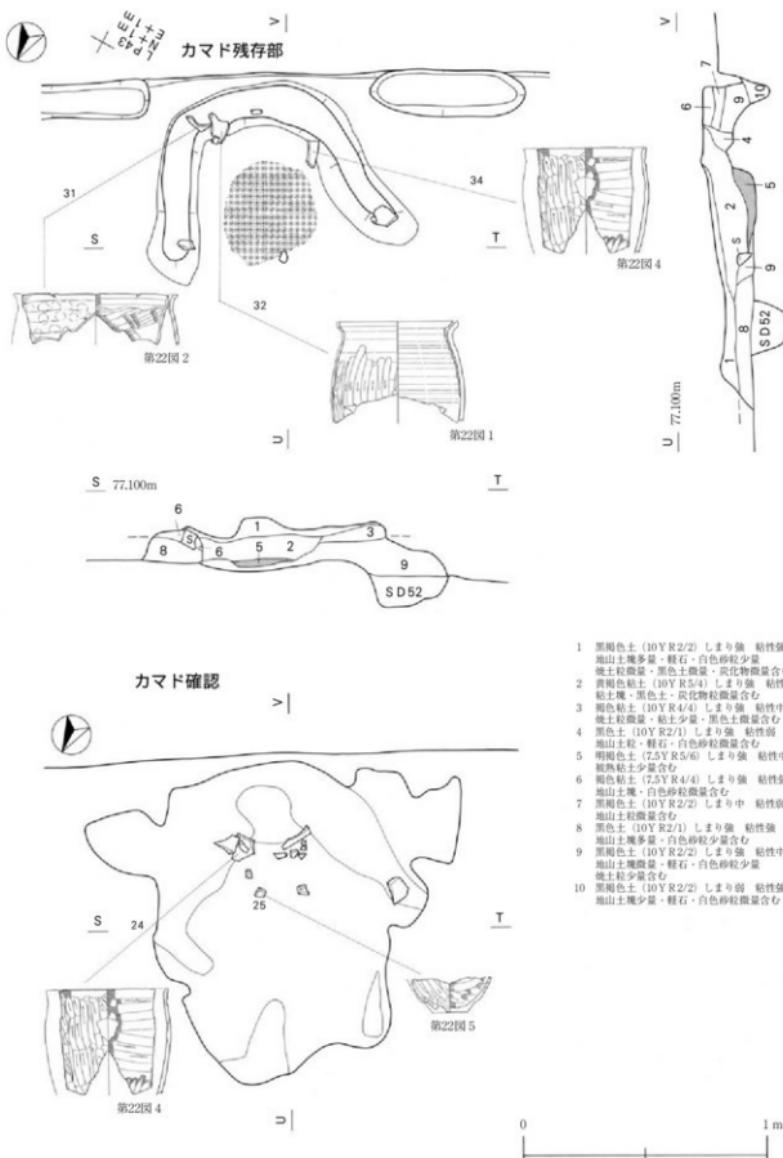
#### 〈平面形・規模〉

平面形は北東壁が若干長いがほぼ正方形状を呈する。各壁の長さは、北東壁の一部と北西壁、南西壁のほとんどがトレンチにより掘り下がっているため正確な数値は不明だが、四隅のピットで測ると、北東壁5.2m、北西壁4.9m、南東壁5.1m、南西壁4.8mである。

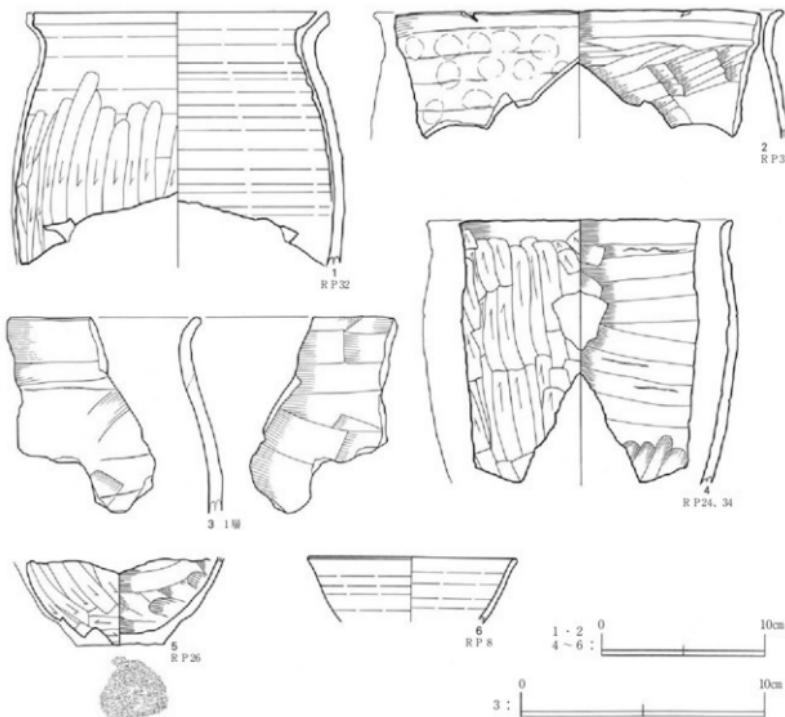
#### 〈壁〉

各壁の検出面からの高さは、南東壁で6cm、南西壁で4cm、北東壁で8cmである。北西壁は完全に欠失している。壁の立ち上がりは南東壁ではほぼ垂直であ





第21図 S105堅穴住居跡カマド残存部・確認平面図と上面・中層遺物出土位置図



第22図 S 105竪穴住居跡出土遺物

るが、北東壁では約60°の傾斜で立ち上がっている。

〈床〉 捩形底面は凹凸があり、その窪んでいる範囲に地山土塊と黒色土の混合土を敷き詰めて、平坦に整えている。なおA-Bライン以西では貼床以下で住居跡を確認している。

〈壁溝〉 南東壁の一部と南西壁以外は全体を巡る。幅13~15cm、床面からの深さは、浅いところで5cm、深いところで20cmである。南西壁も、住居南角の状況から本来は壁溝があった可能性は高いと考えられる。

〈柱穴〉 床面、貼床下から柱穴と考えられるピットを9基検出した。P 1~5は、住居跡四隅に位置する柱穴である。P 3と4が重複しており、その他P 1、2、5も平面形が乱れていることから、おそらく一度建て替えが行われたと考える。P 7、8、11は南西壁沿いにだけ見られる柱穴で、補助柱または、入り口状施設の受け口の可能性が考えられるが、P 11上面には貼床が認められることから、これらも2時期あった可能性が高い。P 9・10は床下で土坑状を呈する。どち

らも、貼床と同じ性質の土で埋められている。

〈カマド〉

南東壁の中央からやや北東よりの位置で、地山土塊や焼土粒を含む黒褐色・黄褐色土の広がりで確認した。規模は、長さ75cm、幅112cmで、主軸方位は住居主軸方位とはほぼ同じでE-52°-Sである。カマドは袖の一部と燃焼部が残存していた。袖は、褐色や黒色の比較的粘性の強い土で構築されている。カマド本体も同じ土を用いて構築されていたと考えられるが、完全に倒壊しており全体像は不明である。堆積土は10層に分層できた。1、2、4層は流入土もしくは破壊された構築土である。3、6~10層は、カマド残存部の構築土である。燃焼部は、一部9層構築土上面にかかっているが、大半は地山面を利用している。

〈出土遺物〉

住居跡内、カマド内の堆積土中から土師器の甕や壺の破片が出土した。第22図の1は、ロクロ整形後、外面胴部上半部から下にむけてケズリ調整を施し、内面はロクロ目がそのまま残る。2は内傾して立ち上がり、口縁部が弱く外反する器形を呈する。外面調整は、口縁部に弱いナテ調整が施されるが、胴部上半部は指おさえのみのため輪積痕が明瞭に確認できる。3も同様な資料である。4は胴部上半部が弱く膨らみ、口縁部がわずかに外反する器形である。外面口縁部はヨコナデを全周させるが、その後に施される下から上にむけたケズリがこれを切るために、単位幅が一定しない。5は底部資料で、底部外面はいわゆる砂底状になっている。

〈時期〉

本住居跡は、人為堆積土である貼床中に十和田a火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以降に造られたのは確実である。出土遺物の特徴から平安時代（10C前葉～中葉）に属すると考える。また、S D52を介することで、S I 06Aとの前後関係（本住居跡の方が新しい）を把握するのが可能である。

S I 06 A（第23~26図）

〈位置・確認状況〉 L N44・45、L O44・45グリッドに位置する。第V層上面で地山土塊を含む黒褐色土の広がりで確認した。

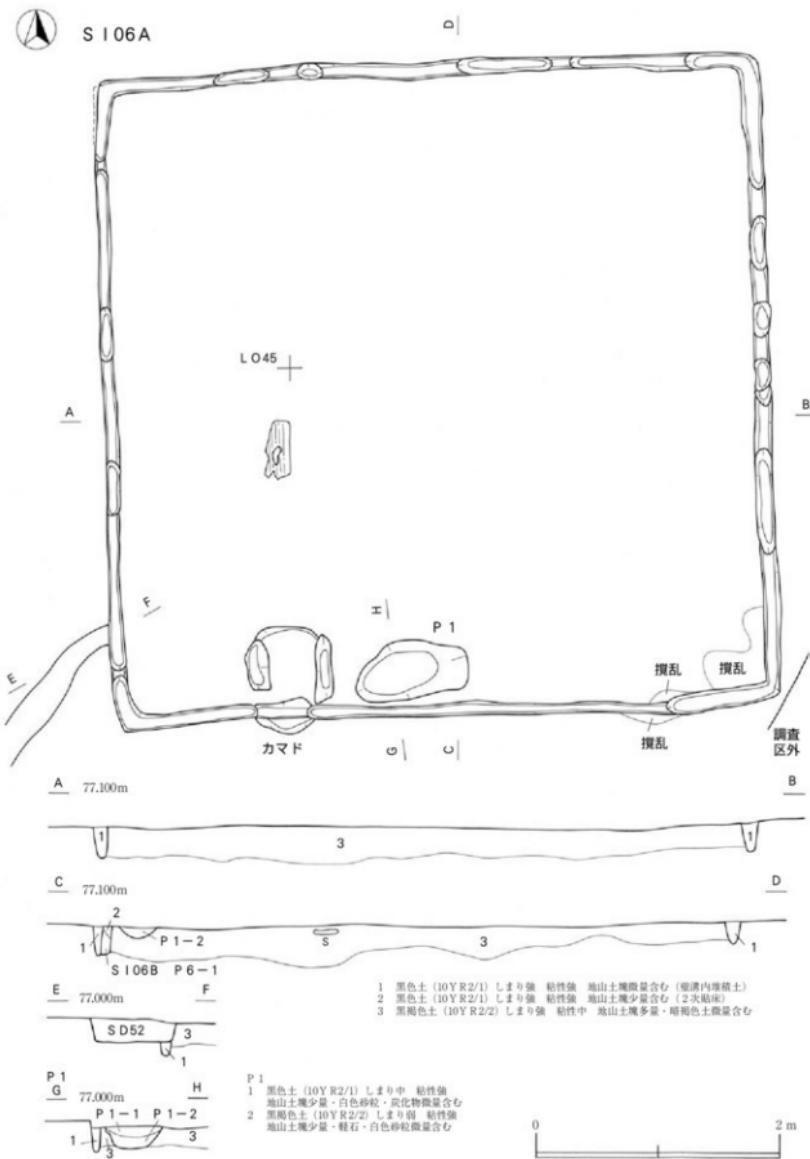
〈重複関係〉

S D52と重複しており、新旧関係はS D52よりも本住居跡の方が古いと考えていたが、本住居跡の検出がすでに貼床上面であったため正確な新旧関係は不明である。そのため、S D52が本住居跡の排水溝になる可能性が高い。

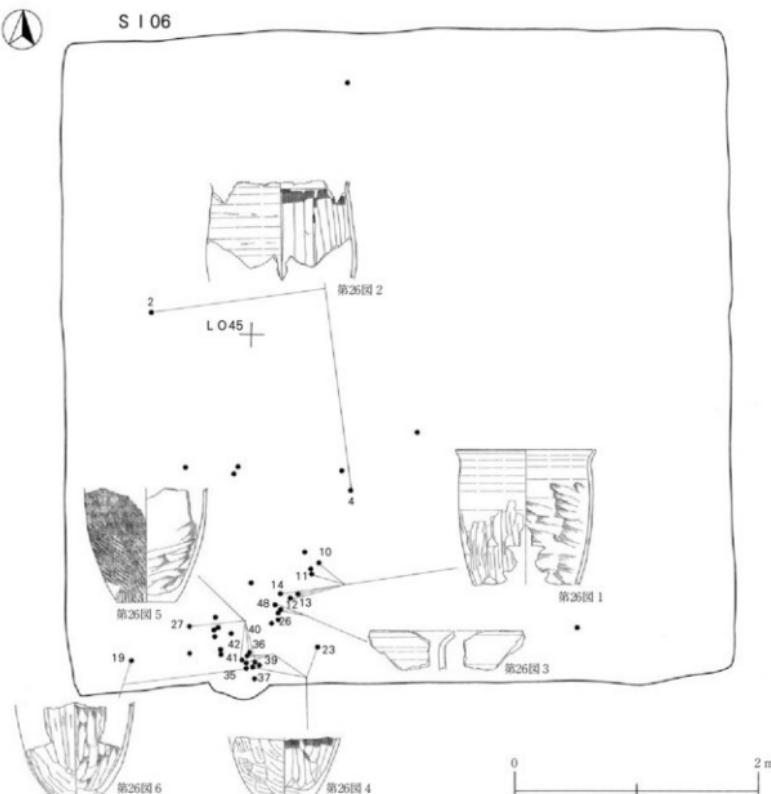
また、S I 06Bとも重複するが、本住居跡はS I 06Bの建て替え後の姿なので本住居跡が新しい。

〈堆積土〉

3層に分けられた。1層は壁溝内堆積土で、しまりの強い黒色土で埋められている。2、3層は貼床で、黒色・黒褐色に多量の地山土塊を含む。住居の埋没過程を判断するための堆積土が残っていないため、埋没過程は不明であるが、本住居跡は集落内において古段階の住居跡があるので、おそらく埋められ



第23図 SI 06A 積穴住居跡平面図・断面図



第24図 S I 06 A 穫穴住居跡遺物出土位置図

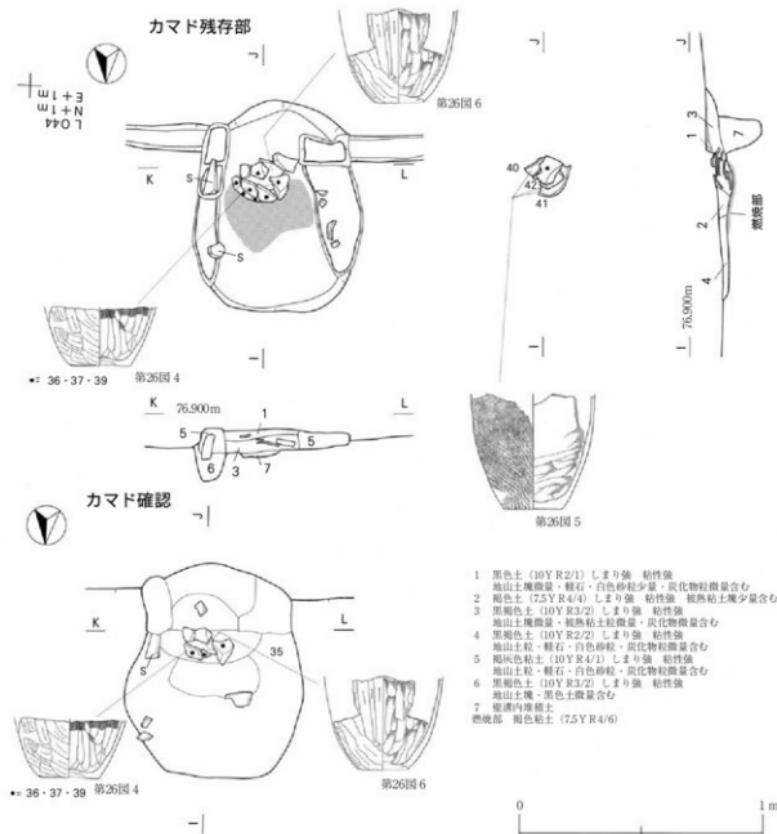
たと考える。

（平面形・規模） 平面形はほぼ正方形状を呈する。各壁の長さは、壁全てがトレンチにより掘り下がっているため壁溝の範囲で規模をとらえると、東壁5.2m、西壁5.3m、北壁5.4m、南壁5.4mである。

（壁） 全ての壁が失われているので、高さや立ち上がりの傾斜は不明である。

（床） 捩形底面に、地山土塊と黒褐色土の混合土を敷き詰めて平坦に整えている。また、L 045グリッド南西脇に炭化材があるが、床面上で確認できたのはこの1点のみのため、焼失家屋かどうかは不明である。なお、樹種同定の結果クリ材であることが判明している。

（壁溝） 住居跡全体を巡る。幅9～15cm、床面からの深さは、浅いところで18cm、深いところで24cmである。深さにばらつきがあり、東壁中央部ではピット状に



第25図 S I 06 A 穴住居跡カマド残存部・確認平面図と上面・中層遺物出土位置図

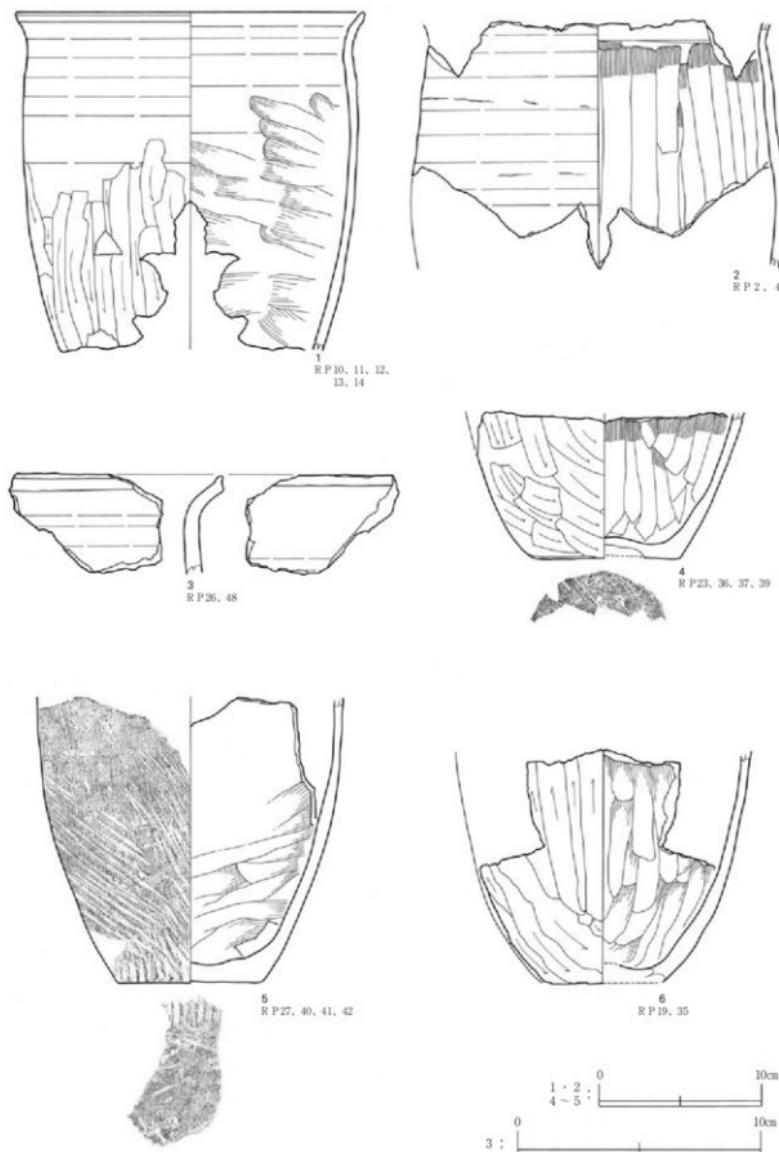
なっている部分も確認できる。S I 02・05のように、入り口状施設の受け口になる可能性が高い。

#### （柱穴）

明確な柱穴は確認できなかった。P 9は、カマドのすぐ脇にあり、最深部で19cmで断面が鍋底状を呈すことなどから、水壺などを設置していた窪みなどの機能が考えられる。

#### （カマド）

南壁の中央からやや西よりの位置で、地山土塊や被熱粘土粒を含む黒褐色・褐色土の広がりで確認した。残存している規模は、長さ87cm、幅70cmで、主方位は住居主軸方位とほぼ同じで真南をむいている。カマドは煙道及び、袖の一部と燃焼部が残存していた。煙道は壁より12cmほど南へ延びている。検出面



第26図 S I 06 A 竪穴住居跡出土遺物図

からの深さは5cmで、緩やかに立ち上がる断面形を呈している。袖は、灰褐色の粘性の強い土で構築されている。カマド本体も同じ土を用いて構築されていたと考えられるが、完全に倒壊しており全体像は不明である。堆積土は6層に分けられた。1～4層は流入土である。5・6層は、カマド残存部の構築土である。燃焼部は地山面を利用している。

## 〈出土遺物〉

住居跡内、カマド内の堆積土中から土師器の甕が出土した。第26図の1～3はロクロ整形の甕で、1は外面胴部下半部にケズリ、内面胴部下半部にナデによる再調整が施されている。2は、内面口縁部以下に縱方向のナデにより再調整が施されている。4～6は底部付近の資料で、4は底面外部にケズリによる調整の痕跡が認められる。5胴部下半部から底部にかけて、タタキの痕跡が明瞭に残っている。

## 〈時期〉

本住居跡には、十和田a火山灰に関連する堆積物がないため、住居の構築時期が火山灰降下の前後どちらかは不明であるが、出土遺物の特徴から平安時代（10C前葉～中葉）に属すると考える。

## S I 06B

## 〈位置・確認状況〉

L N44・45、L O44・45グリッドに位置する。S I 06Aを精査した結果、壁溝に切られるピットの存在が認められたため、それらのピット群で柱配置が構成されていた住居跡として確認した。

## 〈重複関係〉

S I 06Aと重複しており、本住居跡の方が古い。

## 〈堆積土〉

本住居跡上面にはS I 06Aがあるため、本住居跡の堆積土はない。

## 〈平面形・規模〉

堅穴の規模は、S I 06Aと同じである。

## 〈壁〉

S I 06A同様、全ての壁が失われているので、高さや立ち上がりの傾斜は不明である。

## 〈床〉

基本的に、S I 06Aと同じ床面を共有するものと思われる。そのため、床面を形成する貼床の土は、本住居跡構築段階で貼られたものと考える。

## 〈壁溝〉

S I 06Aに伴う壁溝が、本住居跡の段階からのものであるかどうかは不明だが、ピットが壁溝に切られている状態から、壁溝は伴わなかつたと考える。

## 〈柱穴〉

床面の四隅と、各壁中央部に各一つずつの合計8基確認した。床面からの深さは、浅いもので22cm、深いもので38cmである。全て柱を抜き、場所によっては再度貼床を施して整地し、その後新しく作られた壁溝に壊されている。

## 〈カマド〉

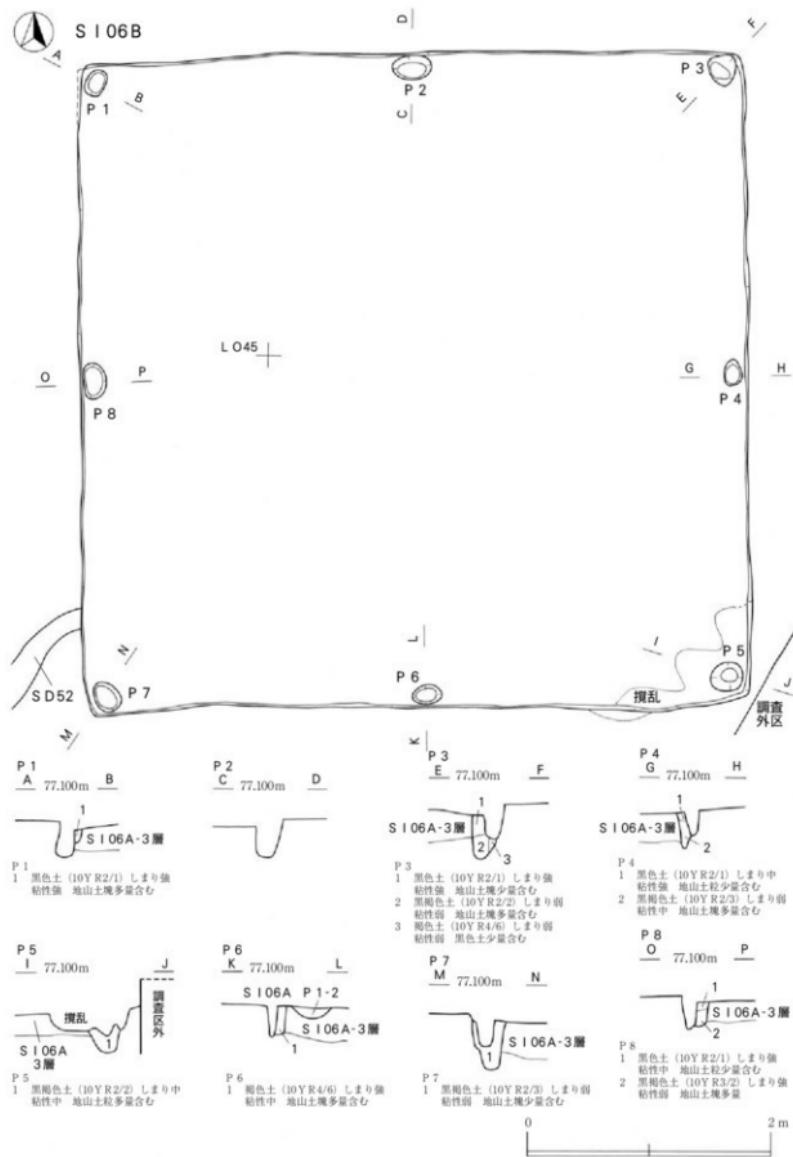
本住居跡のカマドは確認できなかった。S I 06Aにそのまま引き継がれたか、同じ場所で作り替えが行われた可能性が考えられる。

## 〈出土遺物〉

本住居跡に伴うと考えられる貼床の土からは、遺物が出土しなかった。

## 〈時期〉

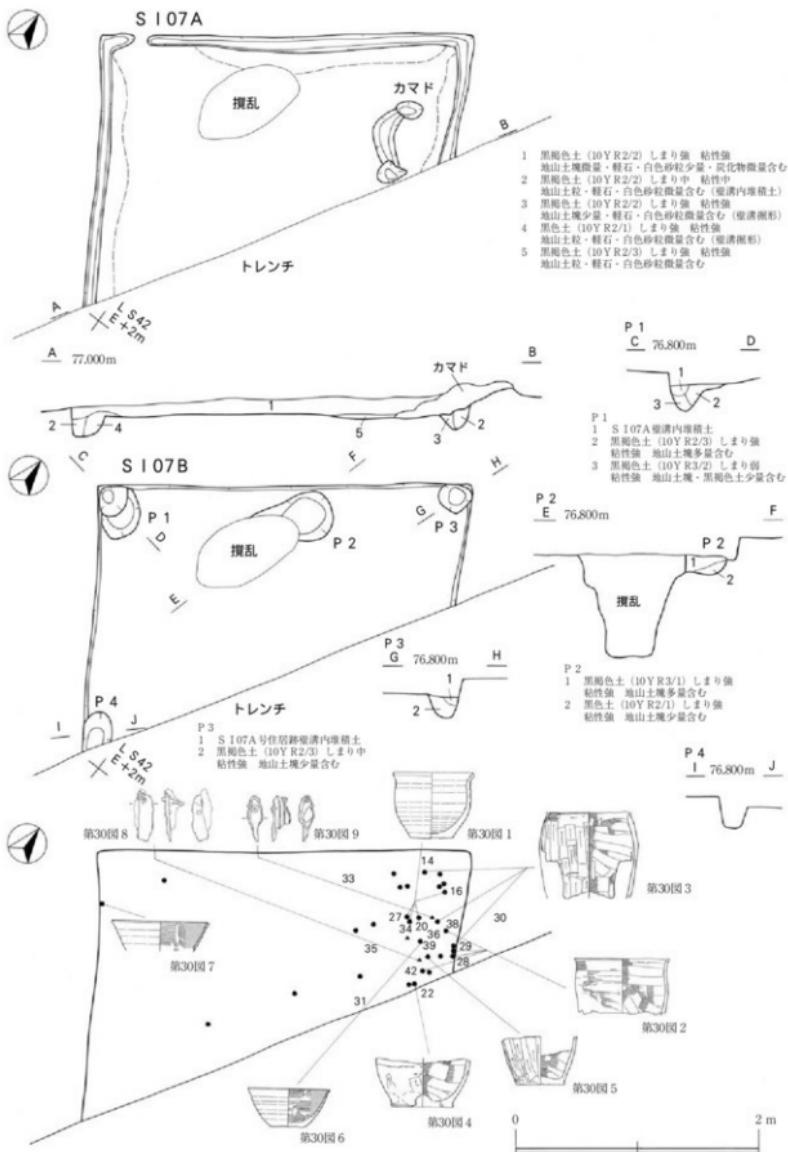
本住居跡からの出土遺物はないが、直後に営まれたS I 06Aの時期から平安時代（10C前葉）に属すると考える。



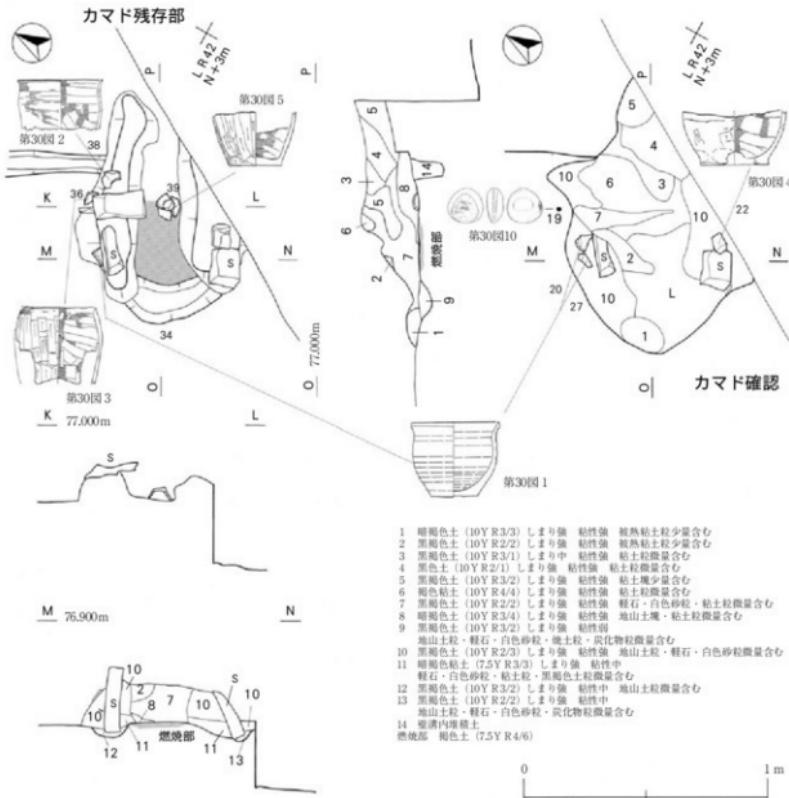
第27図 SI 06B 穫穴住居跡平面図・断面図

## S I 07 A (第28~30図)

- 〈位置・確認状況〉 L R 42・43、 L S 42・43グリッドに位置する。第Ⅲ層中位で地山土塊を含む黒褐色土の広がりで確認した。
- 〈重複関係〉 S I 07Bと重複する。本住居跡の方が新しい。
- 〈堆積土〉 5層に分けられた。1層は黒褐色土で、地山土塊・白色砂粒・炭化物を微量含む。2層は黒褐色土で、地山土塊と白色砂粒を微量含む壁溝内堆積土である。3~4層は壁溝周辺部を補強する部分貼床の土である。5層は、黒褐色土で地山土塊と白色砂粒を微量含む土で、カマド周辺部にのみ認められる。
- 本住居跡は、平安時代には埋没していた沢の上部に構築されている。埋没沢1には厚く黒色・黒褐色土が堆積しており、これが本住居跡堆積土の主に由来する土と考えられる。そのため、他の住居跡に比べ、黒色土中に占める地山土塊や白色砂粒の割合が極端に低く、土の性質から人為堆積か自然堆積かの判断が難しいうえに、廃棄後の堆積土が1層のみで埋没過程も分からぬ。ただ1~5層まで全て、軽石と白色砂を含むことから、埋没したのは十和田a火山灰降下以後である。
- 〈平面形・規模〉 住居跡全体の約東半分がトレチで掘り下がっているため、正確な平面形及び規模は不明である。残存状態から推測できる平面形は、正方形状もしくは長方形状を呈すると考えられる。各壁の長さは、北西壁で3.1m、部分的に残っている北東壁は1m以上、南西壁が2.3m以上である。
- 〈壁〉 残存している範囲で、検出面からの高さが8~10cmで、各壁いずれも垂直に立ち上がる。
- 〈床〉 挖形底面の壁溝付近のみに、地山土塊と黒褐色土の混合土を敷き詰めた貼床が認められる。外の大部分は、掘形底面の地山面を平坦に整えている。
- 〈壁溝〉 確認できる範囲内で、北西壁の1カ所以外は全周する。幅7~14cm、床面からの深さは、浅いところで5cm、深いところで16cmである。
- 〈柱穴〉 本住居跡に伴う明確な柱穴は確認できなかった。
- 〈カマド〉 北東壁の北角からやや南東寄りの位置で、被熱粘土粒を含む黒褐色・暗褐色土の広がりで確認した。残存している規模は、長さ95cm、幅70cmで、主軸方位はE-24°-N方向である。煙道及びカマドは袖の一部と燃焼面が残存していた。煙道は、両側を粘土によって構築しており、壁から25cmほど北東へ延びている。検出面からの深さは12cmで、緩やかに傾斜する断面形である。袖は、黒褐色の粘性の強い土や暗褐色の粘土で構築されている。袖の上部や両袖の間からは、同様な土や粘土が検出されたことから、カマド本体も同じ土を用いて構築されていたと考えられる。また、燃焼面の煙道寄りの位置に、支脚に使われた土器が逆位の状態で置いてあった。堆積土は13層に分けられた。1~8層は流入土もしくは倒壊した構築土や粘土である。9~11層は、カマド残存部の構築土である。燃焼部は地山面を利用している。



第28図 S 107A・B 穴住居跡平面図・断面図・S 107A 遺物出土位置図

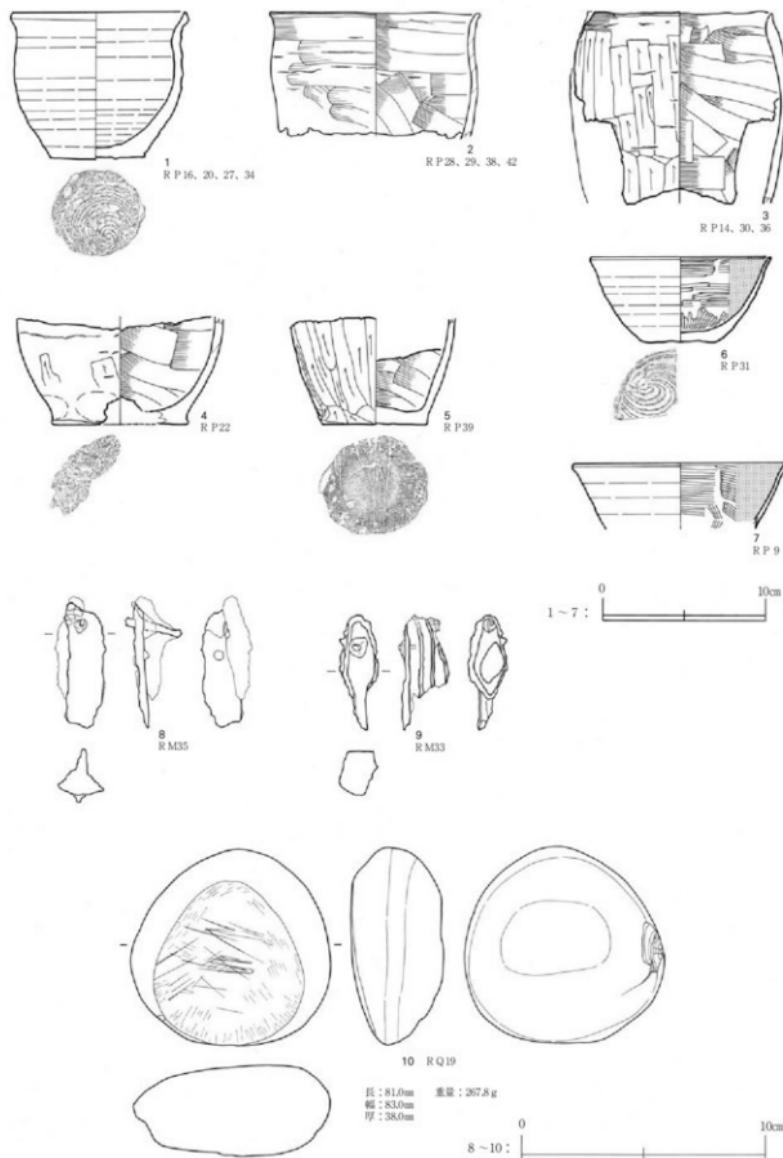


第29図 S107A 穫穴住居跡カマド残存部・確認平面図と上面・中層遺物出土位置図

&lt;出土遺物&gt;

住居跡内、カマド内の堆積土中から土師器の壺や環、鉄製品、砾石が出土した。第30図の1～3は口縁部が残っている壺で、1は内外面ともロクロ目を残すもの、2は器外面の口縁部にはヨコナデ、胴部上半部は弱いナデ調整で仕上げるもの、3は口縁部のヨコナデを、胴部からのケズリが切る、口縁部が内傾する壺である。4、5は底部資料で、4は底面外部がいわゆる砂底状である。5は底面外部をケズリにより調整し、その際にいたヘラ描き状の線が認められる。壺はいずれも小型で際だった特徴である。6・7は内黒の土師器壺でどちらも内面には底部付近に放射状、中位から口縁部の範囲は横方向のミガキで仕上げられている。6は底部まで残っており、回転糸切無調整である。

8・9は鉄製品で、8は一端が欠けている穂摘具である。9も目釘状のものが認められるため穂摘具の一種と考えるが、中央部分が細くなる。10は扁平な



第30図 S I 07 A 穫穴住居跡出土遺物図

円礫の片面を使用した砥石である。一部線刻状を呈している。

〈時期〉

本住居跡は、1、2層中に十和田a火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以後に埋没したのは確実である。出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考える。

S I 07B（第28図）

〈位置・確認状況〉

L R42・43、L S42・43グリッドに位置する。S I 07Aを精査した結果、壁溝に切られるピットの存在が認められたため、それらのピット群で柱配置が構成される住居跡として確認した。

〈重複関係〉

S I 07Aと重複しており、本住居跡の方が古い。

〈堆積土〉

本住居跡上面にはS I 07Aがあるため、本住居跡の堆積土はない。

〈平面形・規模〉

堅穴の規模は、S I 07Aと同じである。

〈壁〉

S I 07A同様である。

〈床〉

基本的に、S I 07Aと同じ床面を共有するものと思われる。そのため、床面を形成する貼床の土は、本住居跡構築段階で貼られた可能性がある。

〈壁溝〉

S I 07Aに伴う壁溝が、本住居跡の段階からのものであるかどうかは不明だが、柱穴が壁溝に切られている状態から、壁溝は伴わなかったと考える。

〈柱穴〉

床面で4基確認した。北西壁の両端と中央部と南西壁の残存している範囲で最も南東よりの位置である。床面からの深さは、浅いもので15cm、深いもので22cmである。全て柱を抜き、場所によっては貼床を施して整地し、その後S I 07Aに伴う壁溝に壊されている。

〈カマド〉

本住居跡に伴うカマドは確認できなかった。S I 07Aにそのまま引き継がれたか、同じ場所で造り替え、もしくは残存していない範囲にあった可能性を考えられる。

〈出土遺物〉

本住居跡に伴うと考えられる貼床の土からは、遺物が出土しなかった。

〈時期〉

本住居跡からの出土遺物はないが、直後に営まれたS I 07Aの時期から平安時代（10C前葉～中葉）に属すると考える。

S I 08（第31・32図）

〈位置・確認状況〉

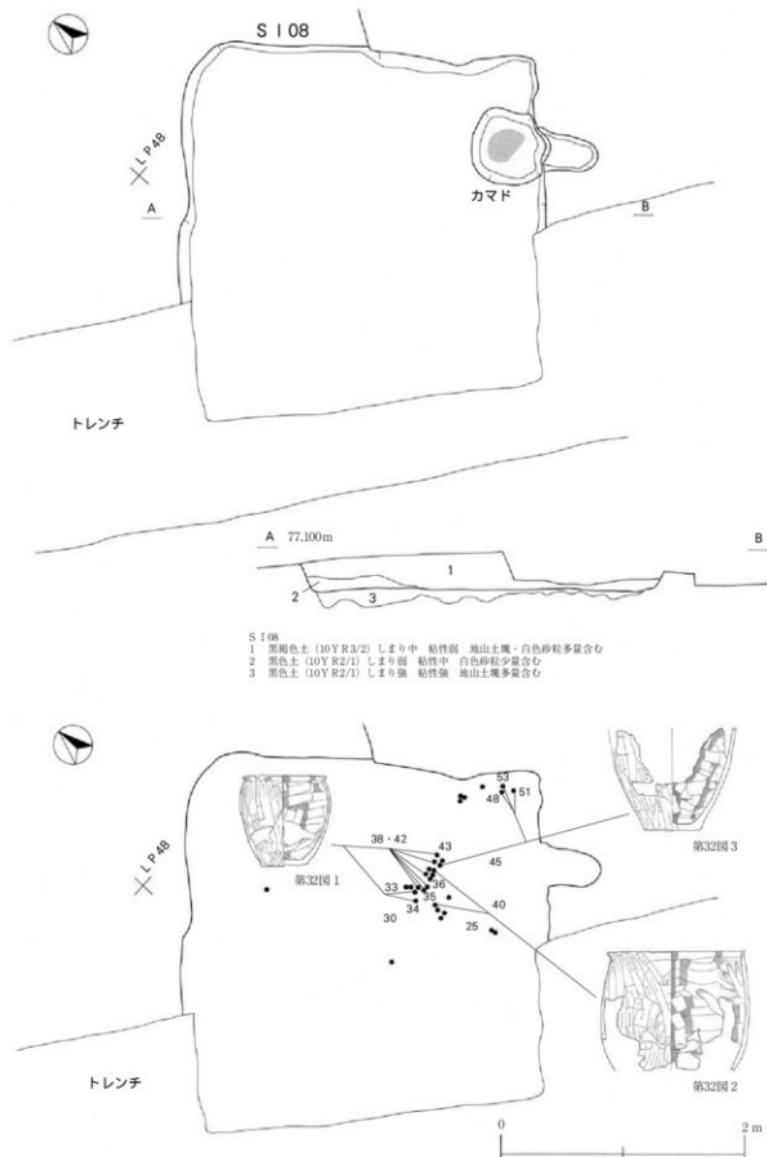
L O47・48、L P47グリッドに位置する。第Ⅲ層中位及び第V層上面で地山土塊を含む黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉

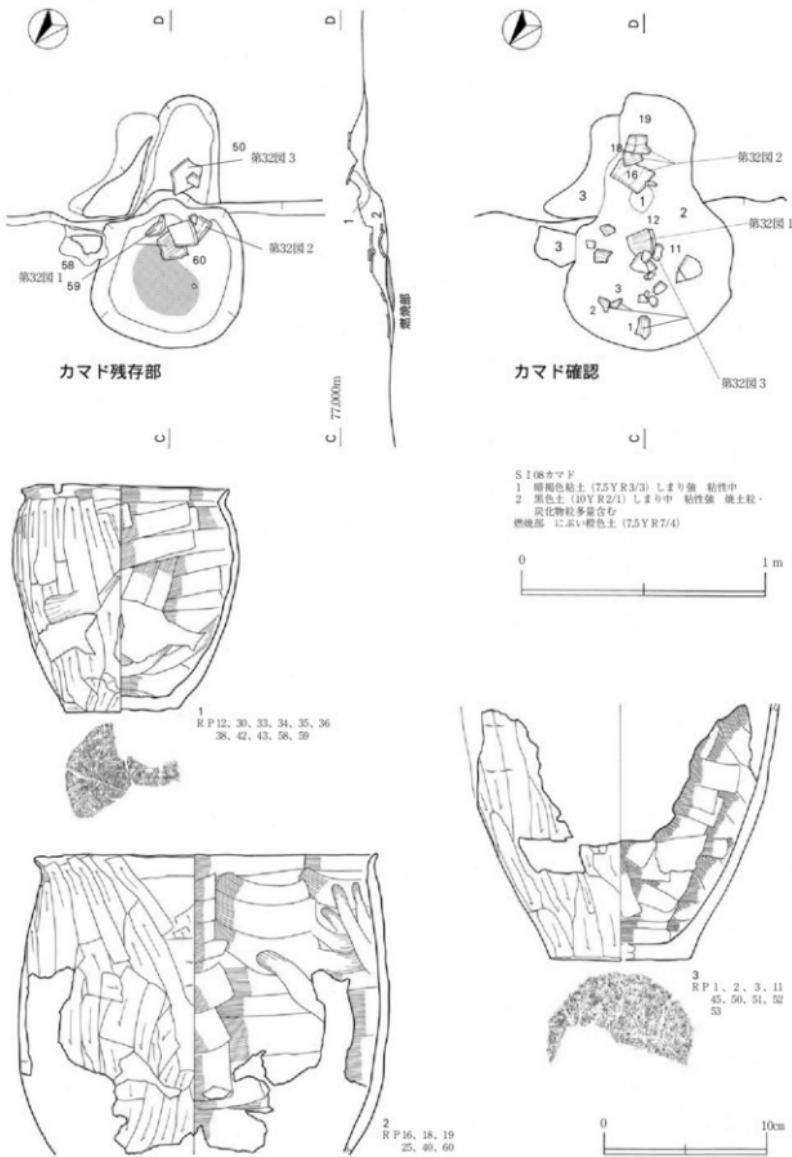
重複する遺構はない。

〈堆積土〉

3層に分けられた。1層は黒褐色土で地山土塊・白色砂粒を含む。2層は黒色土で白色砂粒を少量含み、しまりが弱い。3層は黒褐色土で、地山土塊を大量に含む貼床の土である。1層が地山土塊と白色砂粒を不規則な状態で含むことから、人為的に埋め戻されていると考えられる。2層は、埋め戻し土の下敷きになった住居の建築部材の腐食層である。なお、1・2層中に白色粒が認め



第31図 S 108竪穴住居跡平面図・断面図・遺物出土位置図



第32図 S I 08竪穴住居跡カマド残存部・確認平面図と上面・中層遺物出土位置図・出土遺物図

されることから、埋没したのは十和田a火山灰降下以後である。

〈平面形・規模〉

南西側1/3ほどがトレンチにより削平されているが、貼床の範囲により平面形、規模をとらえることが可能である。平面形は北西壁が若干長い台形状である。各壁の長さは、北東壁2.7m、これ以外は貼床の範囲を参考にすれば、北西壁3m、南東壁2.6m、南西壁2.8mである。

〈壁〉

各壁の残存している部分の高さは、南東壁12cm、北東壁で20cm、北西壁22cmである。南西壁は完全に欠失している。壁の立ち上がりは60°～70°傾斜している。

〈床〉

掘形底面全体に、地山土塊と黒色土の混合土を敷き詰め平坦に整えている。

〈壁構〉

確認できなかった。

〈柱穴〉

確認できなかった。

〈カマド〉

南東壁の中央からやや北東よりの位置で、暗褐色粘土と焼土粒を含む黒色土の広がりで確認した。規模は、長さ109cm、幅76cmで、主軸方位はE-58°～Sと住居主軸方位よりわずかに南にずれている。煙道及びカマドは袖の一部と燃焼部が残存していた。煙道はわずかに地山を掘り窪めて、壁から南東方向へ44cm延びる。煙道掘形の北東沿いに、にぶい橙色の粘土で煙道側壁及び天井を構築していたと推測する。袖は、煙道と同様ににぶい橙色の粘土で構築されている。わずかに一部残っているのみで、芯材などは分からなかった。カマド本体も粘土を用いて構築されていたと考えられるが、完全に倒壊しており全体像は不明である。堆積土は3層に分層できた。1、2層は流入土もしくは破壊された構築土である。3層は、カマド残存部の構築土である。燃焼面は地山面を利用している。また燃焼面上部から、支脚に用いられていた可能性のある土器が割れた状態で出土した。

〈出土遺物〉

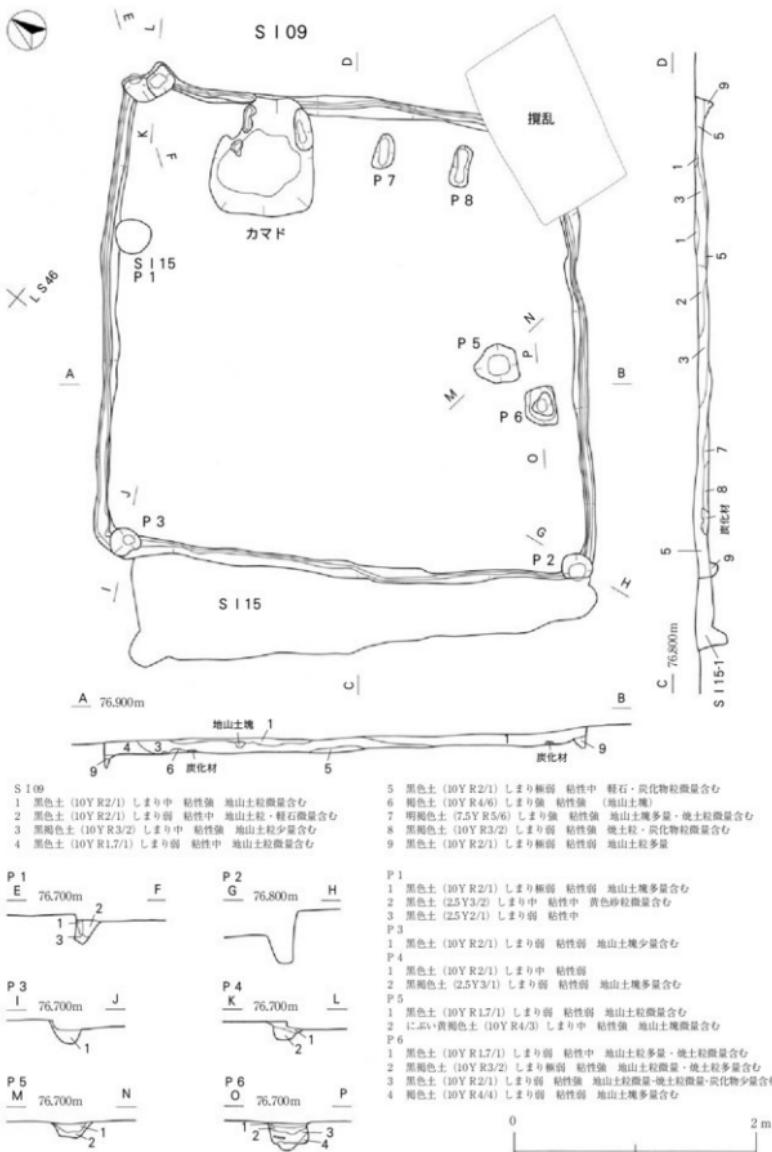
カマド内の堆積土中やカマド近辺から土師器の甕や壺の破片が出土した。第32図の1は、胴部上半部が張り出して口縁部が短く外反する器形で、外面口縁部はヨコナデ、その後胴部は底部から口縁部に向けて施すケズリで仕上げている。また底部外面には木葉痕が認められる。2は胴部中位に最大径を有し口縁部が短く外反する器形で、1と同様に外面口縁部ヨコナデ後に下からのケズリ調整を施すが、一部口縁端部までケズリが及んでいる。5は底部資料で、底部外面はいわゆる砂底である。

〈時期〉

本住居跡は、1、2層中に十和田a火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以後埋没したのは確実である。出土遺物の特徴から平安時代（10C前葉～中葉）に属すると考える。

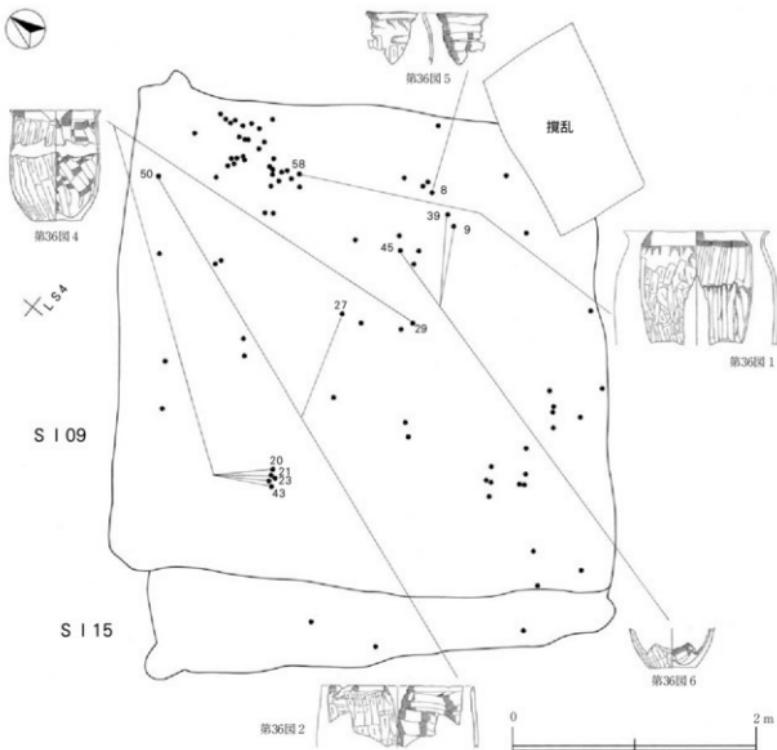
S I 09 (第33～36図)

〈位置・確認状況〉 L R 45・46、L S 45グリッドに位置する。第IV層中位～V層上面で黒土の広がりで確認した。



第33図 S 109竪穴住居跡平面図・断面図

- 〈重複関係〉 S I 15と重複する。本住居跡の方が新しい。
- 〈堆積土〉 9層に分けられた。1～4層は黒色、黒褐色基調の土で、レンズ状に堆積している。5～8層は、床面上に部分的に堆積している土で、家屋の焼失に伴う炭化物粒や焼土粒との混合層、または崩落土を含む。9層は壁溝内堆積土であるが、他の住居跡壁溝内堆積土と比べて極めて縮まりが弱い。住居跡廃絶時に壁板が抜かれた可能性がある。なお、2、5層には少量ながら軽石が含まれることから、埋没したのは十和田a火山灰降下以後である。
- 〈平面形・規模〉 住居跡東角の部分に搅乱があるが、北東壁と南東壁の延長線で復元できる四角形で推定すると、平面形はほぼ正方形である。各壁の長さも一部推定を含め、北東壁3.8m、北西壁3.8m、南東壁3.6m、南西壁4.1mである。
- 〈壁〉 各壁の検出面からの高さは、南東壁14cm、南西壁10cm、北東壁8cm、北西壁10cmである。立ち上がりは、いずれの壁もほぼ垂直である。
- 〈床〉 掘形底面を平坦に整えて、地山面上を床面として用いている。床面上に、炭化した建築部材や焼土が分布していることから、本住居跡は焼失家屋と考える。なお、床面出土炭化材のうち64点を樹種同定の分析にかけたところ、うち51点がスギ材であった。この他の樹種をみると、屋根葺き材と考えられるススキ属の資料も出土した。のことから、付近に散在する多くのスギ材もおそらく屋根材になると考えられる。マツ属の材を、住居跡東隅のP 8上部で検出した。P 8は入り口状施設の受け口の可能性のあるピットであるので、この部分でのみマツ属の材が用いられるのには、なんらかの因果関係があるのかもしれない。カマド付近で特徴的に見られるのは、カエデ属の材である。偏った分布を示すことから、カマドの燃焼材もしくは、カマドに付設する構築物の部材の可能性がある。
- 〈壁溝〉 確認できる範囲内で、カマド部分以外全周する。幅5～17cm、床面からの深さは、浅いところで7cm、深いところで12cmである。
- 〈柱穴〉 床面で8基のピットを確認したが、配置から柱穴になると考えられるのは、住居の角にあるP 1～4である。東角は搅乱のため不明であるが、おそらく四隅に配置されていたと考える。またP 1と4は重複しており、P 4の方が新しい。床面からの深さは、浅いもので8cm、深いもので23cmである。柱穴内堆積土の観察から、柱は全て抜き取られており、廃絶時には開口していたようである。本住居跡は焼失家屋であることを考慮すると、上屋を解体して柱を抜いた後、竪穴内に不要な材をまとめて火を放ったものと考える。
- なおP 6、7は、位置、形状、深さから旧カマドの袖掘形とも考えられるが、カマド前庭部掘り込みや焼土が認められないことから、入り口状施設の受け口の可能性もある。
- 〈カマド〉 北東壁の北角からやや北西よりの位置で、地山土塊を含む黒褐色・黒色土の広がりで確認した。残存している規模は、長さ98cm、幅63cmで、主軸方位は

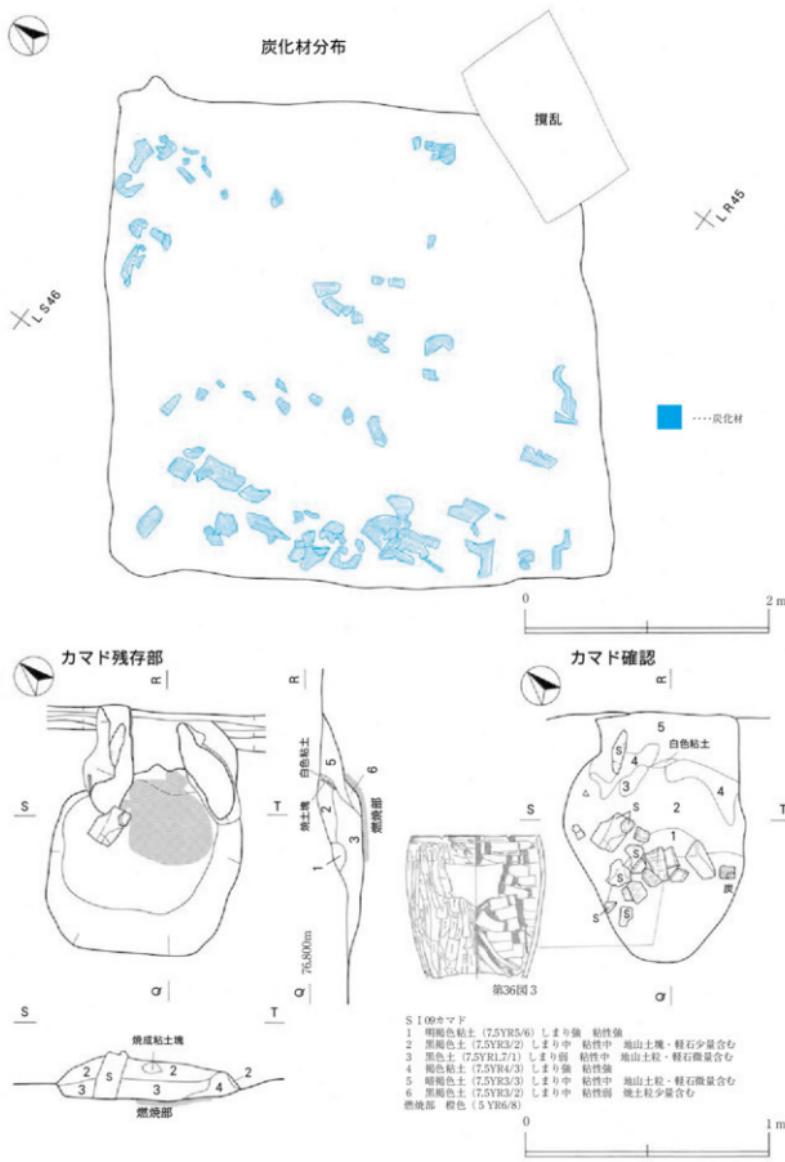


第34図 S I 09竪穴住跡遺物出土位置図

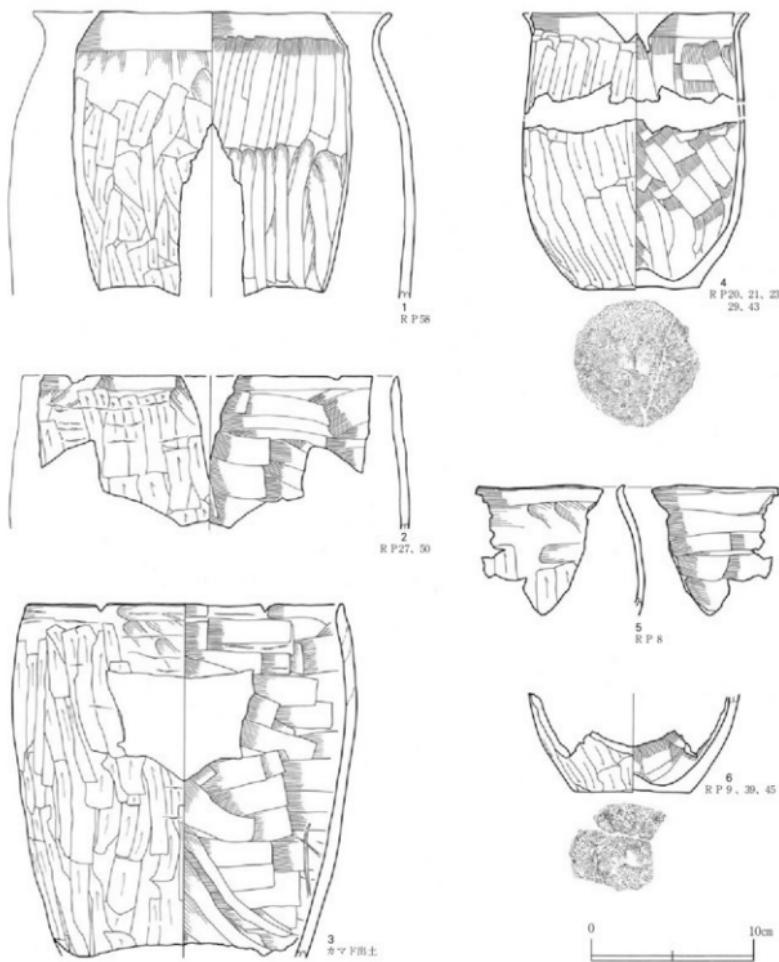
E-24°-N方向である。カマドは袖と燃焼部が残存していた。袖は、褐色の粘土で作られている。カマド本体も同じ粘土を用いて構築されていたと考えられるが、周囲には確認できなかった。また、支脚に使われていた可能性のある土器が、カマド確認面上から削れた状態で見つかった。堆積土は6層に分けられた。1~3層は流入土もしくは倒壊した構築土、粘土である。4~6層は、カマド残存部の構築土、粘土である。燃焼部は地山面を利用している。

## 〈出土遺物〉

住居跡内、カマド内の堆積土中から土師器の壺が出土した。第36図の1と2は、口縁部が外反する壺で、1は胴上半部に最大径を有し、口縁部外面はヨコナデで仕上げ、胴部以下は下方へのケズリが見られる。2は直線的に立ち上がる器形で、口縁部外面にヨコナデを施した後、ヨコナデを切るように胴部下方へむけてケズリ調整を施す。3~5は、胴部上半部から内湾して立ち上がり、口端部が弱く外反または直立する器形の壺である。いずれも口縁部外面に



第35図 S109竪穴住居跡炭化材分布図・カマド残存部・確認平面図と上面遺物出土位置図

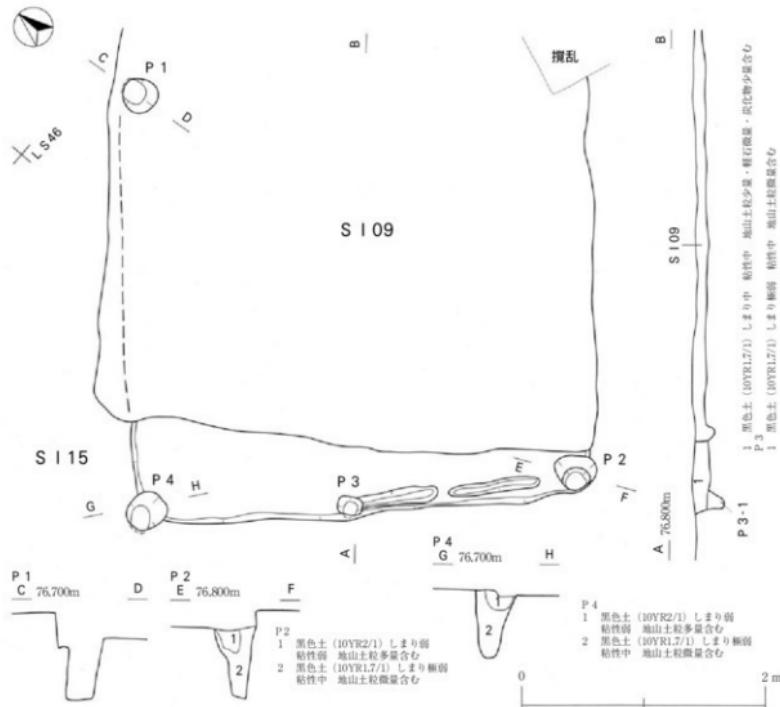


第36図 S I 09竪穴住居跡出土遺物図

弱いナデを施し、胴部外面をケズりで仕上げている。6は底部資料で、いわゆる砂底である。

〈時期〉

本住居跡は、2、5層中に十和田a火山灰起源と考えられる軽石が認められことから、十和田a火山灰降下以後に埋没したのは確実である。出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考える。



第37図 S I 15 穫穴住居跡平面図・断面図

#### S I 15 (第37図)

（位置・確認状況） L R45・46、L S45グリッドに位置する。S I 09床面で確認したP 1と、S I 09とは軸方向の違う黒色土の広がりがあることから、住居跡として確認した。

（重複関係） S I 09と重複しており、本住居跡の方が古い。

（堆積土）

1層確認した。地山土粒や軽石や炭化物を少量含む土である。本住居跡と大部分重なる位置にS I 09が建てられているので、1層はS I 09の建築者による整地層と考えられる。

（平面形・規模）

大部分がS I 09によって壊されているため正確には分からぬが、南西壁は3.8mである。

（壁）

残存している南西壁は、検出面からの高さが10cmではほぼ垂直に立ち上がる。

（床）

残存範囲内に貼床は認められない。掘底面が平坦に整えられているので、

おそらくそのまま使用したと考えられる。

〈壁溝〉

南西壁の南東半分に認められる。幅8~15cmで、深さは8cm前後である。

〈柱穴〉

本住居跡床面とS I 09床面から合計4基確認した。南西壁の両端及び中央部に計3基と、北西壁の北角と思われる場所に1基である。床面からの深さは、浅いもので14cm、深いもので58cmである。柱は全て抜かれて、S I 09構築段階で埋められて整地されている。

〈カマド〉

残存範囲内では確認できなかった。

〈出土遺物〉

遺物が出土しなかった。

〈時期〉

本住居跡からの出土遺物はないが、直後に営まれたS I 09の時期から平安時代（10C前葉～中葉）に属すると考える。

S I 10（第38・39図）

〈位置・確認状況〉 L M47・48、L N47・48グリッドに位置する。第Ⅲ層中位～第V層上面で黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉

本遺構と重複する遺構はないが、搅乱やトレンチのため半分以上が失われている。

〈堆積土〉

1層確認した。黒色土で白色砂粒を少量含む土である。他の住居跡に比べて、混ざりの少ない堆積土であることから、自然堆積の可能性が高いと考える。また白色砂は十和田a火山灰と考えられることから、埋没したのは十和田a火山灰降下以降である。

〈平面形・規模〉

北西側1/3ほどがトレンチにより、カマド南東側が搅乱により掘り下がっているため、平面形と規模ともに捉えにくいが、平面形はおそらく方形または長方形形状である。各壁の長さは、部分的に残存している南東壁と北東壁の状況から、南東壁が推定で4.1mになる。

〈壁〉

各壁の検出面からの深さは、残存している南東壁で12cmである。壁の立ち上がりはⅢ層を壁面としているため、崩落が著しく傾斜が緩くなっている。

〈床〉

残存範囲内に貼床は認められない。掘形底面が平坦に整えられているので、おそらくそのまま使用したと考えられる。

〈壁溝〉

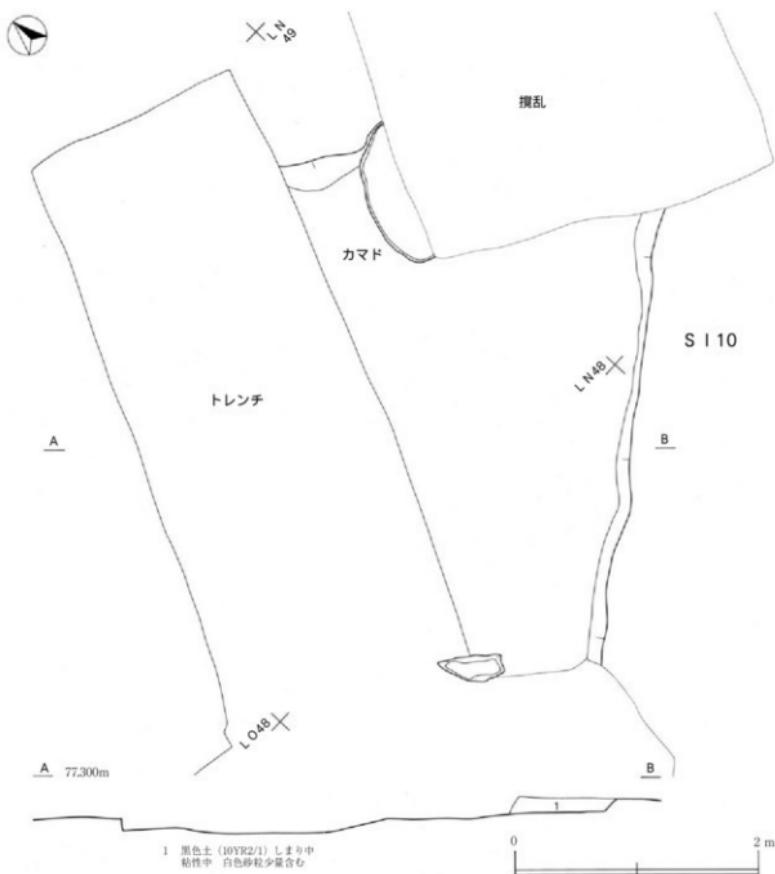
南西壁の想定ライン沿いの南角付近に、壁溝の残穴と考えられる窪みが認められるがはっきりとしない。

〈柱穴〉

柱穴は確認できなかった。

〈カマド〉

残存している北東壁沿いで、黄橙色粘土や燃焼部の広がりで確認した。規模は、長さ118cm、幅40cm以上で、主軸方位はE-59°-Nである。カマドは袖の一部と燃焼部が残存していた。袖は、黒褐色の粘性の強い土で構築されており、この他、カマド本体に使われたと思われる褐色粘土を確認面で検出したが、倒壊しているため全容は不明である。南東半部は壊れているが支脚が見つかった。堆積土は8層に分けられた。1~3層は流入土もしくは破壊された構



第38図 S I 10竪穴住居跡平面図・断面図

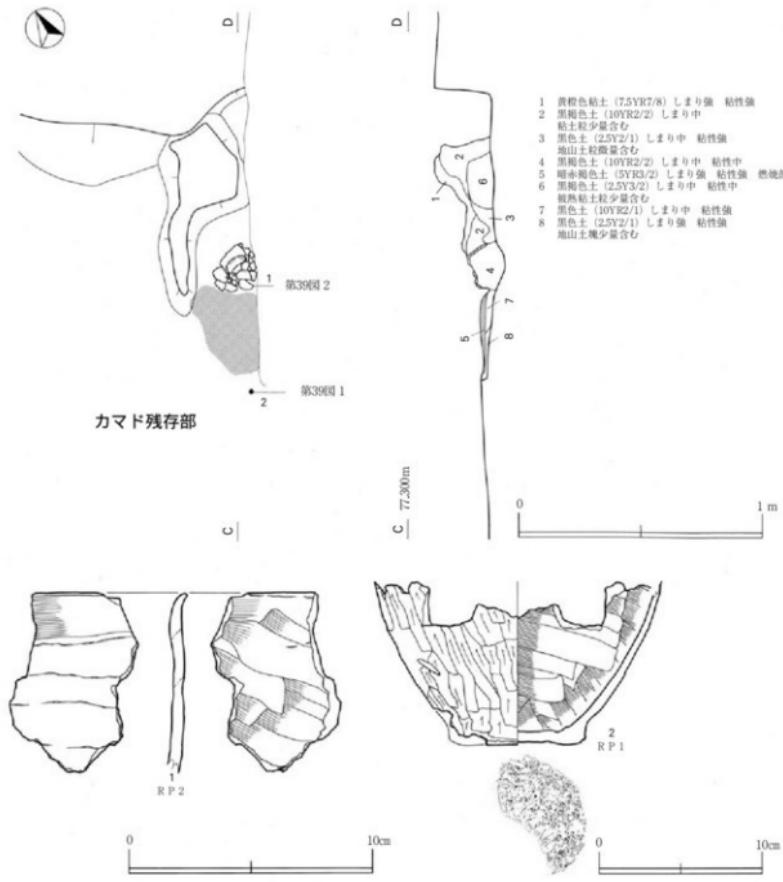
築土である。4層は支脚内部に充填された土である。6～8層は、カマド残存部の構築土である。燃焼部は7、8層の上面を利用している。

（出土遺物）

カマド内の堆積土中から土師器の甕が出土した。第39図の1は、口縁部破片で、口縁部外面にはヨコナデが認められる。5は支脚に使われた土器で、底部外面はいわゆる砂底である。

（時期）

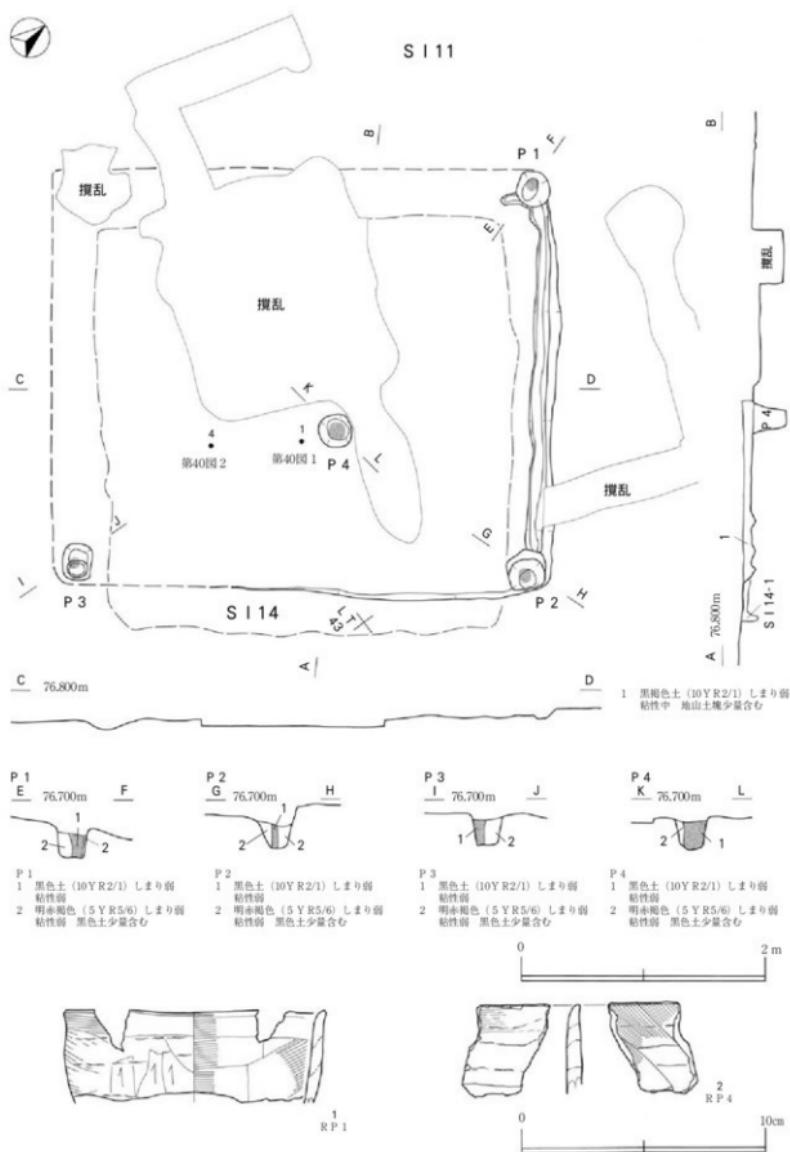
本住居跡は、1層中に十和田a火山灰起源と考えられる白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以後に埋没したのは確実である。出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考える。



第39図 S.I. 10堅穴住居跡カマド残存部平面図・出土遺物図

## S.I. 11(第40図)

- 〈位置・確認状況〉 L S43、LT42・43グリッドに位置する。第V層上面で地山土塊を少量含む黒褐色土の広がりで確認した。
- 〈重複関係〉 S.I. 14と重複する。本住居跡の方が新しい。
- 〈堆積土〉 1層確認した。少量の地山土塊を含む黒褐色の土である。堆積状況は不明だが、各柱穴に柱痕が認められることから、廃絶後そのまま放置され自然に埋没した可能性が高い。

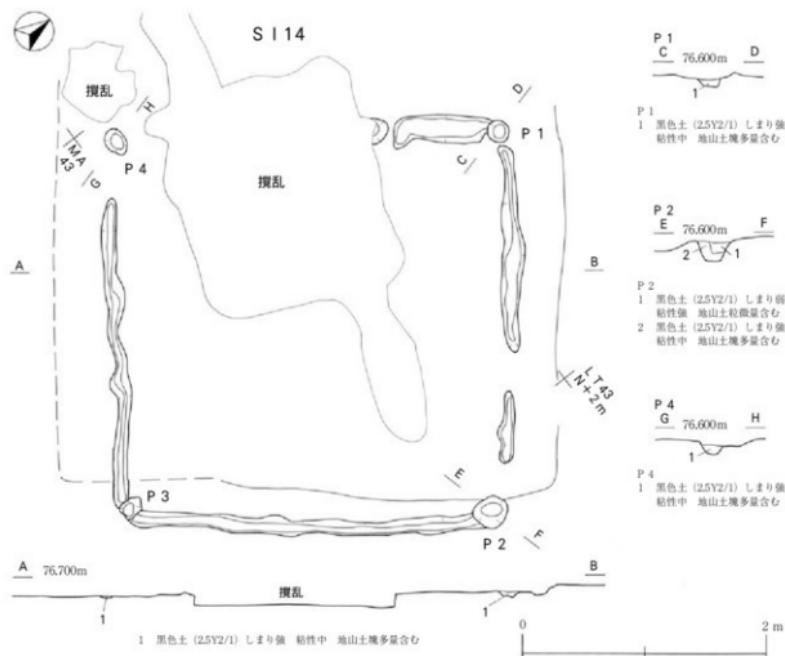


第40図 S-11縦穴住居跡平面図・断面図・出土遺物図

- 〈平面形・規模〉 北西壁と南西壁、南東壁の一部が完全に欠失しているので、ピット配置から想定される四角形で考えると、平面形は北東－南西に長軸方向をもつ長方形形状を呈する。各壁の長さは、完全に残っているのが北東壁で3.4m、南東壁は一部欠失しているが約4m、完全に欠失しているが北西壁4m前後、南西壁3.3m前後である。
- 〈壁〉 各壁の検出面からの高さは、残っている南東壁で6cm、北東壁5cmである。立ち上がりは、いずれの壁も50°前後傾斜している。
- 〈床〉 掘形底面を平坦に整えて床面にしている。
- 〈壁溝〉 北東壁沿いでのみ確認した。幅7~13cmで、深さは4cm前後と浅い。住居内堆積土と同じ土が堆積していたことから、廃絶時に開口していたと考えられる。
- 〈柱穴〉 床面から柱穴と考えられるピットを4基検出した。住居四隅と住居中央部からわずかに東によった位置の床面に、各1基ずつ配置されていると考えられるが、住居西角の位置には擾乱があり壊されている。床面からの深さは、およそ25cm前後である。なお、全ての柱穴で柱痕を確認した。
- 〈カマド〉 確認できなかった。
- 〈出土遺物〉 住居跡床面から、土師器壺の破片が出土した。第40図1と2は口縁部破片で、どちらも胴部上半部から口縁部にむけて直立気味に立ち上がる器形を呈する。口縁部には弱いヨコナデが認められるものの、胴部には輪積み痕が明瞭に残っている。
- 〈時期〉 本住居跡は、出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考える。また、カマドが作られた痕跡が確認できなかったことから、住居以外の目的で作られた可能性もある。

## S I 14（第41図）

- 〈位置・確認状況〉 L S 43、L T 42・43グリッドに位置する。S I 11を精査した結果、S I 11の竪穴に切られる壁溝とピットの存在が認められたため、住居跡として確認した。
- 〈重複関係〉 S I 11と重複しており、本住居跡の方が古い。
- 〈堆積土〉 壁溝内堆積土を1層確認した。なお、S I 11堆積土脇の床面上にもう1層確認しているが、壁溝内堆積土と同様な土である。このことから、本住居跡内に堆積する土は、S I 11構築段階で埋め戻しのため盛られた土と考える。
- 〈平面形・規模〉 壁は残っていないが、壁溝とピットの配置で確認できる。平面形はほぼ正方形形状である。各壁の長さは、北東壁3.4m、北西壁3.3m、南東壁3.1m、南西壁3.2mである。
- 〈壁〉 南東壁のみ残っている。検出面からの深さ4cmで、ほぼ垂直に立ち上がっていいる。
- 〈床〉 S I 11により削平されてほとんど残っていない。

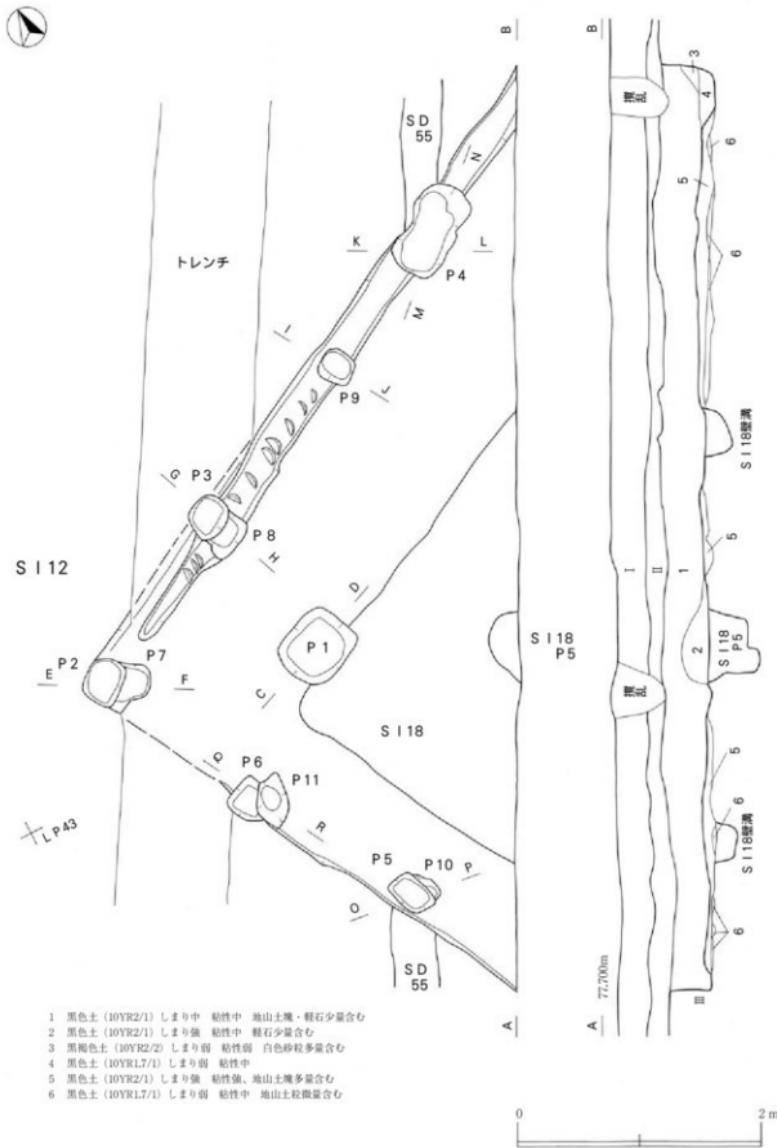


第41図 S I 14 竪穴住居跡平面図・断面図

- 〈壁溝〉 撮乱のため不明な部分もあるが、ほぼ全周していたと考えられる。規模は、幅8~24cm、床面からの深さは10cm前後である。
- 〈柱穴〉 床面及び床面以下で4基確認した。住居四隅に配置されている。床面からの深さを測れるP 2は、深さ18cmである。他の柱穴もこれに準じる規模を持っていたと考えられる。
- 〈カマド〉 確認できなかった。
- 〈出土遺物〉 遺物が出土しなかった。
- 〈時期〉 本住居跡からの出土遺物はないが、直後に営まれたS I 11の時期から平安時代（10C前葉～中葉）に属すると考える。また、カマドが作られた痕跡が確認できなかったことから、住居以外の目的で作られた可能性もある。

## S I 12 (第42・43図)

- 〈位置・確認状況〉 L N43、L O42・43グリッドに位置する。第IV層中位～第V層上面で地山土塊を少量含む黒褐色土の広がりで確認したが、調査区境界の断面観察の結果、III層上面から掘り込まれていることが判明した。



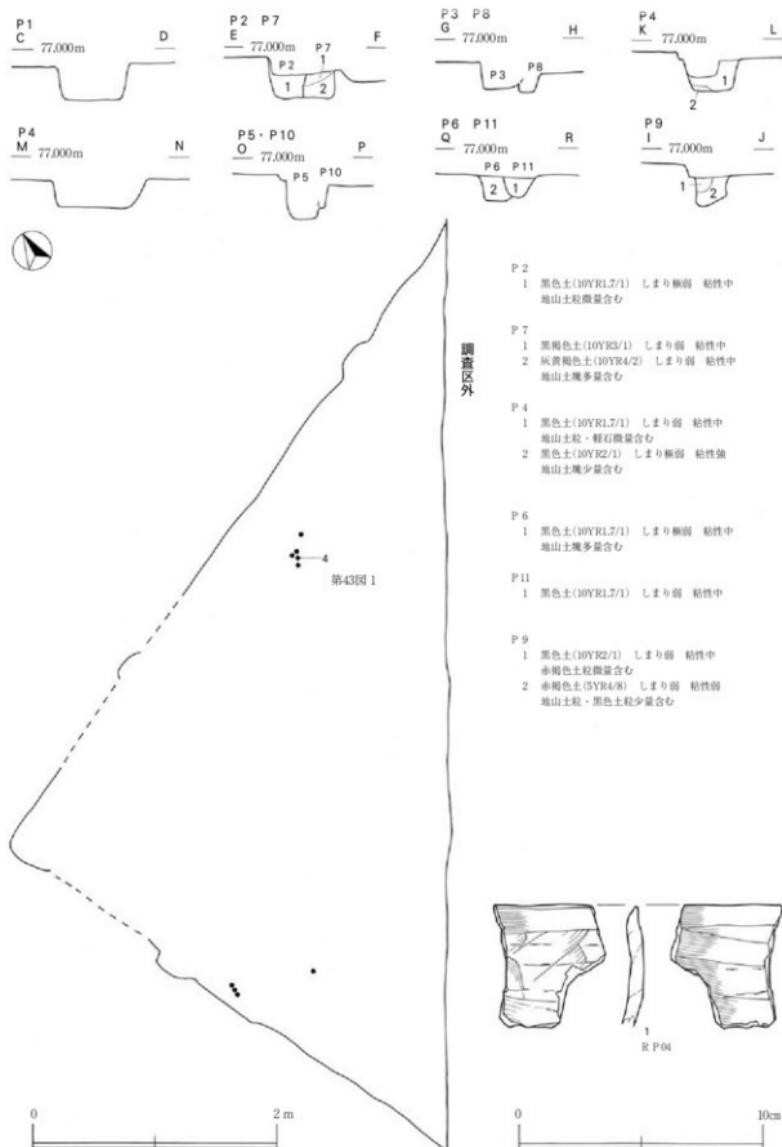
第42図 S I 12竪穴住居跡平面図・断面図

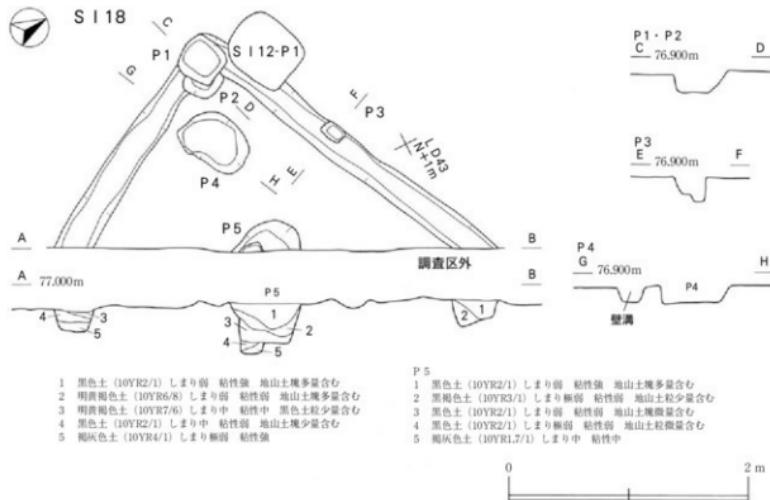
- 〈重複関係〉 S I 15とS D 55と重複する。S I 15より本住居跡の方が新しく、S D 55より本住居跡の方が古い。
- 〈堆積土〉 6層に分けられた。1～3層は黒色、黒褐色基調の土で、地山土塊・白色砂粒・炭化物を少量含む。4層は黒色土で、地山土塊と白色砂粒を微量含む壁溝内堆積土である。締まりが弱いので開口部に堆積したと考えられる。5層は地山土塊を含む黒色土で貼床の土である。6層は、貼床前の整地もしくは、下層のS I 15に堆積した土である。住居の大部分を1層が覆っていることと、1層上面にS D 55が構築されていることから、本住居跡は廃絶後人為的に埋め戻されていると考える。なお、1、2層には少量ながら軽石が含まれることから、埋没したのは十和田a火山灰降下以後である。
- 〈平面形・規模〉 住居跡の大部分が調査区外に延びていることから、平面形は不明である。また各壁の長さも、調査区内で確認できなかったため正確な数値は不明である。
- 〈床〉 確認できる範囲内で、掘形底面のはば全面に、地山土塊と黒色土の混合土を敷き詰めた貼床が認められる。これが下層のS I 18壁溝の一部上面に貼られている。
- 〈壁〉 棚出面がⅢ層中位以下そのため、本来の形状を観察できる調査区境界で見ると、壁溝が南西壁で27cm、北西壁で34cmである。立ち上がりはほぼ垂直である。
- 〈壁溝〉 確認できる範囲内で、北西壁沿いにだけ確認できた。幅12～28cm、床面からの深さは、13cm前後である。
- 〈柱穴〉 床面から11基検出した。P 1は壁から離れた位置にあり、規模が大きいため主柱穴と考える。P 2、7は住居西角にあり、P 3～6、P 8～11はそれぞれ北西壁と南西壁際に等間隔に配置されている。これらは住居の支柱と考えられる。P 2と7、P 3と8、P 5と10、P 6と11は明らかに新旧2時期あり、P 4もその平面形から同様の可能性が考えられるため、支柱は一度建て替えが行われたと考える。支柱だけ作り替えるのは不自然であることから、おそらく主柱も作り替えが行われたと考えられる。
- 〈カマド〉 今回の調査区内では確認できなかった。
- 〈出土遺物〉 住居跡内堆積土中から土師器の壺が出土した。第43図の1は、口縁部破片で、口縁部外面にはヨコナデを施し、それ以下弱くナデしているが輪積痕を消し切れていない。内面も同様である。
- 〈時期〉 本住居跡は、1、2層中に十和田a火山灰起源と考えられる白色砂が認められることから、十和田a火山灰降下以後に埋没したのは確実である。出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考える。

#### S I 18 (第44図)

- 〈位置・確認状況〉 L O42・43グリッドに位置する。S I 12を精査した結果、床面や貼床の下部から壁溝と柱穴の存在が認められたため住居跡として確認した。

第2節 検出構造と遺物





第44図 SI 18竪穴住居跡平面図・断面図

&lt;重複関係&gt;

SI 12と重複しており、本住居跡の方が古い。

&lt;堆積土&gt;

壁溝内堆積土を5層に分けた。1、4層が黒色基調の土、2、3層が明黄褐色基調の土、5層が褐灰色の土で、複数の土が混在している様子がうかがえる。このような状況になったのは、おそらくSI 12を築造する段階で、本住居跡の壁溝に作りつけてあった壁板等の施設が抜かれ、その際に裏ごめとしてもともとあった土が崩れ、その上に整地用の新たな土が盛られた結果と考える。

&lt;平面形・規模&gt;

住居跡の大部分が調査区外に延びていることから、平面形は不明である。また各壁の長さも、調査区内で確認できなかったため正確な数値は不明である。

&lt;壁&gt;

SI 12により削平されているため不明である。

&lt;床&gt;

SI 12により削平されているため、貼床が存在したかは不明である。基本的に、SI 12とは同じ高さを床面としていたと考える。

&lt;壁溝&gt;

確認できる範囲で全周する。幅は25cm前後、検出面からの深さは17cm前後である。

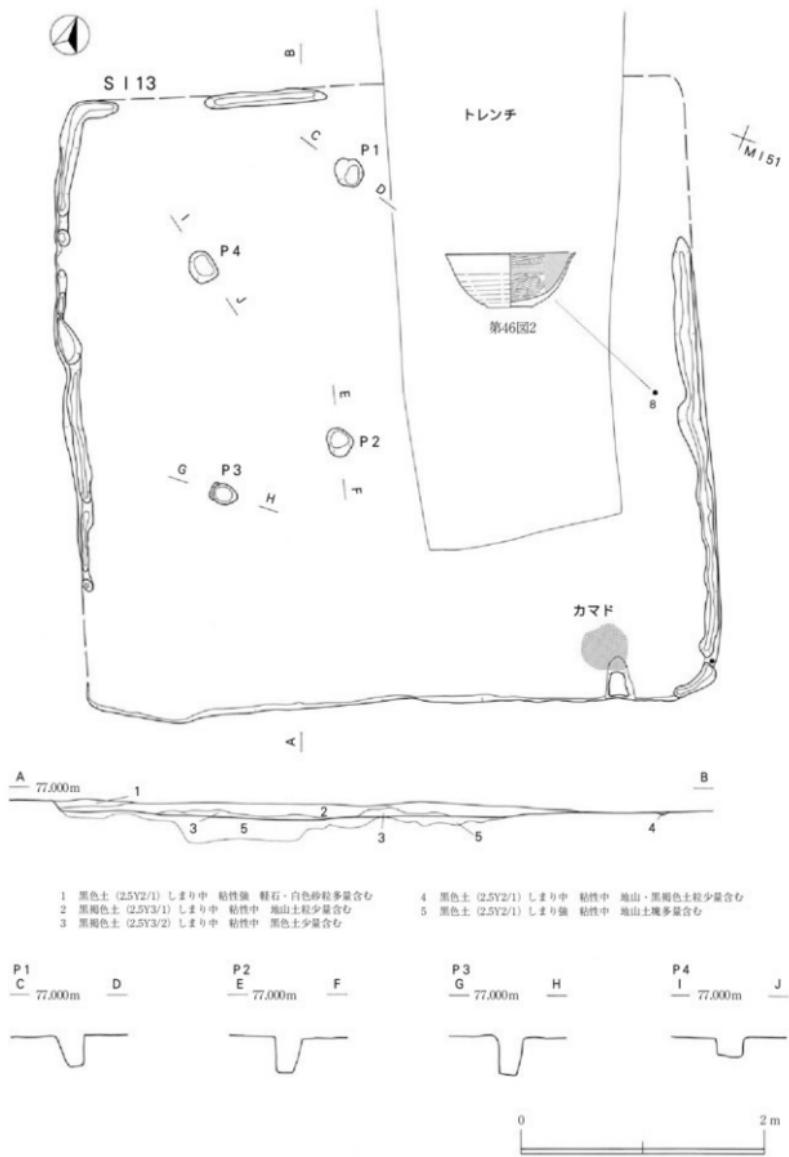
&lt;柱穴&gt;

柱穴と考えられるピットを床面で4基確認した。P 5は主柱穴で、底面に段がつくことから新旧2時期あると考える。検出面からの深さは、浅いところで32cm、深いところで42cmである。P 1、2は住居北西角に2基重なって見つかっているのでこちらも新旧2時期あると考える。検出面からの深さは15cm前後である。またP 1、2とP 5の間にP 4を、壁溝内にP 3を確認したが、位置、規模などから、柱穴ではないと判断した。

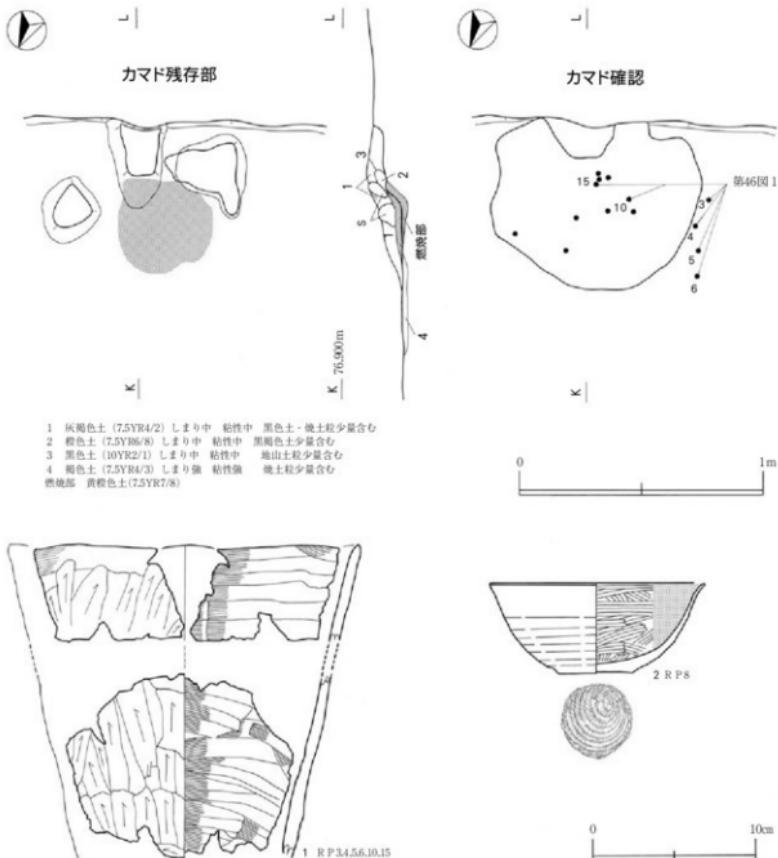
- 〈カマド〉 今回の調査区内では確認できなかった。
- 〈出土遺物〉 遺物が出土しなかった。
- 〈時期〉 本住居跡からの出土遺物はないが、直後に営まれたS I 12の時期から平安時代（10C前葉～中葉）に属すると考える。

## S I 13（第45・46図）

- 〈位置・確認状況〉 M J 49、MK49・50・51、ML50グリッドに位置する。I層が深くまで達しIII層を大きく削平していたため、第IV層中位～V層上面で地山土塊を含む黒褐色土の広がりで確認した。
- 〈重複関係〉 重複する遺構はない。
- 〈堆積土〉 5層に分けられた。1～3層は黒色、黒褐色基調の土である。地山土塊をほとんど含まない点で共通する。4層は壁溝内堆積土で、しまりのある黒色土で埋められている。5層は貼床で、地山土塊を多量含む黒色土である。床面上に堆積する土の性質や状況から、本住居跡は自然に埋没したと考える。なお、1層には少量ながら軽石や白色砂が含まれることから、1層が堆積したのは十和田a火山灰降下以後である。
- 〈平面形・規模〉 南壁と北壁以外大部分失われているが、壁溝の配置から推測して、平面形はほぼ正方形になると思われる。各壁の長さも正確な数値は不明だが、壁溝で範囲をとらえて測ると、東壁約5m、西壁約4.9m、南壁約5.1m、北壁約5mである。
- 〈壁〉 檜出面からの壁の高さは南壁で7cm前後、東壁で5cm前後である。壁の立ち上がりは約60°の傾斜をもつ。
- 〈床〉 堀形底面に、地山土塊と黒色土の混合土を敷き詰めて平坦に整えている。貼床は、床面のほぼ全面に施されているが、深さはかなりばらつきがある。
- 〈壁溝〉 東壁と西壁で壁長の2/3ほどの長さ、北壁では部分的に確認できた。幅7～18cm、床面からの深さは、深いところでも5cm前後と浅い。
- 〈柱穴〉 本住居跡に伴う明確な柱穴は確認できなかった。P 1～4は、全て貼床の下から検出したピットで、床面使用段階では埋没していた穴である。
- 〈カマド〉 南壁の南東角からやや西よりの位置で、焼土粒を含む灰褐色土の広がりで確認した。残存している規模は、長さ60cm、幅82cmで、主軸方位は住居主軸方位とほぼ同じでN-62°～Sである。カマドは袖の一部と燃焼部が残存していた。袖は、灰褐色や地山を含む黒褐色の粘性の強い土で構築されている。カマド本体も同じ土を用いて構築されていたと考えられるが、完全に倒壊しており全体像は不明である。堆積土は5層確認した。1～3層は流入土である。4層は、カマド残存部の構築土で、燃焼部もこの上面を利用している。5層は貼床の土である。なお燃焼部よりも壁際の位置で、台形状に地山を削り残している部分を確認した。燃焼部との位置関係からすると、通常支脚が置かれる場所である



第45図 S I 13堅穴住居跡平面図・断面図・遺物出土位置図



第46図 S I 13堅穴住跡カマド残存部平面図・確認平面図と遺物出土位置図・出土遺物図

ことから、この台状に削り残した部分に支脚の補助機能を持たせていた可能性がある。

#### 〈出土遺物〉

住居跡内、カマド内の堆積土中から土師器の壺と杯が出土した。第46図の1は、底部から口縁部まで直線的に外傾する器形で、作りが他の壺に比べて作りが雑なことなどから壺と考えられる。2は、内面黒色処理を施した土師器杯で、底部は回転糸切り無調整である。

#### 〈時期〉

本住居跡は、1層中に十和田a火山灰起源と考えられる軽石や白色砂が認められることから、1層の堆積は十和田a火山灰降下以後であるが、それ以下の堆積土中には認められないため、十和田a火山灰との関係は不明である。出土

遺物の特徴から、平安時代（10C前葉～中葉）に属すると考える。

S I 16 (第47・48図)

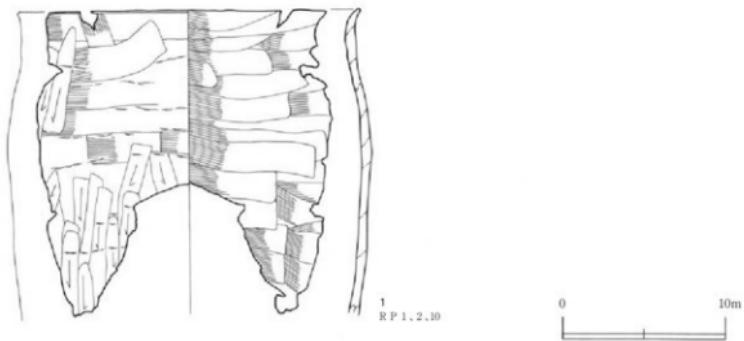
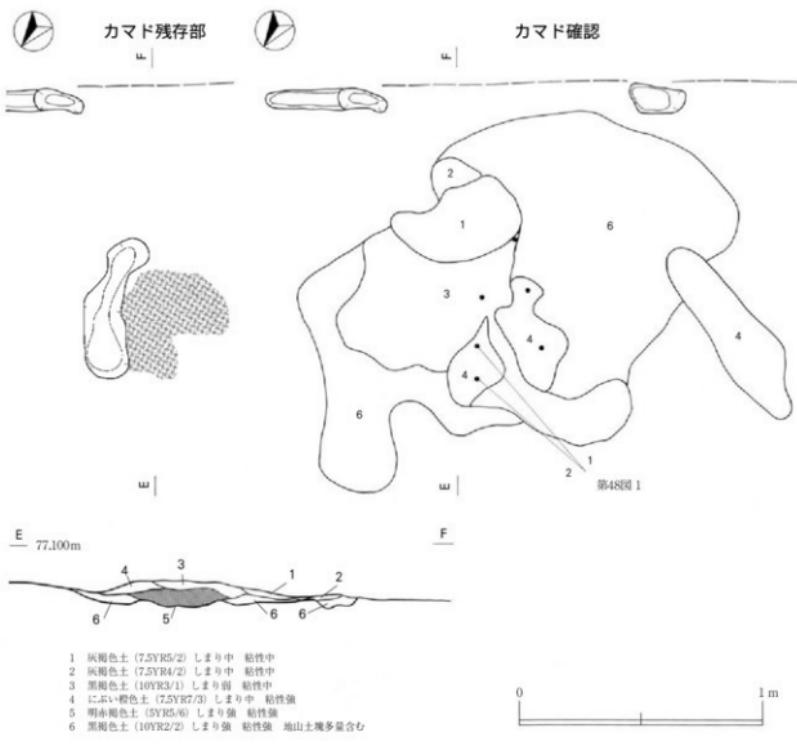
- 〈位置・確認状況〉 L O51、L P50・51、L Q50・51、グリッドに位置する。I層が深くまで達しIII・IV層を大きく削平していたため、V層上面～中位でカマドと、部分的に残る貼床、壁溝の配置で確認した。
- 〈重複関係〉 重複する造構はない。
- 〈堆積土〉 1層確認した。1層は、床面に部分的に認められる貼床の土である。
- 〈平面形・規模〉 大部分が失われており、また一部は調査区外へ延びていることから、正確な平面形と規模は不明である。壁の長さを、推測可能な南西壁で参考までに測ると約5.7mになる。
- 〈壁〉 削平されているため不明である。
- 〈床〉 残存状況からは、部分的に貼床が施されているようにも見受けれるが、住居跡全体が削平を受けている状況なので、断言はできない。
- 〈壁溝〉 南東壁と南西壁の一部で確認できた。幅8～16cm、検出面からの深さは、15cm前後である。
- 〈柱穴〉 確認できなかった。
- 〈カマド〉 南東壁の中央部付近と思われる位置で、灰褐色、黒褐色、にぶい橙色土の広がりで確認した。残存規模は、長さ44cm、幅60cmで主軸方位はN-53°～Sである。カマドは、燃焼部が残存していた。堆積土は6層確認した。1～4層は流入土及びカマド構築土が倒壊したものである。6層は、カマド残存部の構築土で、5層とした燃焼部もこの上面を利用している。また、燃焼部南東部から袖の掘形と思われる窪みを検出した。
- 〈出土遺物〉 カマドの確認面から土師器の甕が出土した。第48図の1は、胴部上半部が弱く膨らみ、口縁部が外反する器形である。口縁部外面にはヨコナデを丁寧に施すが、胴部上半部外面のナデはあまく、輪積痕が確認できる。
- 〈時期〉 本住居跡は、出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考える。

S I 17 (第49・50図)

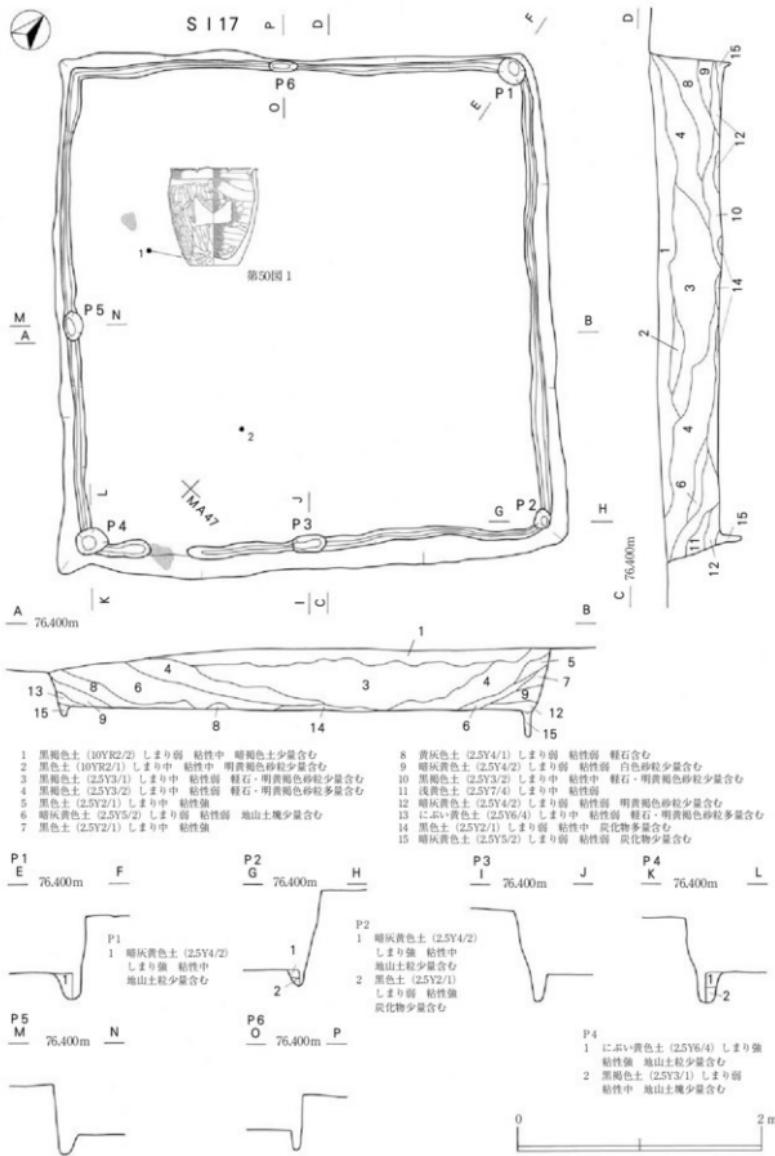
- 〈位置・確認状況〉 LT46・47・48、MA46・47・48グリッドに位置する。第V層及び埋没沢2上面で、黒褐色土の広がりで確認した。
- 〈重複関係〉 重複する造構はない。
- 〈堆積土〉 15層に分けられた。1～13層は流入土で、1～5層は黒色、黒褐色基調の土で、6～13層は黒色基調の土と黄色みがかった土が交互に堆積している。堆積状況から、自然に埋没したと考えられる。壁際に見られる11、13層は壁の崩落層と考えられる。14層は住居中央部に比較的平坦に堆積しており、炭化物を多量に含むことから、流入土によりパックされた有機物の腐敗層と考えられる。



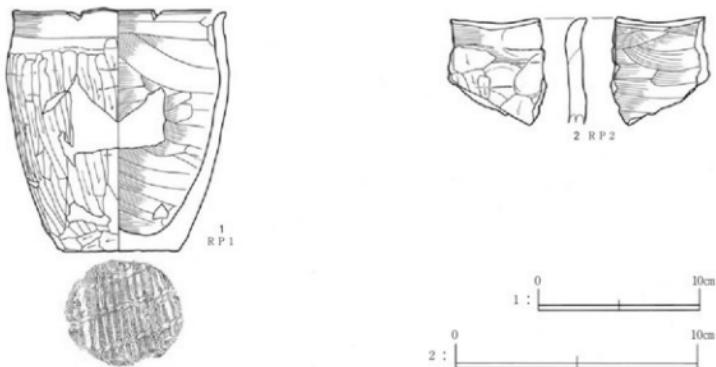
第47図 S I 16竪穴住居跡平面図・断面図



第48図 S ! 16竪穴住居跡カマド残存部平面図・確認平面図と遺物出土位置図・出土遺物図



第49図 S I 17竪穴住居跡平面図・断面図・遺物出土位置図



第50図 S I 17竪穴住居跡出土遺物図

15層は壁溝内堆積土で、しまりの弱い黄色みがかった土が堆積していた。なお、堆積土中に軽石が含まれるため、埋没したのは十和田a火山灰降下以後である。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ正方形である。各壁の長さは、北東壁4m、北西壁3.8m、南東壁4.1m、南西壁4.2mである。

〈壁〉 各壁の検出面からの高さは、南東壁52cm、南西壁27cm、北東壁51cm、北西壁60cmである。立ち上がりは、いずれの壁も本来はほぼ垂直であったと考えるが、上場付近が崩落して70~80°ほどの傾斜している。

〈床〉 挖形底面を平坦に整えて床として利用している。南西壁中央部よりやや北西側壁際の所に、15cmほどの範囲から焼土を検出したが、ブロック状であり火を焚いたような痕跡ではない。なお本住居跡が、他の住居跡に比べて検出面から床面までの高低差があるのは、埋没沢の上部に立地しているためである。埋没沢は、深くまで軟質な黒色土が堆積しており、それを抜かなければ安定した床面を構築できないため、これほどの深さになったと推測できる。

〈壁溝〉 南東壁の一部を除いて全周する。規模は、幅が5~15cm、床面からの深さが、5~20cmである。壁溝内堆積土の色調の観察で、壁板等の材がはめ込まれた痕跡は確認できなかった。しかし、柱が抜き取られていることから、これらの材も廃棄時に抜き取られている可能性が高い。そのことが、放置後早い段階で壁面の崩落を招いたと考える。

〈柱穴〉 壁溝内から柱穴と考えられるピットを6基検出した。西角と北東壁を除いて住居の角と各壁中央部に、各1基ずつ配置されているP 1~8は、床面からの深さが、浅いもので13cm、深いもので25cmである。堆積土を観察した結果柱は全て抜き取られており、廃絶時に上屋が解体されたと考えられる。

〈カマド〉 南東壁の南角付近の床面に、20cm前後の範囲の焼土を確認したので、当初カ

マドの燃焼部として捉えていたが、カマド部材のような粘土、または粘性の強い土の散布が全く見られないこと、壁の高さに見合う煙道の掘り込みが無いことから、最終的にカマドではないと判断した。

〈出土遺物〉

住居跡床面から、土師器壺が出土した。第50図の1は胴部上半部に最大径を有し、口縁部が弱く外反する小型の壺である。口縁部外面はしっかりとしたヨコナデで仕上げ、胴部には上から下方向へのケズリ、底部では横方向のケズリ調整が見られる。底部外面には薦編み圧痕が認められる。2は口縁部破片で、口縁部にはヨコナデ、胴部外面にはケズリが認められる。

〈時期〉

本住居跡は、堆積土中に十和田a火山灰起源と考えられる軽石が認められることから、十和田a火山灰降下以後に埋没したのは確実である。出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考える。また、カマドが作られた痕跡が確認できなかったことから、住居以外の目的で作られた可能性もある。

（2）土坑

S K 31（第51図）

〈位置・確認状況〉 L P49、L Q49グリッドに位置する。Ⅲ層上面で、軽石と白色の砂を含む黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉

重複する遺構はない。

〈堆積土〉

3層に分けられた。全ての層が黒褐色土基調の土であるが、混ざりものに差がある。1、2層は軽石の量で分けた。3層は住居跡に見られる貼床のような性質の土である。そのことから3層は、土坑底面を平坦に整えるための整地層と考える。1、2層はほぼ同質の土であることから、この土坑はほぼ一気に埋め戻されている可能性が高い。

〈平面形・規模〉

平面形は、北西から南東方向に主軸方向をもつ隅丸長方形である。規模は長軸1.7m、短軸1.2m前後である。

〈壁・底面〉

壁は北西壁、南東壁が垂直に立ち上がり、北東壁、南西壁はわずかにオーバーハングして立ち上がる。全周崩落は認められない。底面は、中央よりもやや北西よりの位置に不定形の窪みがあるが、3層の土がこの上に貼られているので、使用段階では平坦に整えられていたと考えられる。

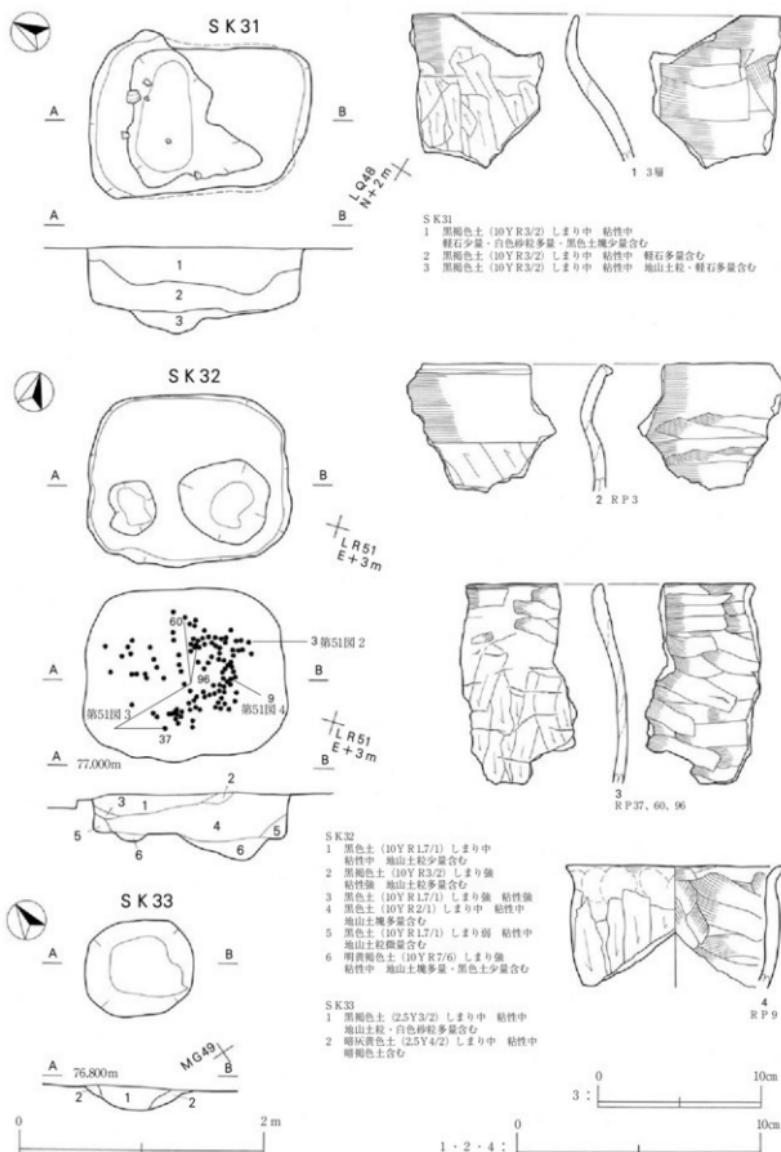
〈出土遺物〉

3層上面から土師器破片が数点出土した。第51図の1は、胴部所半部から強く内湾して口縁部で弱く外反する壺に近い形である。口縁部外面にヨコナデを施した後、一部ヨコナデを切るような状態でケズリが認められる。

〈性格・時期〉

本遺構は、底面の凹凸部に土を貼って底面を平坦に仕上げた後、壁面が崩落しない程度の時間差で埋め戻している点が最大の特徴である。このような特徴から想定できる性格として、墓としての利用が考えられる。

時期は、出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考える。



第51図 SK 31・32・33土坑平面図・断面図・出土遺物図

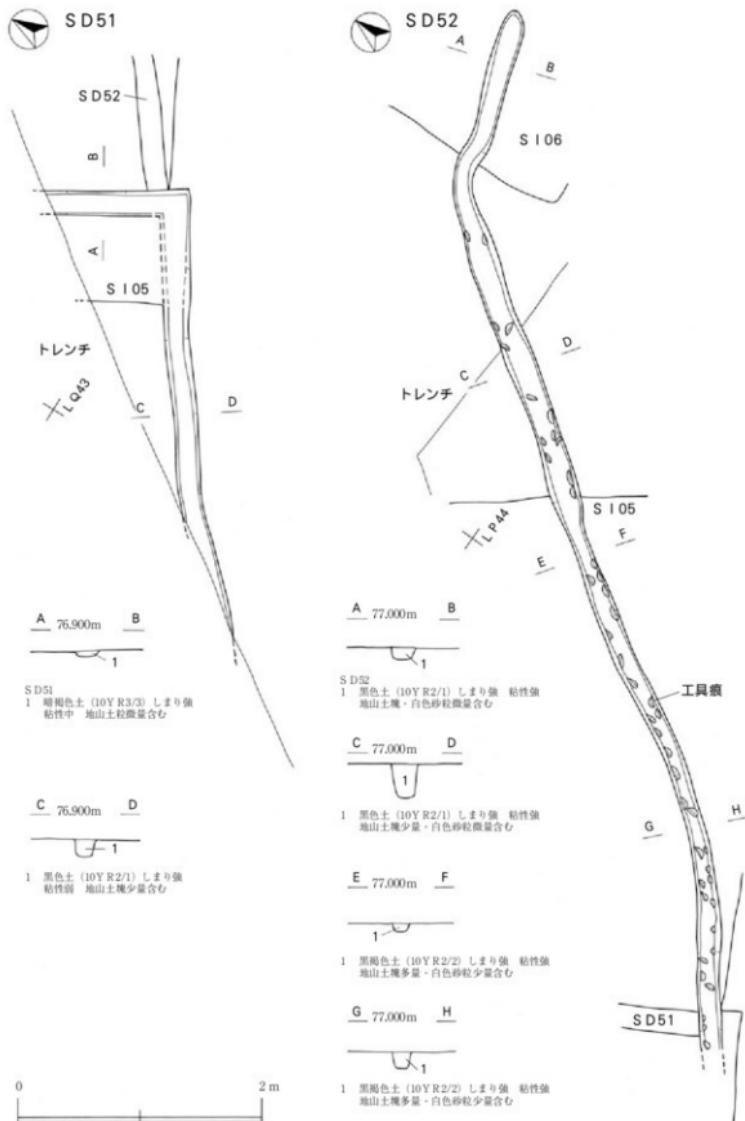
## S K 32 (第51図)

- 〈位置・確認状況〉 L Q50・51グリッドに位置する、IV層中位～V層上面で、地山土粒を少量含む黒色土の広がりで確認した。
- 〈重複関係〉 重複する遺構はない。
- 〈堆積土〉 6層に分けられた。1～5層は黒褐色土基調の土であるが、1～3層からは遺物が多量に出土するのに対して、4、5層からの出土遺物は少ないという点で大きく違う。6層は住居跡に見られる貼床のような性質の土である。S K31同様、この6層は土坑底面を平坦に整えるための整地層と考える。4層の土が、地山土塊を多量に含む明らかな人為堆積土であるので、この土坑は途中まで埋め戻して、上部の窪みには別の土と土器が投棄されたと考えられる。
- 〈平面形・規模〉 平面形は、東西方向に主軸方向をもつ隅丸長方形である。規模は長軸1.6m、短軸1.4m前後である。
- 〈壁・底面〉 壁は全周垂直に立ち上がり、崩落は認められない。底面は、南半部に2カ所不定形の窪みがあるが、6層の土がこの上に貼られているので、使用段階では平坦に整えられていたと考えられる。
- 〈出土遺物〉 1～3層中から土師器破片が多数出土した。第51図の2は、口縁部が長く外傾して口端部が外に張り出す。口縁部外面にヨコナデを施し、胴部上半部はケズリが認められる。3は口縁部が内湾する器形で、外面調整が口縁部のヨコナデ、胴部のケズリどちらも雑で、輪積痕が見えるままの仕上がり具合になっている。4は、口縁部が短く外反する小型の土器で、口縁部外面をユビオサエだけで仕上げる、やや作りの粗い土器である。
- 〈性格・時期〉 本遺構は、S K31同様底面の凹凸部に土を貼って底面を平坦に仕上げた後、壁面が崩落しない程度の時間差で埋め戻している点が最大の特徴である。ただ、S K31と違う点は、一度に埋め戻してしまうではなく、上部に窪みを残してそこへ土器片を投棄していることである。このような特徴から想定できる性格として、墓としての利用が考えられる。さらに1～3層中に多量に投棄されている土器は、埋葬時に何らかの儀式を行った可能性を示唆する。
- 時期は、出土遺物の特徴から平安時代（10C中葉）に属すると考える。

## (3) 溝跡

## S D 51 (第52図)

- 〈位置・確認状況〉 L P42・43、L Q42グリッドに位置する。III層中位～V層上面、S I 05床面で黒色土や暗褐色土の広がりで確認した。
- 〈重複関係〉 S I 05、S D 52と重複する。両遺構よりも本遺構が新しいと判断したが、S I 05との関係は、本遺構がS I 05の竪穴の一角を壊しているような状況であることで判断したため、同時併存となる可能性も否定できない。
- 〈堆積土〉 溝内部の堆積土は場所によって若干色調が違うが、基本的に単層で、地山土



第52図 SD51・52溝跡平面図・断面図

粒を微量に含み、しまりが強い傾向がある。このことから、最終的には埋め戻されたと考える。

〈平面形・規模〉

平面形はL字形である。確認できる範囲内で、全長は約4.5m、幅は0.3m前後である。

〈壁・底面〉

壁は、検出面からの深さが15cm前後で、おおむね垂直に立ち上がる。底面は、平坦に作られている。

〈出土遺物〉

遺物は出土しなかった。

〈性格・時期〉

遺構内の出土遺物が無いため正確な時期は不明である。もし、S I 05に伴うものであれば、同時期のものであるし、おそらく排水溝として利用されていたと考える。さらに、S D 52も同様な機能が想定されることから、本遺構がS D 52の排水用の選定場所を踏襲している可能性も考えられる。

S D 52（第52図）

〈位置・確認状況〉 L O43・44、L P42・43グリッドに位置する。Ⅲ層中位～V層上面、S I 06床面及びS I 05の貼床下、で黒色土や黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉

S I 05、S I 06、S D 52と重複する。S I 05とS D 52よりも本遺構が古い。S I 06との関係は、切り合い関係を土層で確認できなかったため、確実な前後関係は不明であるが、同時併存となる可能性が高いと考える。

〈堆積土〉

溝内部の堆積土は場所によって若干色調が違うが、基本的に単層で、地山土粒を含む割合が多く、しまりが強い傾向にあることから、最終的に埋め戻されたと考える。

〈平面形・規模〉

平面形はS I 06の壁の部分でカーブして「へ字形」になっている。確認できる範囲内で、全長は約12.6m、幅は0.3m前後である。

〈壁・底面〉

壁は、残りの良い場所で検出面からの深さが30cm前後で、おおむね垂直に立ち上がる。底面は、基本的に平坦に作られているが、多くの場所に鋸先状の工具痕が認められる。

〈出土遺物〉

遺物は出土しなかった。

〈性格・時期〉

遺構内の出土遺物が無いため正確な時期は不明である。もし、S I 06 Aに伴うものであれば、同時期のものであるし、おそらく排水溝として利用されていたと考える。

S D 55（第53図）

〈位置・確認状況〉 L N43・44、L O42・43グリッドに位置する。IV層中位～V層上面、S I 12検出面で黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉

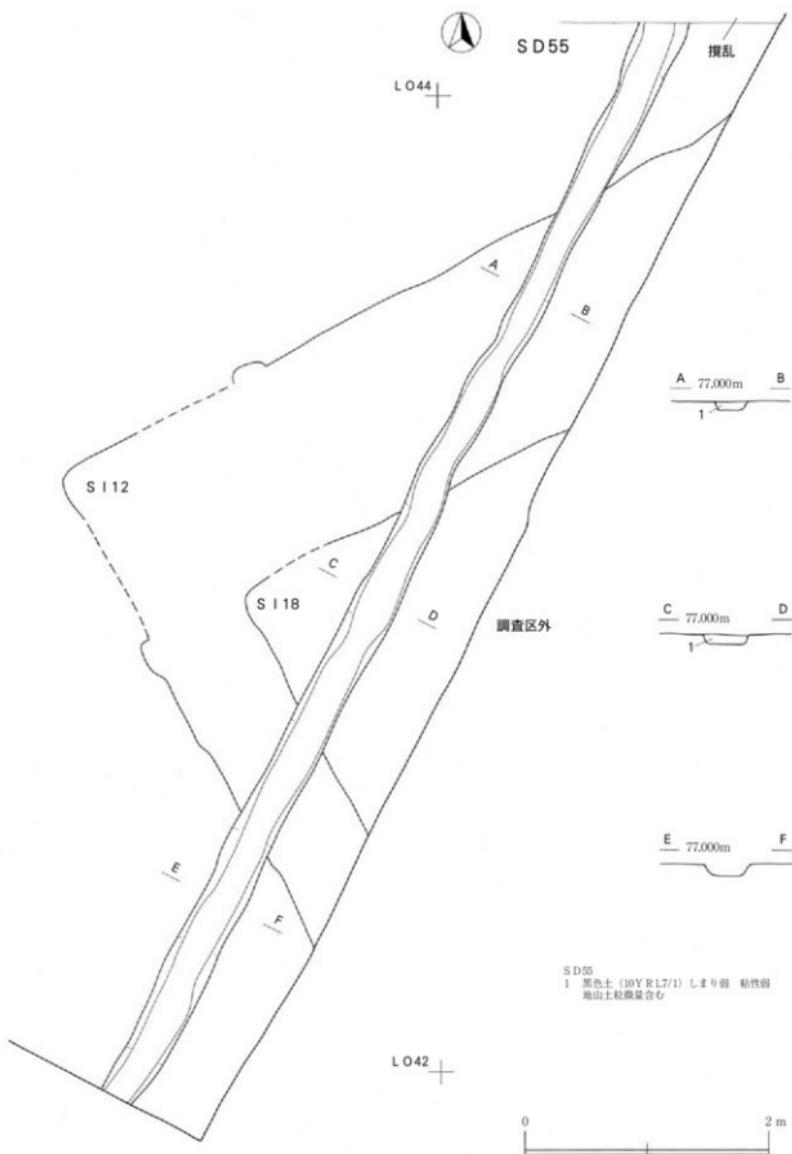
S I 12と重複する。S I 12よりも本遺構が新しい。

〈堆積土〉

基本的に単層で、地山土粒をわずかに含む土が堆積している。

〈平面形・規模〉

平面形は直線である。確認できる範囲内で、全長は約9.9m、幅は0.3m前後



第53図 SD 55溝跡平面図・断面図

である。

- 〈壁・底面〉 壁は、検出面からの深さが7cm前後で、70°の傾斜で立ち上がる。底面は、平坦に造られている。
- 〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。
- 〈性格・時期〉 遺構内の出土遺物が無いため正確な時期は不明である。本遺構の大部分は第2次調査区に位置していることから、以後の調査により詳しく述べると思われる。

### 3 時期不明の遺構

#### (1) 土坑

##### S K 33 第51図)

- 〈位置・確認状況〉 MG49グリッドに位置する。V層上面で黒褐色土の広がりで確認した。
- 〈重複関係〉 重複する遺構はない。
- 〈堆積土〉 2層に分けられた。1層は地山土粒を含む黒褐色土、2層は暗灰黄色土である。全体的に黄色みがかった色調が強い。
- 〈平面形・規模〉 平面形は、東西方向に主軸方向をもつ梢円形である。規模は長径88cm、短径77cmである。
- 〈壁・底面〉 壁は全周緩やかな傾斜で立ち上がる。底面は、やや鍋底状に湾曲しているが、おおむね平坦である。
- 〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。
- 〈性格・時期〉 出土遺物が無いため、時期、性格共に不明であるが、明らかに平安時代の遺構よりは、縄文時代の遺構内堆積土の色調に近い堆積土である。

### 第3節 遺構外出土遺物

北西調査区、南東調査区ともに遺構外からの出土遺物は極めて少ない。北西調査区からは主に縄文時代の遺物が、南東調査区からは平安時代と近世の遺物が出土している。

#### 1 縄文時代の遺物

早期、前期、中期の土器と、それらに伴うと考えられる石器が少量出土している。

第54図の1は胴部破片資料で、外面には複節の斜縄文が、内面には縦方向の貝殻による条痕が認められる。早期末の資料と考える。

2~8前期前葉の土器で、全て胎土に纖維を含む。2と4は同一個体で、全面斜行する撲糸文が施され、口縁部のみ方向を変えて重ねて転がすことにより、口縁部文様帶が表現されている。

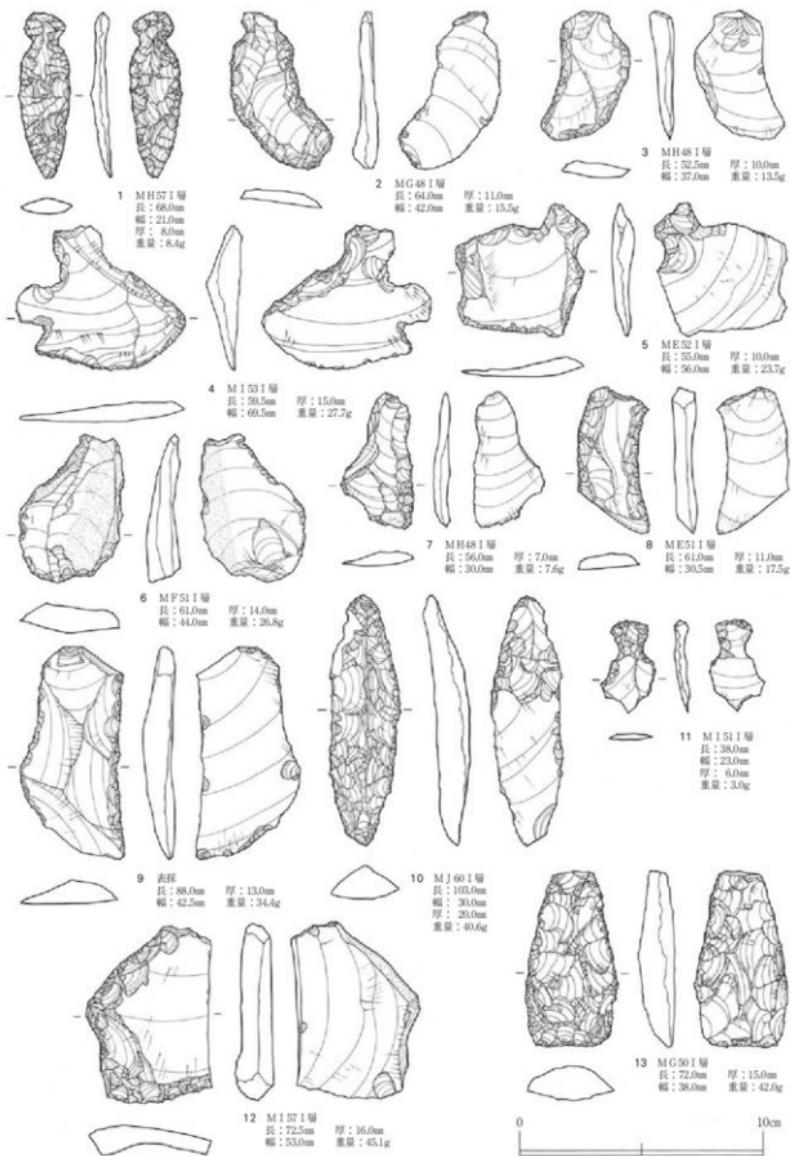
3・5・6は口縁部破片で、3は不正な撲糸文、5は単線斜縄文、6は側面環付・閉端環付に類似する原体の回転施文で地文が施されている。7・8は胴部破片で、7は非結束羽状縄文、8は結束第1種の羽状縄文が施されている。



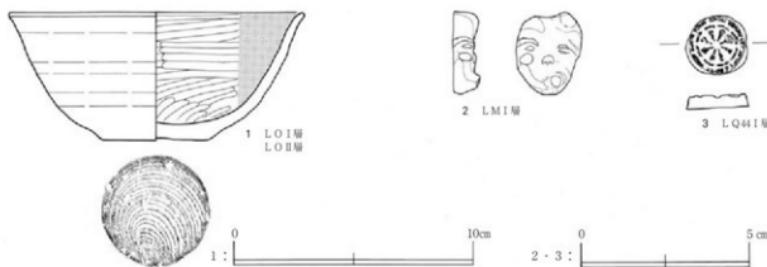
第54図 遺構外出土土器

9は、ほぼ直立して立ち上がる器形で、口縁部は折り返し口縁である。口縁部に文様の起点となる円形の貼付文を施し、そこから横方向へ波状の隆線を、胴部へは胴部文様帶の縦区画の性格をもつ垂下する隆線を施している。垂下する隆線からは、左右へ4段の隆線を施し、最下端に胴部上半部文様帶の下端区画になる隆線を全周させ、垂下する隆線の下端部には上開きの弧状隆線が付け加えられている。

第55図には、石器を図示した。1、2は縦型の石匙で4、5は横型石匙である。1は両面から調整が施されている。3、6は石匙の未製品と考えられる。7～9は削器で、8と9はやや縦長の削片の



第55図 遺構外出土石器



第56図 遺構外出土土器・土製品

両側縁に片面調整を施している。10は尖頭器で上部は両面から調整を施している。13は両面調整の石範である。12は刃の角度が鈍角であることから、搔器と考えられる。11は2次加工のある剥片で、何らかの石器製作中に破損してしまったものと考えられる。

## 2 弥生時代の遺物

弥生時代後期と考えられる土器が1個体出土している。

第54図10は頸部がすぼまる壺型の土器で、胴部上半部より上が残っている。頸部の上端と下端に結節回転文を施して区画し、頸部を無文、それ以外には縄文が施されている。

## 3 古代以降の遺物

第56図1は、内黒の土師器坏で内面にはミガキが施される。2と3は泥メンコで、2はひょっこ、3は丸瓦を模した作りまたは文様である。

## 第1節 狼穴IV遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

はじめに

狼穴IV遺跡より検出された炭化材の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

### 1 試料と方法

試料は、S I 02から出土した炭化材1点、S I 05から出土した炭化材1点、S I 06から出土した炭化材1点、S I 07から出土した炭化材1点、S I 09から出土した炭化材1点の併せて5点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した<sup>14</sup>C濃度を用いて<sup>14</sup>C年代を算出した。

### 2 結果

表2に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を示す。

<sup>14</sup>C年代値（yrBP）の算出は、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（±1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（Onesigma）に相当する年代である。これは、試料の<sup>14</sup>C年代が、その<sup>14</sup>C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

#### 曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、<sup>14</sup>C年代を曆年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて<sup>14</sup>C年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を算出する。

<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、曆年代較正值は<sup>14</sup>C年代値に対応する較正曲線上の曆年代値であり、1 σ曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1 σ曆年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1 σ曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示

した。

#### 4 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および曆年代較正を行なった。曆年代較正した  $1\sigma$  曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

#### 引用文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の<sup>14</sup>C年代. p.3-20.
- Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993) Extended <sup>14</sup>C Database and Revised CALIB3.0 <sup>14</sup>C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

表2. 放射性炭素年代測定および曆年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	<sup>14</sup> C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C 年代を曆年代に較正した年代	
				曆年代較正値	$1\sigma$ 曆年代範囲
PLD-1877 (AMS)	炭化材 No.1 S1 02 RC 32	-16.9	1130 $\pm$ 70	cal AD 895 cal AD 925 cal AD 940	cal AD 860 - 985 (87.1%)
PLD-1878 (AMS)	炭化材 No.2 S1 05 RC 16	-25.6	1200 $\pm$ 60	cal AD 780 cal AD 790 cal AD 825 cal AD 840 cal AD 860	cal AD 770 - 895 (87.5%)
PLD-1879 (AMS)	炭化材 No.3 S1 06 RC 20	-25.0	1130 $\pm$ 60	cal AD 900 cal AD 920 cal AD 945 cal AD 955	cal AD 870 - 995 (93.4%)
PLD-1880 (AMS)	炭化材 No.4 S1 07 RC 07	-23.6	1290 $\pm$ 60	cal AD 690 cal AD 705 cal AD 710 cal AD 755 cal AD 760	cal AD 665 - 775 (100%)
PLD-1881 (AMS)	炭化材 No.5 S1 09 RC 45	-25.0	1190 $\pm$ 60	cal AD 785 cal AD 790 cal AD 830 cal AD 835 cal AD 875	cal AD 775 - 895 (86.7%) cal AD 920 - 940 (10.5%)

## 第2節 狼穴IV遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

はじめに

ここでは、S I 02、S I 05、S I 06、S I 09から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。いずれも平安時代中頃（10世紀）の住居跡である。

### 1 試料と方法

炭化材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で材組織を拡大して観察を行ない同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5 mm角以下の大きさに整え、直径1 cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子株製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

炭化材の標本は、秋田県埋蔵文化財センターに保管されている。

### 2 結果

同定結果の一覧を、表3に示し、表4に住居別の検出樹種を比較した。

#### 樹種記載

マツ属 *Pinus* マツ科 国版1 1a-1c (試料番号29) 2a-2b (試料番号30)

垂直・水平の树脂道がある針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射仮道管があるがその内壁の肥厚は保存が悪く不明である。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 国版1 3 (試料番号81) 4a-4c (試料番号59) 5a-5b (試料番号41) 6a-6b (試料番号35) 7a-7b (試料番号76)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量が多くその仮道管壁が厚い試料や、晩材の量が少なくヒノキの横断面に似る試料や、両者の中間的な試料など様々なタイプが観察された。年輪始めの早材部の分野壁孔は大きなスギ型、1分野に主に2個ある。

ヒノキ？ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ? 国版2 8a-8c (試料番号34)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔は壁孔縁が厚く孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型、1分野に主に2個ある。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 国版3 9a-9c (試料番号13)

小型の管孔が単独または2~4個が複合し晩材部に向いゆるやかに径を減じる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一である。放射組織は単列異性、道管との壁孔は大きく交互状に密在する。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 国版3 10a-10c (試料番号28)

大型の管孔が年輪始めに分布し、晩材部は小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。放射組織は単列だけである。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 国版3 11a-11c (試料番号55)

年輪の始めに中型の管孔が1~2層配列し、その後小型の管孔が集合して接線状・斜状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、

1～5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

サクラ属 *Prunus* バラ科 図版4 14a-14c (試料番号46)

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後放射方向・接線方向・斜状に複合して全体的にうねるように分布している散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は單一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～3細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

ミズキ属 *Cornus* ミズキ科 図版4 13a-13c (試料番号22)

小型の管孔が主に単独で均一に分布する環孔材。道管に壁孔は交互状、穿孔は階段数が多数の階段穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅である。

カエデ属 *Acer* カエデ科 図版4 14a-14c (試料番号46)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在し年輪界は不明瞭で、帯状の木繊維が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ属 図版5 15a-15c (試料番号17)

非常に小型で多角形の管孔が密に散在する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒の数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、2細胞幅が多く、道管との壁孔は交互状・階段状である。

ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版4 16(試料番号66)

直徑約8mmの草本性の稈で、節部はくびれた後ややふくれる。稈は中空ではなくスポンジ状の基本組織で埋まりその中に維管束が散在している。稈の外周には厚い厚壁細胞層にかこまれた維管束が1または2層並んでおり特に稈の中心部側でその層は厚くなる。それより内側に散在する維管束の周囲の厚壁細胞層は薄い。

### 3まとめ

住居跡により、検出される樹種構成に違いが見られた。S I 02ではスギと広葉樹材（ヤナギ属・ヒサカキ・ミズキ属）が多く、特にヒサカキが多く検出された。S I 09は、スギが圧倒的に多く、マツ属・ヒノキ？の針葉樹、ケヤキ・サクラ属・カエデ属の落葉広葉樹も出土した。ヒノキは当地域には分布していないので持ち込まれた可能性がある。S I 05とS I 06からはクリが検出された。

表3-1 狼穴IV遺跡の住居跡出土炭化材樹種同定結果 1

試料番号	遺構	樹種	時期
13	S 102	RC06	ヤナギ属
14	S 102	RC14	ヤナギ属
15	S 102	RC17	スギ
16	S 102	RC32	スギ
17	S 102	RC33	ヒサカキ
18	S 102	RC37	ヒサカキ
19	S 102	RC46	ヒサカキ
20	S 102	RC53	ヒサカキ
21	S 102	RC54	ヒサカキ
22	S 102	RC64	ミズキ属
23	S 102	RC71	スギ
24	S 102	RC72	スギ
25	S 102	RC77	ヒサカキ
26	S 102	RC78	ヒサカキ
27	S 105	RC16	クリ
28	S 106	RC20	クリ
29	S 109	RC01	マツ属
30	S 109	RC02	マツ属
31	S 109	RC03	スギ
32	S 109	RC04	スギ
33	S 109	RC05	スギ
34	S 109	RC06	ヒノキ?
35	S 109	RC07	スギ
36	S 109	RC08	スギ
37	S 109	RC09	スギ
38	S 109	RC10	スギ
39	S 109	RC11	スギ
40	S 109	RC13	スギ
41	S 109	RC15	スギ
42	S 109	RC17	サクラ属
43	S 109	RC18	サクラ属
44	S 109	RC19	スギ
45	S 109	RC20	カエデ属
46	S 109	RC21	カエデ属
47	S 109	RC22	スギ
48	S 109	RC23	スギ
49	S 109	RC24	サクラ属
50	S 109	RC25	スギ
51	S 109	RC26	スギ
52	S 109	RC27	カエデ属
53	S 109	RC28	スギ
54	S 109	RC29	サクラ属
55	S 109	RC30	ケヤキ
56	S 109	RC32	スギ
57	S 109	RC33	スギ
58	S 109	RC35	サクラ属
59	S 109	RC36	スギ
60	S 109	RC37	スギ
61	S 109	RC38	スギ
62	S 109	RC39	スギ

表3-2 猿穴IV遺跡の住居跡出土炭化材樹種同定結果 2

試料番号	遺構	樹種	時期
63	S I 09	RC 40	スギ
64	S I 09	RC 44	スギ
65	S I 09	RC 45	スギ
66	S I 09	RC 46	ススキ属
67	S I 09	RC 47	スギ
68	S I 09	RC 48	スギ
69	S I 09	RC 49	スギ
70	S I 09	RC 50	スギ
71	S I 09	RC 51	スギ
72	S I 09	RC 52	スギ
73	S I 09	RC 53	スギ
74	S I 09	RC 54	スギ
75	S I 09	RC 55	スギ
76	S I 09	RC 56	スギ
77	S I 09	RC 57	スギ
78	S I 09	RC 58	スギ
79	S I 09	RC 59	スギ
80	S I 09	RC 60	スギ
81	S I 09	RC 61	スギ
82	S I 09	RC 62	スギ
83	S I 09	RC 63	スギ
84	S I 09	RC 64	スギ
85	S I 09	RC 65	スギ
86	S I 09	RC 66	スギ
87	S I 09	RC 68	スギ
88	S I 09	RC 69	スギ
89	S I 09	RC 70	スギ
90	S I 09	RC 72	スギ
91	S I 09	RC 74	スギ
92	S I 09	RC 75	スギ

表4 猿穴IV遺跡の住居跡別の検出樹種（平安時代中頃）

検出樹種	S I 02	S I 05	S I 06	S I 09	合計
マツ属				2	2
スギ	4			51	55
ヒノキ?				1	1
ヤナギ属	2				2
クリ		1	1		2
ケヤキ				1	1
サクラ属				5	5
カエデ属				3	3
ヒサカキ	7				7
ミズキ属	1				1
ススキ属				1	1
合計	14	1	1	64	80

### 第3節 狼穴Ⅳ遺跡のテフラ分析

今村美智子（パレオ・ラボ）

#### 1 試料と分析方法

秋田県北部に位置する大館市糸迦内の狼穴Ⅳ遺跡の沢（埋没沢2）の2・4層から採取された試料（No11, No12）を用いて以下の分析を行なった。なお、軽石の多く含まれる試料である為、1  $\phi$  残渣の軽石を適量採取し粉末状にしたものについて鉱物組成と屈折率測定の分析を行なった。

##### （1）鉱物組成分析

- ①秤量した試料を40度に設定した恒温乾燥機で良く乾燥した後、乾燥重量を秤量し含水率を求めた。
- ②1  $\phi$  (0.5mm)、2  $\phi$  (0.25mm)、3  $\phi$  (0.125mm)、4  $\phi$  (0.063mm)のふるいを重ね湿式ふるいを行なった。各ふるいの残渣について乾燥後秤量し粒度組成とした。また4  $\phi$  以上の残渣の乾燥重量から含砂率を求めた。
- ③重液（テトラブロモエタン：比重2.90～2.96）を用いて重液分離を行ない、軽鉱物と重鉱物の乾燥重量を秤量した。分離した各試料の乾燥重量を秤量し重・軽鉱物比とした。
- ④重液分離をした軽鉱物と重鉱物について封入剤（レークサイトセメント）を用いてプレパラートを作成した。
- ⑤軽鉱物は石英（Qt）、長石（Pl）、火山ガラス（G）に分類し、重鉱物はかんらん石（Ol）、イデュングサイト（In）、单斜輝石（Cpx）、斜方輝石（Opx）、角閃石（Hor）、磁鉄鉱（Mag）に分類し、風化粒子などの不明鉱物以外の鉱物が200以上になるまで分類・計数を行なった。なお火山ガラスの形態は、町田・新井（1992）の分類基準に基づき、バブル型平板状（b 1）、バブル型Y字状（b 2）、軽石型繊維状（p 1）、軽石型スponジ状（p 2）、急冷破碎型（c0：塊状・フレーク状）の5形態に分類した。

##### （2）屈折率測定

ガラスの屈折率については横山ほか（1986）の方法に従って、温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）を用いて屈折率（n）を測定し、その結果を範囲（range）であらわした。

#### 2 結果

##### （1）テフラの鉱物組成分析（表5、図57）

鉱物組成分析はNo11の試料を用いて行なった。

砂粒分の粒度組成は1  $\phi$  残渣が非常に多く、78.8%となる。2  $\phi$ 、3  $\phi$  4  $\phi$  の残渣は、それぞれ17.0%、2.5%、1.8%である。

重・軽鉱物比は、軽鉱物の割合が97.5%を占める。

軽鉱物の鉱物組成は火山ガラスの割合が87%となる。重鉱物は斜方輝石、磁鉄鉱を主体とする組成である。斜方輝石は44.29%、磁鉄鉱は50.95%と高い値を示す。单斜輝石は4.76%の値を示し、角閃石は確認されなかった。

##### （2）屈折率測定（表6、図58）

屈折率測定はNo12の試料を用いて行なった。

屈折率の範囲は1.4983-1.502、平均値1.5002を示す。

### 3 堆積物中のテフラ

#### 【十和田a：To-a】

沢2・4層に見られる軽石を主とした堆積物は、その特徴から町田ほか（1984）の十和田aと推定される。町田ほか（1984）によると十和田aの降下テフラは白色軽石と火山ガラス片であり、斜方輝石と単斜輝石を含むことが特徴としてあげられている。今回の試料中にも白色軽石が多く見られ、重鉱物組成分析でも斜方輝石と単斜輝石が観察される。

また、軽石の火山ガラスを用いた屈折率測定結果は範囲がおよそ1.4993-1.5037となり、十和田aの従来値の範囲1.496-1.504（町田・新井、1992）に収まる。

十和田aの降下火山灰は南方に300km、西方に80kmに分布し、東北地方一帯を覆うとされ、火碎流は米代川沿いに堆積していることが報告されている（町田・新井、1992）。噴出年代は915年と推定されている（町田ほか、1984）。

### 4まとめ

狼穴IV遺跡の沢2・4層から採取された試料を分析した結果、これらの堆積物中に含まれる軽石は、915年に噴出した十和田aを起源とするテフラ堆積物であると同定される。

### 参考文献

- 町田洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス－日本列島とその周辺。財團法人東京大学出版会、276p.
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・達藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ。渡辺直徳編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、865-928。
- 横山卓雄・横原徹・山下透（1986）温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定。第四紀研究、25、21-30

表5 堆積物の鉱物分析結果一覧

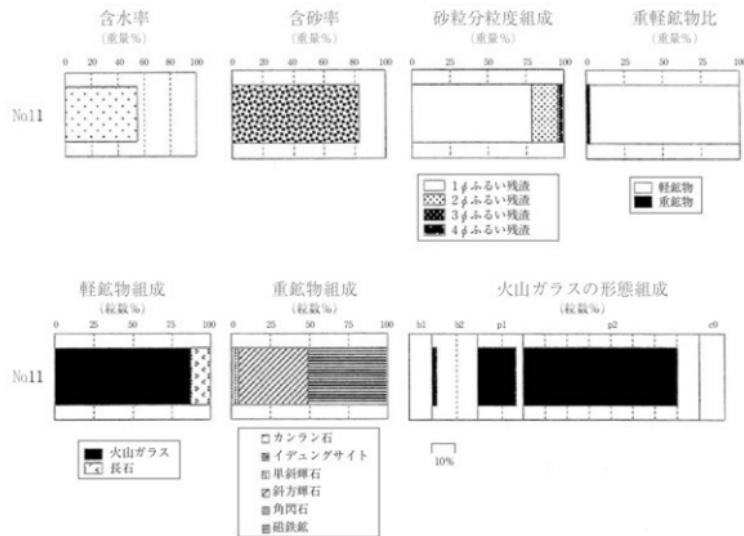
試料番号	含水率 (重量%)	含砂率 (重量%)	砂粒分の粒度組成 (重量%)				重・軽鉱物組成 (重量%)	
			1φ	2φ	3φ	4φ	重鉱物	軽鉱物
No11	54.7	82.7	78.8	17.0	2.5	1.8	2.5	97.5

試料番号	軽鉱物組成(粒数)			火山ガラス形態分類(粒数)				
	長石 Pl	火山ガラス Vg	平板状 b1	Y字状 b2	繊維状 p1	スポンジ状 p2	破碎型 c0	
No11	31	209	-	4	37	168	-	

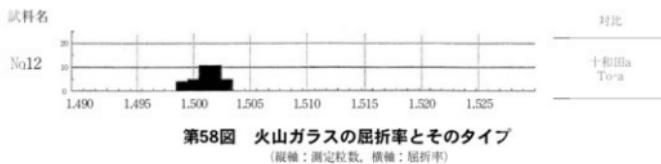
試料番号	重鉱物組成(粒数)					
	カンラン 石 O1	イデュング サイト In	単斜輝石 Cpx	斜方輝石 Cpx	角閃石 Ho	磁鐵鉱 Mag
No11	-	-	10	93	-	107

表6 火山ガラスの屈折率測定結果

試料名	測定対象	範囲(range)	平均(mean)
No12	軽石型火山ガラス	1.4993 - 1.5037	1.5016



第57図 狼穴IV遺跡における堆積物の特徴



## 第6章　まとめ

今回の発掘調査は一般国道7号大館西道路建設事業に伴い、予想される遺跡範囲の南西部を調査した。調査の結果、北西調査区では主に縄文時代の遺構・遺物を、南東調査区では平安時代の遺構・遺物を検出した。以下にこれらの遺構および遺物について検討を加え、遺跡の性格を考えてみたい。

なお南東調査区は次年度以降の調査区が残っており、今回の調査区と同様に平安時代の住居群が展開することが予想されるので、集落の様相は次年度以降の調査によって、より明らかになると考える。

### 第1節　縄文時代・弥生時代

#### (1)　遺構について

縄文時代の遺構は、北西調査区で土器埋設遺構1基と陥し穴を2基検出した。北西調査区は北東から伸びる台地の南西端に位置し、調査区の南西端は台地上平坦面の先端に当たる。土器埋設遺構は、その台地平坦面と南東斜面の傾斜の変わり目付近に位置する。土器を埋めた時期の生活面は不明だが、埋設土器の口縁部が残っていることから、検出面は当時の生活面に近いと考えられる。埋設土器は口縁部径約26cm、残存高23cmで、掘形内に正位の状態で設置されていた。埋設土器内部からの出土遺物はないが、埋設土器内は一度に埋められていること、土器底部が割られていることなどから墓として利用されたと考えられる。埋葬対象は、埋設土器の法量から乳児・小児用と思われる。土器埋設遺構を作った時期は、埋設土器本体の特徴から縄文時代中期前葉～中葉の円筒上層c式期と考えている。

2基の陥し穴は、どちらも台地先端部に立地しており、長軸方向がほぼ同一であること、細長い溝状のタイプで底面に逆茂木などを立てたようなピットが認められないこと、ほぼ同規模であるなどの点で共通点が多く認められることから、同時期に作られた可能性が高い。構築年代は、遺構周辺から出土している遺物が、縄文時代早期末～前期に属する一群と、縄文時代中期前葉に属する一群があり、このいずれかの時期に伴うものと考えられるが、明確な遺構共伴遺物が無いため限定は難しい。

なお、主に縄文時代に利用されていた北西調査区の台地には、わずかに柱穴様ピットが分布している。何らかの生活の痕跡と考えられるが、その実態は不明である。遺物の出土量から考えると、おそらく縄文時代前期に属すると考える。

#### (2)　出土遺物について

狼穴W遺跡から出土した遺物は、少量の土器や石器である。そのすべてが北西側調査区から出土している。時期は大きく分けて、断絶を含むが縄文時代早期末～前期前葉、縄文時代中期前葉、弥生時代後期の3時期である。縄文時代早期末～前期前葉の土器は、早期末～前期初頭の外面縄文、内面条痕文のものや、前期前葉の円筒下層a式直前段階と見られる、口縁部のみ縄文を重ねて施すもの、胴部に結束羽状縄文を施すものが特徴である。中期前葉の土器は、土器埋設遺構の埋設土器1個と、遺構外から1個体出土しただけで、遺構外から出土したものも擾乱により動かされているが、残存状態から乳幼児用の墓として利用された可能性もある。2個体とも特徴から円筒上層c式と判断している。

弥生時代の土器と判断できたのは、図示した1点のみで極めて少量である。土器の特徴から弥生後期と考えている。

石器は剥片石器が少量出土した。多いのは石匙や削器などである。石匙は未製品と考えられるものも含めて、縦型と横型両方が出土している。削器は縦長剥片の両側縁の刃をつける定型的なものである。以上のような特徴と、また土器の出土量から判断して、出土石器の多くは縄文時代前期のものと推測する。

## 第2節 平安時代

### (1) 遺構について

平安時代の遺構は、北西調査区で竪穴住居跡1軒、南東調査区で竪穴住居跡19軒、土坑2基、溝跡3条を検出した。竪穴住居跡の分布は、明らかに南東調査区に偏っている。南東調査区の北西・南西部は沢になるが、北東・南東側には台地平坦面が連続しており、遺構の分布状況から判断して住居群が連続するのは明らかである。このことから、今回の調査で明らかにできたのは狼穴Ⅳの集落の南西部部分といえる。このことを踏まえて以下検討を行っていく。

#### ①竪穴住居跡

竪穴住居跡の中で、直接または間接的に重複して新旧関係があるものを示すと、S I 06A→S I 05、S I 15→S I 09、S I 14→S I 11、S I 18→S I 12という関係になる。(矢印の左が古く、右が新しい。)これにより、本遺跡の住居跡群には最低2時期の変遷があることが分かる。また竪穴住居跡は、様々な要素で分類が可能なので以下に示す。

##### (a) カマドの有無

カマドを付設しないタイプを、今回は竪穴住居跡として扱ったが、本来は竪穴状遺構として捉えるべきものであり、住居跡とは違った機能を持っていたと考えられるので、これらをⅡ類として以下話を進める。これに対しカマドを付設するものはⅠ類とする。

##### (b) カマドの配置

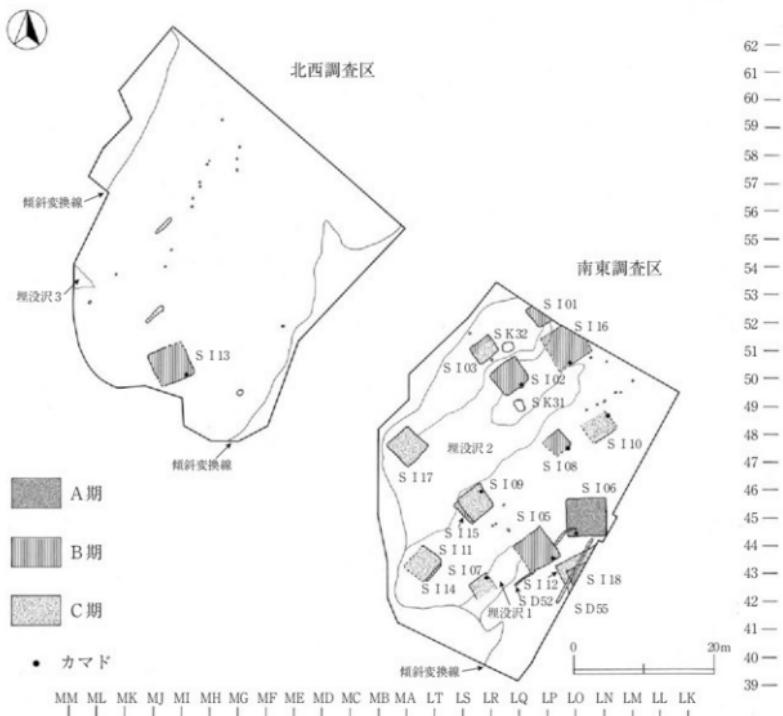
I類の中で、カマドを付設する場所に違いがあるので抜き出すと、i) 南壁に付設するタイプがS I 06A、ii) 南東壁に付設するのがS I 02・05・08・13・16、iii) 北東壁に付設するのがS I 07A・09・10と分けられる。

##### (c) 竪穴住居跡の軸方位

ほとんどの住居跡が北東-南西方向か、北西-南東方向に主軸方向をもつ中で、S I 06A・Bのみが各壁の方針が東西南北を意識して構築されており、際だった特徴を示す。

##### (d) 竪穴住居跡の規模

住居跡の床面積から極小型、小型、中型、大型に分けられる。極小型は床面積8m<sup>2</sup>以下のものでS I 08が該当する。なお、残存部の規模からS I 07A・Bもこれに含まれる可能性が高い。小型は床面積10m<sup>2</sup>前後のものでS I 03・14が該当する。S I 01もこれに含まれるかもしれない。中型は床面積15m<sup>2</sup>前後の規模でS I 02・09・10・11・17が該当する。大型は床面積25m<sup>2</sup>前後の規模でS I 05・06・13が該当する。



第59図 狼穴IV遺跡の構造変遷図

この他、壁溝の有無や貼床の厚さなどでも分類は可能であるが、上記の分類より導き出すまとまりで、概ね住居跡の変遷が把握できるので、以下検討する。

まず、I類のなかで（c）を検討すると、S I 06が抜き出せる。この住居跡で構成される時期をA期とする。次にこのS I 06とS D 52を介在して新旧関係のあるS I 05は、（b）の検討からiiに属している。このiiの要素は、ほぼ2種類にまとめられるほど規格性が強く、同時代性を示すものと考える。そのためS I 05とS I 02・08・13・16・(01)が同時存在として抜き出せる。これらをB期とする。次に同じ（b）を基準としてS I 07・09・10がひとまとまりになる。これらをC期とする。A期とB期とは、S D 52を介在させることにより前後関係を把握できるが、B期とC期は、直接重複関係がなく明確な前後関係を決められない。しかしS I 15→S I 09、S I 14→S I 11、S I 18→S I 12の重複関係がいずれも2段階しかないこと、S I 09が自然堆積で埋没していることなどから、各旧段階をB期、新段階をC期と捉えられると判断した。以上のことから、狼穴IV集落南西部における住居群の変遷は大きく3時期に分けられると考える。さらに（d）の判断を加えると、A期は大型の住居跡だけで構成され、B・C期になると極小型・小型・中型・大型に分かれてくる様相が看取される。

## ②土坑

南東調査区で、平安時代に属すと考えられる土坑を2基検出した。規模・形態はほぼ同じで、堆積土も底面の不規則な窪みを大きな地山土塊を多量に含む土で、平坦にたたき締めて底面を構築した後に黒色土基調の土で大部分を埋め戻しているところまでは同じである。違う点は、SK51は当時の生活面近くまで一気に埋め戻して、その埋め戻し始めの土にわずかに土器を入れているのに対し、SK52は一部窪地を残して、その窪地に多量の土器を投棄していることである。

すでに第4章においても言及しているが、人為的に埋め立てていることから墓としての機能を想定している。そう考えた場合、一括埋め立ての黒色土内または、上部の窪みに土器を投棄する行為を、葬式や墓参りに近い儀式の痕跡と捉えることが可能かもしれない。

## ③狼穴IV集落南西部の遺構変遷

今回の調査区で主に確認した遺構は竪穴住居跡であり、それに伴い少量の墓穴と考えられる土坑、住居の排水溝になる可能性が高い溝跡、機能不明の柱穴様ピットが見つかっている。ここでは住居群の変遷を軸にして、その他の遺構の移り変わりも考えてみたい。

### A期

狼穴IV集落南西部に初めて竪穴住居跡が作られる時期である。この時期に属すと考えられる遺構は、S I 06A・BとSD51である。各壁が東西南北方向を意識しており、住居そのものに関する規制が強かったことがうかがえる。大型の住居が1軒だけであり、開拓や土地開発的な目的をもって、台地上に生活基盤を移した痕跡を見てとることができる。

### B期

狼穴IV集落南西部に広く住居群が展開する時期である。この時期の遺構は、S I 01・02・03・05・(07A)・08・13・14・15・18とSD52である。住居主軸方向を北東-南西もしくは、北西-南東方向にもち、カマドが南東壁に付設される住居が展開する。B期以降の住居跡主軸方向は、住居群が立地する台地の地形に影響される。この台地の北西縁は北東-南西方向にのびており、それと並走して2本の埋没沢が台地の南部に存在する。埋没沢は、堆積土上面にはフラットな状態で十和田a火山灰が積もっているので、当時から埋まっていたのだが、遺構配置図でも分かるように、住居跡はできるだけこの埋没沢を、特に沢2を避けるように占地している。これは、埋没沢内堆積土の主体を成す黒色土が、軟質で湿気を多く含んでいるため、住居築造業並びに実生活の点で不利な条件が多いことが原因である。このため、計画的な住居配置が必要となり、空間利用の意識が村落としてのまとまりを示し始めたと言える。その最大の要因は人の増加と考える。この時期になると、住居の種類にI・II類両方見られること、I類には極小から大型までの規模の較差が生じることなどから、集落内の生活者にバリエーションがでてきたことが分かる。また、それまで利用していなかった、北西調査区の台地上にも住居が築かれており、この時期集落が拡大傾向にあったことがうかがえる。なお、S I 05とS I 18はかなり近接しており、同時存在の可能性は低いと考えられることから、B期内でも前後差はあったと考える。なおB類は、台地北西から西の縁に配置される傾向がある。

## C期

南東調査区に展開する平安時代集落の最終段階である。この時期の遺構は、S I 07B・09・10・11・17・12とSK51・52と考えられる。B期に引き続いて、台地上に広く住居が展開する時期であるが、北西調査区には住居が造られない。住居の配置や住居規模の較差、II類が台地の縁に配置される点は、おおむねB期の様相を踏襲するが、S I 02以北の場所には住居跡が見られなくなる。この変化をもたらしたのは、墓の可能性が高いSK31・32の存在を考える。住居のなくなった空白地帯を墓地として、もしくはその逆の理由で利用したと考える。集落が形成されてから一定の月日が流れ、安定して集落を営むなかで墓地が形成されてきたのではないかと考える。逆に言えば、住居を建てない場所だからこそ2基の土坑が墓穴になる可能性が高いとも言える。

以上の経過を経て狼穴IV集落南西部に確認される住居群は終焉を迎える。これが狼穴IV集落全体に当たはまるかどうかは明らかにしようもないが、この集落南西部のみが集落内で空白地帯となるとは考えにくいので、最低でも集落としての機能はC期をもって終了したと考える。その時期は、出土遺物の特徴から、10世紀中葉と考えている。

## (2) 出土遺物について

平安時代のもので出土したのは土器、鉄器、土製品である。土器はほとんどが土師器の壺で、十和田a火山灰降下後の10世紀前葉～中葉のものである。壺以外に確認できた器種は、壺、壺、広口壺、鍋、瓶が見つかっている。この中では比較的壺が多く、いわゆる赤焼き土器も含まれている。その他器種は各1点だけの出土で、そのうえ破片であり詳細は不明である。須恵器の出土は無く、この点からも10世紀的な様相と言える。鉄器は少なく、また器種を特定するのが困難な状態だった。土製品は、S I 02のカマドから土玉が1点出土した。

以下に土器の特徴を検討して、所属する年代を明らかにしたい。なお検討するのは、出土量が多い壺と比較的出土量のある壺についてである。

## ①壺について

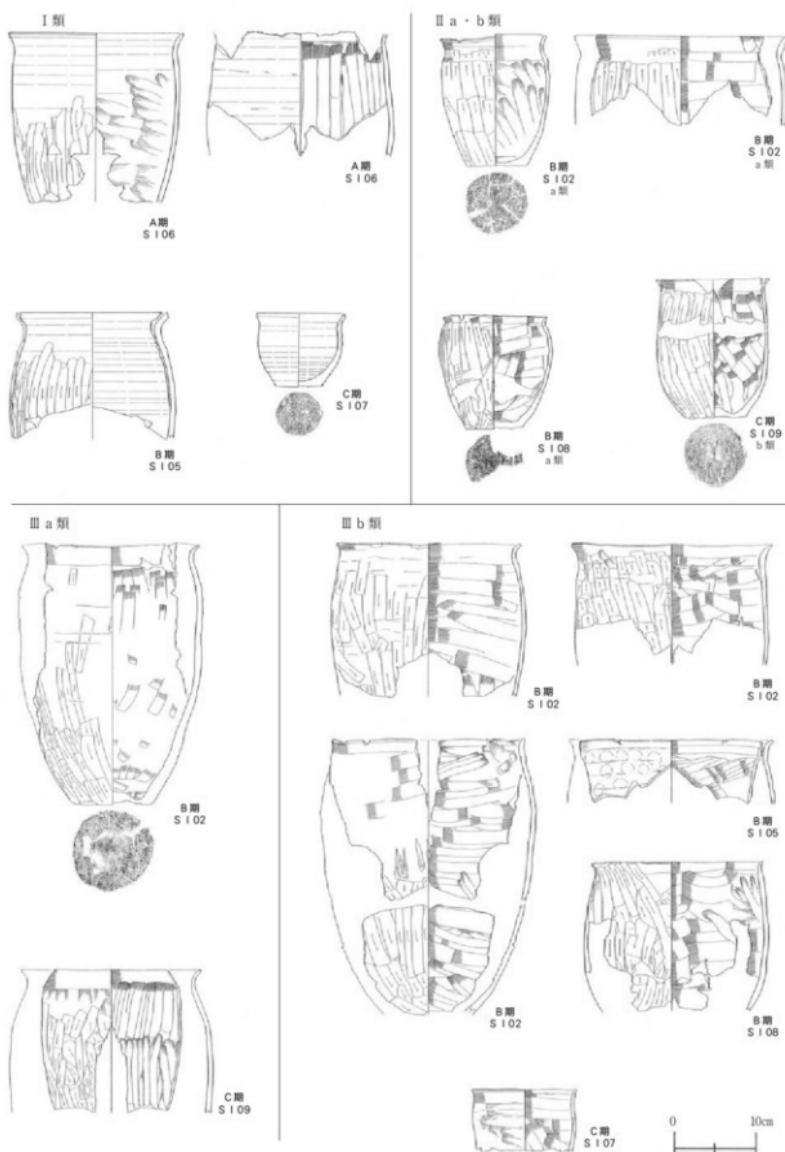
平安時代の出土土器で最も多くほとんどの住居、土坑から出土しているが、ここでは遺構内からある程度まとめて出土した資料を軸に壺の分類と出土傾向を検討してみる。

まず本遺跡から出土した土師器の壺を、製作技法や形態から、以下のように分類した。

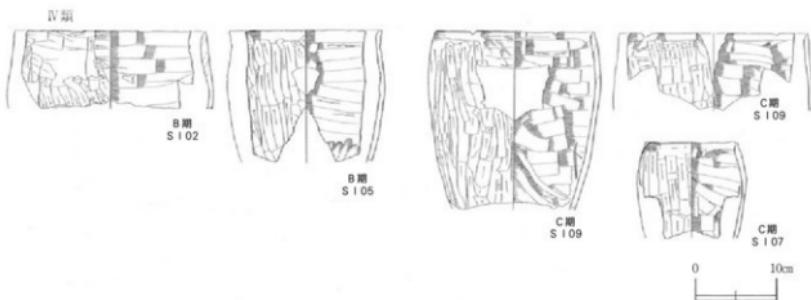
I類 ロクロ調整痕（粘土紐巻き上げ成形だが、完全に消えているものもある）を残すもので、口縁部が外傾・外反する断面形を有する。口端部横に面を形成する。胴部器外面をケズリ、胴部器内面をナデにより再調整を施すものがある。最大径は、口縁部にある場合、胴部中下部にある場合が認められる。

II類 非ロクロ整形で、頭部で屈曲し、口縁部が直線的に外傾する断面形を有する。口端から頭部付近までの範囲に横ナデを、胴部は継方向のケズリ調整を施す規則性が強い。口唇部形態で細分できる。

a) 四角形状の口唇部断面形を有する。胴部外面はケズリ調整だが、下から上に削るもののがほとんどで、頭部の段を飛び越えて外傾する口縁部に工具の痕跡が認められる場合もある。胴



第60図 狼穴IV遺跡出土甕の分類（1）



第61図 狼穴IV遺跡出土壺の分類（2）

上部に最大径を有するものが多い。

b) 口唇部断面形が丸みを帯びる。

III類 非口クロ整形で、頭部でくびれて、口縁部が曲線的に外反する断面形を有する。a) 強く外反するもので、頭部下の肩が張る器形。b) 弱く外反するもので、頭部下の肩が張らない器形のものに細分できる。

a) 口縁部の横ナデはだいたい施されるが、II類のようにナデの上下幅が明瞭で端が稜を成すような強いナデではない。これは、頭部の屈曲がII類に比べて弱いことが一つの理由だと考えられる。胴部外面はケズリ調整だが、上から下に施される傾向が強い。胴部内面のナデは下から上に施される傾向が強い。最大径は胴上部にある場合が多い。

b) 口縁部の横ナデは、しっかり施されるものもあるが、口縁部を一巡させる意図の希薄な資料が多くなる。胴部外面はケズリ調整で、削る方向性に上下どちらかに偏る傾向は見られない。ただ、胴下部のみを削るもののが一定量認められる。胴部内面はナデ調整で、工具により横方向に施すものが多い。最大径は口縁部、胴上部にある。

IV類 非口クロ整形で、頭部のくびれがほとんど無く、口縁部が直立または内湾気味の断面形を有する。口縁部に横ナデが施されるが、その直下まで下から上に削り上げるものが多い。中には口端まで削り上げて、口縁部の横ナデがほとんど残存しないものもある。胴部外面は下から口縁端部まで削り上げることが多い。中には、胴下部は上から下へ削ることもあるようである。また重ねて削ることが多く、ケズリの単位が複雑に切りあっている。胴部内面はナデ調整で、工具による横方向のナデがほとんどである。最大径は概ね胴上部にある。

\* 口縁部径の測定可能（推定を含む）なものについてデータを集積した結果、12~14cmと18~23cmにまとまりが認められた。これをもとに前者を小型タイプ、後者を大型タイプと分類できる。

#### 遺構ごとの出土状況

各住居跡の壺の傾向を表に示した。削平・搅乱が著しく本来の様相が分からぬ住居跡は除き、各

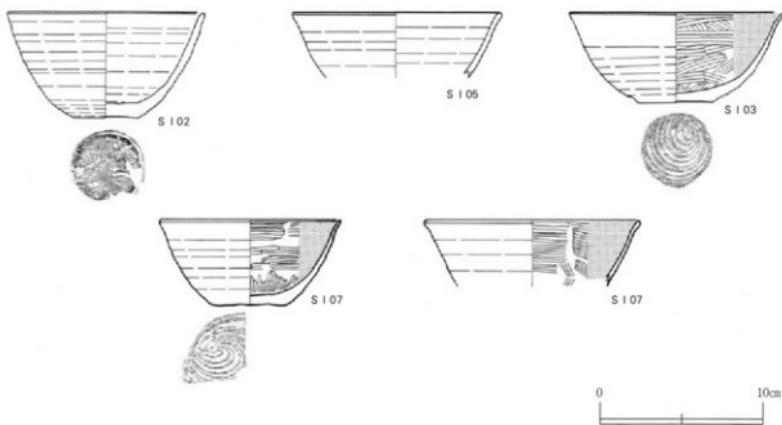
分類ごとの点数は図示しなかった口縁部資料の中で、判別可能な範囲で全て数えた点数であるので、概ね各住居跡の傾向が把握できると考えている。

第7表 住居跡別出土壺の傾向

A期
S I 06A 口縁部付近が分かる資料はI類のみである。他に胴下半部をタタキ整形するものが含まれる。 口縁部分類 I類=3 II a類=0 II b類=0 III a類=0 III b類=0 IV類=0 底部分類 ケズリ=1 砂底=0 薦編圧痕=1 木葉痕=1
B期
S I 02 II・III a・III b・IV類が出土している。II類は小型のものが比較的多く出土している。 口縁部分類 I類=0 II a類=5 II b類=0 III a類=3 III b類=9 IV類=9 底部分類 ケズリ=7 砂底=12 薦編圧痕=2 木葉痕=0 ⇒1点S I 05と接合
S I 05 I・III b・IV類が出土している。 口縁部分類 I類=1 II a類=0 II b類=0 III a類=0 III b類=2 IV類=2 底部分類 ケズリ=2 砂底=1 薦編圧痕=0 木葉痕=0
S I 08 II・IV類が認められる。 口縁部分類 I類=0 II a類=1 II b類=0 III a類=0 III b類=1 IV類=3 底部分類 ケズリ=5 砂底=2 薦編圧痕=0 木葉痕=0
C期
S I 07A I・III b・IV類が出土している。出土壺のほとんどが小型という特徴がある。 口縁部分類 I類=1 II a類=0 II b類=0 III a類=0 III b類=1 IV類=1 底部分類 ケズリ=1 砂底=2 薦編圧痕=0 木葉痕=0
S I 09 III a・III b・IV類が認められる。 口縁部分類 I類=0 II a類=0 II b類=1 III a類=0 III b類=2 IV類=4 底部分類 ケズリ=0 砂底=3 薦編圧痕=0 木葉痕=0

以上の出土状況から、壺I類から壺II・III・IV類へ変遷することや、壺II類はB期に主体があること、C期には壺IV類の割合が高まることが分かる。またA期には砂底が見られず、この時期砂底が主流ではなかった可能性がある。

砂底の出現については、「年代的には大湯浮石層降下直前から白頭山・苦小牧火山灰降下後までの期間（十世紀初頭から十世紀半ばまで）と推定される。」（櫻田1993）という指摘があり、十和田a火山灰降下直前の集落跡である大館市山王台遺跡では砂底が見られず、ヘラナデもしくは木葉痕を残すものが主体である（大館市教委1990）。砂底技法そのものは、横手市富ヶ沢A～C窯跡出土の9世紀中頃の須恵器長頸壺・短頸壺・壺の底部にも認められる（利部1995）ため、技法の出現年代については今後検討を重ねる必要があるが、山王台遺跡や本遺跡の出土傾向からすると、大館市周辺の米代川中・上流域において砂底を有する土師器壺が主流になるのは、おおむね10世紀前葉からと推測される。



第62図 狼穴IV遺跡出土坏集成

## ②坏について

坏は全てで6点出土した。1点は遣構外出土で5点は住居跡内出土である。遣構の前後関係から資料を分けると、住居跡群B期所属のもの3点、住居跡群C期所属のもの2点である。傾向としては、B期の3点中2点がいわゆる赤焼き土器で1点が内黒土師器、C期はいずれも内黒土師器である。狼穴IV遺跡の住居跡は、全て十和田市火山灰降下以後に造られている可能性が高いことから、西暦915年が上限年代として与えられる。一方下限年代については、県内出土のいわゆる赤焼き土器は9世紀以降県内に流通し、後葉にはそのピークに達して、10世紀以降成形の粗雑化、小型化の傾向にあることが知られている(伊藤1995)。このことから本遺跡出土の坏は10世紀前半代のものであると思われる。

## 〈参考文献〉

- 秋田県教育委員会「はりま船道跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第192集 1990(平成2)年
- 秋田県教育委員会「新釣遺跡」秋田県文化財調査報告書第210集 1991(平成3)年
- 秋田県教育委員会「山王岱遺跡」秋田県文化財調査報告書第221集 1992(平成4)年
- 秋田県教育委員会「池内遺跡-遣構編」秋田県文化財調査報告書第268集 1997(平成9)年
- 大館市教育委員会「山王台遺跡」1990(平成2)年
- 大館市史編纂委員会「大館市史 第1巻」 1979(昭和54)年
- 大館市史編纂委員会「大館の歴史」1992年(平成4)年
- 伊藤武士「出羽における10・11世紀の土器様相」「北陸古代土器研究」第7号 1997(平成9)年
- 利部 條「砂底灰器の一考察」「秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第10号」 1995(平成7)年
- 桜田 隆「鹿角盆地に於ける古代土器群の様相」「秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第2号」 1987(昭和62)年
- 桜田 隆「〔砂底〕土器考」「翔古論聚-久保哲三先生追悼論文集」 1993(平成5)年



狼穴IV道路遠景（南から）



狼穴IV遺跡遠景（西から）



南東調査区全景（真上から）



S I 02周辺造構（真上から）



S 106周辺遺構（北東から）



調査前全景（西から）



調査区近景（南東調査区）（東から）



基本土層（北西から）



埋没沢 2 断面（南東から）



人為堆積による埋設状況（S I 02）



自然堆積による埋没状況（S I 09）



焼失家屋の発掘状況 1 (S I 09)



焼失家屋の発掘状況 2 (S I 02)



炭化材に絡まる縄状のもの（S I 02）



曲げ物と思われる炭化物（S I 02）